

兵庫県姫路市所在

大釜瓦窯跡

—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXIII —

1997. 3.

兵庫県教育委員会

兵庫県姫路市所在

大釜瓦窯跡

—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXIII —

1997. 3.

兵庫県教育委員会



大釜瓦窯跡および、一乗寺遠景〔南西から〕



大釜瓦窯跡全景〔西から〕



1・2号瓦窯跡〔西から〕



3・4号瓦窯跡〔西から〕



1号瓦窯跡〔北から〕



2号瓦窯跡〔南から〕



3号瓦窯跡〔南から〕



4号瓦窯跡〔南西から〕

例　　言

1. 本書は、兵庫県姫路市飾東町大釜に所在する大釜瓦窯跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、山陽自動車道（三木～姫路）建設にともない、日本道路公団大阪建設局の依頼をうけて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
3. 調査は、平成5年度に確認調査—調査担当者 甲斐昭光・長濱誠司・岡本一秀／調査期間 平成6年2月7日～2月22日／調査面積 347m²／遺跡調査番号 930164—toを行い、平成6年度に全面調査—調査担当者 森内秀造・井本有二・仁尾一人／調査期間 平成6年6月6日～8月31日／調査面積 597m²／遺跡調査番号 940005・940233・940234・940235—toを実施した。
4. 本書に掲載した遺跡の位置図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「北条・高砂・龍野・姫路」を使用している。
5. 遺跡の測量は、国土座標第V系を基準とし、図面中におけるXおよび、Yは国土座標であり、方位は座標北を示す。標高は、東京湾平均水準（T.P.）を基準としている。
6. 本書の遺物番号は、挿図および、図版と統一しており、挿図の遺物実測図はすべて1/4である。
7. 本書の執筆は、森内秀造・甲斐昭光・長濱誠司・仁尾一人が行った。各執筆分担は、本文目次に記した通りである。
8. 本書の編集は中筋貴美子の補助を得て、仁尾一人が担当した。
9. 本報告にかかる遺物・図面・写真等の資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）及び、魚住分館（明石市魚住町清水字立合池の下630-1）に保管している。
10. 発掘調査および、整理作業に際して下記の方々にご教示、ご指導を頂きました。記して感謝いたします。（敬称略・順不同）
藤原 学・小谷五郎・土山公仁・久保智康・小林章男・小林平一・田中幸夫・黒田慶一・多田暢久
佐伯二郎・河野一也・小林謙一・両角まり・小林 克・太田実秀



目 次

卷首図版

卷首図版 1	大釜瓦窯跡および、一乗寺遠景（南西から）
卷首図版 2	大釜瓦窯跡全景（西から）
卷首図版 3	1・2号瓦窯跡（西から）
	3・4号瓦窯跡（西から）
卷首図版 4	1号瓦窯跡（北から）
卷首図版 5	3号瓦窯跡（南から）
	2号瓦窯跡（南から）
	4号瓦窯跡（南西から）

本文目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経過	(森内秀造・甲斐昭光) 1
第2節 整理作業の経過	(仁尾一人) 2
第2章 遺跡の環境	4
第1節 地理的環境	(長瀬誠司) 4
第2節 歴史的環境	(仁尾) 4
第3章 調査の成果	11
第1節 遺構	(仁尾) 11
1. 遺構の概要	11
2. 瓦窯跡	13
3. その他の遺構	20
第2節 遺物	(仁尾) 27
1. 出土瓦	27
2. 窯壁材	32
出土瓦観察表	37
参考資料瓦観察表	48
第4章 まとめ	73
中近世瓦窯—ダルマ窯—の調査について	(仁尾) 73
大釜瓦窯跡出土瓦について	(仁尾) 77
付 載 一乗寺奥の院南西隅鬼瓦	81
一乗寺奥の院南西隅鬼瓦について	(仁尾) 81
瓦銘—□寛文七丁未年三月日藤原朝臣市兵衛久長作之歳十七才ニ□—について	(仁尾) 85
参考文献一覧	88
報告書抄録	91

挿図目次

第1図 確認調査トレント位置図	3
第2図 遺跡の位置とその周辺	5
第3図 山陽自動車道路線および、調査地地形図	8
第4図 大釜瓦窯跡遺構配置図	9・10
第5図 遺跡の位置とその周辺（大正6年測量図）	11
第6図 1号瓦窯跡遺構平面図	12
第7図 1号瓦窯跡窯体平・断面図	14・15
第8図 2号瓦窯跡遺構平面図	16
第9図 2号瓦窯跡窯体平・断面図	18・19
第10図 3・4号瓦窯跡遺構平面図	21・22
第11図 3号瓦窯跡窯体平・断面図	23
第12図 4号瓦窯跡窯体平・断面図	24
第13図 水溜め遺構平・断面図／1（上）・2（下）	25
第14図 大釜瓦窯跡刻印瓦出土位置図	33
第15図 大釜瓦窯跡刻印瓦刻印位置図	34
第16図 出土瓦の部位名称／平瓦の製作技法	38
第17図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（1）	49
第18図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（2）	50
第19図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（3）	51
第20図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（4）	52
第21図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（5）	53
第22図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（6）	54
第23図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（7）	55
第24図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（8）	56
第25図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（9）	57
第26図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（10）	58
第27図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（11）	59
第28図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（12）	60
第29図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（13）	61
第30図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（14）	62
第31図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（15）	63
第32図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（16）	64
第33図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（17）	65
第34図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（18）	66
第35図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（19）	67
第36図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図（20）	68
第37図 一乗寺参考資料瓦実測図（1）	69

第38図	一乗寺参考資料瓦実測図（2）	70
第39図	一乗寺参考資料瓦実測図（3）	71
第40図	文献 一乗寺に関する古文書／「寛永五年建立記」・「播磨鑑」	72
第41図	現存ダルマ窯／全景 三州瓦 高橋榮、秋人瓦窯・焚口部 藤岡瓦（有）共和建材瓦窯	74
第42図	一乗寺奥の院南西隅鬼瓦実測図	82・83

表目次

第1表	大釜瓦窯跡刻印瓦出土位置一覧表	33
第2表	大釜瓦窯跡刻印瓦刻印位置一覧表	34
第3表	大釜瓦窯跡出土瓦観察表（1）	39
第4表	大釜瓦窯跡出土瓦観察表（2）	40
第5表	大釜瓦窯跡出土瓦観察表（3）	41
第6表	大釜瓦窯跡出土瓦観察表（4）	42
第7表	大釜瓦窯跡出土瓦観察表（5）	43
第8表	大釜瓦窯跡出土瓦観察表（6）	44
第9表	大釜瓦窯跡出土瓦観察表（7）	45
第10表	大釜瓦窯跡出土瓦観察表（8）	46
第11表	大釜瓦窯跡出土瓦観察表（9）／付大釜瓦窯跡出土窯壁材観察表	47
第12表	一乗寺参考資料瓦観察表（1）	48
第13表	中近世瓦窯－ダルマ窯－調査一覧表	76

図版目次

図版1	大釜瓦窯跡遠景（東から） (南から)	
図版2	大釜瓦窯跡全景（南から） (南から)	図版3 1・2号瓦窯跡（南から） (東から)
図版4	1号瓦窯跡（南東から） (北から) (南東から)	図版5 1号瓦窯跡（東から） (北西から) (北から)
図版6	2号瓦窯跡（南西から） (東から) (北西から)	図版7 2号瓦窯跡（東から） (南東から) (北から)
図版8	3号瓦窯跡（西から） 4号瓦窯跡（南西から） 3・4号瓦窯跡および、攢乱土坑（西から）	

図版9	1号瓦窯跡 窯体内瓦出土状況 (南西から)	1号瓦窯跡西 集石検出状況 (東から)
	2号瓦窯跡 東焚口瓦出土状況 (南東から)	2号瓦窯跡南東 瓦および、窯壁材出土状況 (北東から)
	調査区南端U字溝沿い 瓦出土状況 (東から)	4号瓦窯跡東 搾乱土坑内瓦出土状況 (西から)
図版10	2号瓦窯跡 西燃焼室畦 (北西から)	2号瓦窯跡 西燃焼室畦 (西から)
	2号瓦窯跡 東燃焼室畦 (東から)	2号瓦窯跡 西燃焼室畦 (東から)
	2号瓦窯跡 東燃焼室畦 断ち割り状況(北から)	2号瓦窯跡 西燃焼室焰道断ち割り状況 (北から)
	2号瓦窯跡 西燃焼室窯壁断ち割り状況 (西から)	
図版11	水溜め遺構1 完掘状況(南から) 水溜め遺構1 断ち割り状況(東から) 瓦窯跡調査風景	水溜め遺構2 完掘状況(南から) 擾乱土坑完掘状況(西から) 瓦窯跡実測風景 現地説明会風景
図版12	一乗寺全景(南から) 本堂屋根瓦(北から) 奥の院(南から)	三重塔(北東から) 本堂軒下瓦(北から) 奥の院屋根南西隅棟(南西から)
図版13	大釜瓦窯跡出土瓦(1)	図版15 大釜瓦窯跡出土瓦(3)
図版14	大釜瓦窯跡出土瓦(2)	図版17 大釜瓦窯跡出土瓦(5)
図版16	大釜瓦窯跡出土瓦(4)	図版19 大釜瓦窯跡出土瓦(7)
図版18	大釜瓦窯跡出土瓦(6)	図版21 大釜瓦窯跡出土瓦(9)
図版20	大釜瓦窯跡出土瓦(8)	図版23 大釜瓦窯跡出土瓦(11)
図版22	大釜瓦窯跡出土瓦(10)	図版25 大釜瓦窯跡出土瓦製作痕
図版24	大釜瓦窯跡出土瓦(12)	図版27 大釜瓦窯跡出土窯壁材(1)
図版26	大釜瓦窯跡出土刻印瓦	図版29 一乗寺参考資料瓦(1)
図版28	大釜瓦窯跡出土窯壁材(2)	図版31 一乗寺参考資料瓦(3)
図版30	一乗寺参考資料瓦(2)	
図版32	一乗寺奥の院南西隅鬼瓦	

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

発見の経緯

山陽自動車道は正式には「高速自動車国道 山陽自動車吹田山口線」といい、大阪府吹田市を起点に山口県山口市に至る延長約434kmの高速道路である。このうち姫路東インター以西および三木小野インター以東は、平成8年までに全線開通している。残る工事区間は、昭和63年3月3日に施工命令が発令された三木～姫路間の第10次区間のみとなっている。

第10次区間のうち、姫路工事事務所担当区間の加古川市・姫路市工事区域の遺跡については、平成元年5月に分布調査を実施し、この結果に基づいて平成3年度から確認調査を開始している。姫路市飾東町大釜周辺の遺跡については、平成3年度と平成4年度の2年度にまたがって確認調査を実施しているが、今回報告の大釜瓦窯跡については、平成元年度の分布調査では発見されず、山陽自動車道内の遺跡確認調査の当初の対象リストには含まれていなかった遺跡である。

本瓦窯跡の発見の経緯は、平成4年度に森内と仁尾が山陽自動車道No44地点（大釜向山遺跡）の確認調査を実施していた際に、地元大釜在住の岸本興氏が訪問されたことに始まる。この時の岸本氏の話の内容は亡父から自身の畠地（今回の調査地）で法華山一乗寺の瓦を焼いていたという伝承があることを聞き及んでいること、さらに岸本氏自身が、梅木植林のための掘削時に多量の瓦が出土したというのであった。これを受け、平成5年3月に当該地の踏査を再度行ったところ用水路の周辺から瓦の断片を2～3点採取した。採取点数はわずかであったが、採取瓦が中世～近世頃の年代のものと見られるいぶし瓦であり、また、当該地と一乗寺までわずか2.5kmの距離しかないことを考え合わせて、伝承通り一乗寺の瓦の製作場所の可能性があると判断したので、道路公団と協議し、確認調査を実施することになった。

確認調査

確認調査に先立って平成5年9月に実施した磁気探査では、鉄片の散布等のために、窯跡の位置を限定できるような良好な資料が得られなかった。このため、先述した瓦片の採集地点を中心に、幅2mのトレンチを10箇所設定し、平成6年2月7日より調査を開始し、同月22日にこれを終了した。

調査の結果、岸本氏が植林の際に多量の瓦を発見した地点の南側に近接して設定した、トレンチ6・9において長大な落ち込み（全面調査の「擾乱土坑」）を検出した。その規模は長さ32m、幅4.5mであり、埋土からは、焼土を伴った多量の平瓦・丸瓦とともに、鬼瓦・軒平瓦の出土が認められた。地形的な検討からは、当地に瓦葺きの大規模な建物跡の存在は想定しがたいため、この遺構は、伝承通りの瓦窯に関連する何らかの施設である可能性が高いと判断された。

この他のトレンチでの調査結果によれば、遺跡の範囲は、これより南北方向及び東方には大きく広がらないことが明らかであるが、西方は北側の山地からの流水のため調査区が設定できなかつたため、こちらに遺跡が広がる可能性は残されたままとなつた。

全面調査

確認調査の結果を受けて、平成6年6月6日より全面調査を開始した。確認調査結果の通り焼土を伴つ

た多量の瓦類が出土し、西端から窯体（4号瓦窯）の一部が検出された。4号瓦窯の大部分は瓦投棄のための掘り下げの際に削平されていたが、瓦を含んだ灰層が調査設定区域外に延びていたので西側に3m拡張した。この拡張区からは当初調査設定区内の瓦窯とは別の瓦窯（3号瓦窯）の東燃焼室が検出された。瓦を含んだ包含層はさらに西の調査対象区外に続いており、地形の状況からみてその遺構が残存している状況が想定されたので、6月30日に道路公団と協議を行い、調査確認トレーニングを設定し、バックホーを利用して掘り下げを行った。トレーニング内から窯壁・焼土層および瓦類が発見され、遺構の広がりが明らかになった。新たに遺構が発見された西側の地区は調査対象から除外していた地区であり、道路公団と協議した結果、工事が迫っていることもあり、西側の地区を追加して調査を続行することで合意した。

西側の追加地区は7月4日より行い、新たに2基の瓦窯（1号・2号瓦窯）を発見し、8月31日に合わせて4基の瓦窯跡の発掘調査を終了した。また、7月31日には現地説明会を実施している。

なお、確認調査および、全面調査期間中、以下の方々に現場補助員・室内作業員・事務員として参加頂いた。

中北敦子・越智みや子・今井龍三郎・菊島昌子・佐藤朋子・富永浩子・永井弘子・藤田 泉

第2節 整理作業の経過

出土遺物（瓦）の整理作業は、発掘調査期間中に水洗いおよび、ネーミングを行っていたため、以下の作業を日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて平成7・8年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

平成7年度

接合補強・実測（出土瓦100点、参考資料瓦7点）・写真撮影等を実施した。

整理担当職員 整理普及班 主 任 甲斐昭光

調査第2班 技術職員 仁尾一人

整理技術嘱託員 主任技術員 中筋貴美子・宮田麻子

企画技術員 矢島 駿・本塙田英子・香川フジ子

図化技術員 早川亜紀子・佐伯純子・蓬萊洋子・石田裕子・庄山郁子

島村順子・中西睦子

日々雇用職員 蘭田美穂・森田 泉・西馬佐紀

平成8年度

トレース・レイアウトを実施し、発掘調査報告書を刊行した。

整理担当職員 整理普及班 技術職員 中村 弘

調査第3班 技術職員 仁尾一人

整理技術嘱託員 主任技術員 中筋貴美子

図化技術員 中田明美・藏 幾子・武田恵美子

日々雇用職員 河上智晴



第1図 確認調査トレンチ位置図

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

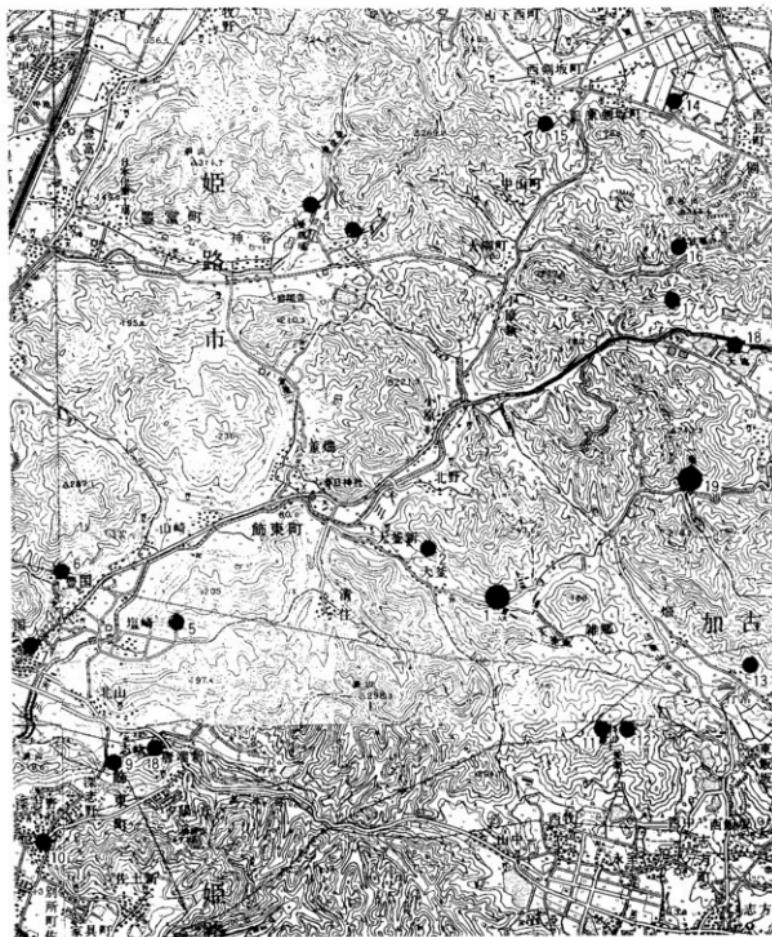
大釜瓦窯跡の所在する姫路市飾東町大釜は、姫路市東端に位置し加古川市に接している。ここは播磨を代表する2本の河川、加古川と市川の中間にあたり、いわゆる東播磨地域と西播磨地域の境界でもある。この地域に中規模河川の法華山谷川と天川が流れている。両河川とも加古市南端の山中を源流とし、法華山谷川は加古川市域を、天川は姫路市域を南流し、高砂市曾根付近で播磨灘に流れ込んでいる。大釜周辺は、天川の上流域、支流の雑郷川流域に位置する。天川は加古市古法華付近を源流とし、地域の首部である八重畠付近で各支流を集め川幅を増す。飾東町の狭い谷平野を抜けると国分寺台地の東を流れ、河口に至る。河口付近は姫路市と高砂市の市境となる。また、国分寺台地上に位置する御着城の櫓としても機能していた。天川支流の雑郷川流域は南北両側を200mを越す山地に挟まれ、川沿いに狭い谷底平野が形成されている。南側の山裾に一乗寺から円教寺へ至る西国巡礼道が東西に走り、街道沿いに集落が形成されている。大釜集落の西側、八重畠集落との間の天川と雑郷川の合流点付近には大釜集落から分村したと考えられる大釜新が同じく街道沿いにある。

瓦窯跡は、大釜集落の北東約1kmにあり、雑郷川右岸の小規模な扇状地上に立地している。すぐ東側の低い尾根上が現在、加古川市との市境となっており、ここは天川水系と法華山谷川水系との分水界ともなっている。瓦窯跡との関連をもつ一乗寺は北東約2.5kmにあり、法華山谷川の源流にあたる。一乗寺は、加古川市法華口集落から北に延びる谷の奥に位置する。瓦窯跡から一乗寺へは交通の支障となるような困難な地形ではない。

第2節 歴史的環境

姫路市の北東部に位置する飾東町大釜の周囲には、鎌倉時代の基壇および、礎石建物跡が発見された大釜向山遺跡が確認されているのみであり、その他の遺跡の存在は知られていない。これは、大釜の地が、室町時代以降より西国巡礼道の街道沿いにあたるもの、雑郷川沿いの狭い平野部に位置していることや、現在の大釜集落付近に人々の生活の場が続いていることによるものと思われる。しかし、比較的平野部がひらけた天川流域の豊国には、6世紀に築造された丁字形構造をもつ横穴式石室古墳の飾東1号墳をはじめ3基からなる飾東古墳群や、豊國廃寺が存在している。また、北側の山を越えた加古市南西部には、弥生時代から鎌倉時代まで続く猫尾遺跡や古墳時代後期の円墳である三口北山古墳の他に、白鳳期の三尊石仏像で知られる古法華石仏がある。古法華石仏付近では、奈良時代の須恵器や瓦の散布が報告されており、周辺には山岳寺院が所在していたという説もある。この加古市には、繁昌廃寺、殿原廃寺、吸谷廃寺、野条廃寺など白鳳時代の寺院跡が数多く、早くから仏教を受容した地域であったと考えられる。さらに大釜の北東の旧加西郡（現在の加古市）、旧飾東郡（姫路市）、旧印南郡（加古川市）との郡境付近には、西国三十三か所巡礼第二十六番の札所、法華山一乗寺が所在している。一乗寺は、大釜瓦窯跡と密接に関係するため、これよりその歴史を述べるとともに、瓦窯が構築されたと考えられる近世初頭における大釜の地と一乗寺の歴史的な環境をおとてみたい。

法華山一乗寺は、白雉元年（650）法蓮仙人によって建立されたと伝えられ、元亨2年（1322）に虎閣師練の著した『元亨訖書』には「其山八榮」と、南北朝の頃に作成された播磨国の地誌である『峰相



- | | | |
|------------|-------------|--------------|
| 1. 大釜瓦窯跡 | 2. 大釜向山遺跡 | 3. 奥の道内古墳 |
| 4. 塙瀬古墳群 | 5. 塙崎1号窯跡 | 6. 鮎東古墳群 |
| 7. 豊国廃寺 | 8. 志吹池窯跡 | 9. 小丸山古墳 |
| 10. 深志野瓦窯 | 11. 大龜山祭祀遺跡 | 12. 宮谷遺跡 |
| 13. 池の内遺跡 | 14. 刺坂東山古墳群 | 15. 刺坂熊野神社古墳 |
| 16. 古法華石仏 | 17. 三口北山古墳 | 18. 猫尾遺跡 |
| 19. 法華山一乘寺 | | |

第2図 遺跡の位置とその周辺

記』には「谷蓮花如、峯八葉分」と記載されている播磨六天寺⁽¹⁾のひとつに数えられる天台宗の古刹である。一乘寺は現在、加西市坂本町に所属するが、上記の文献には、「播州印南郡法華山」および、「当国（播磨国）印南郡」と記載されており、旧加西郡（現加西市）に所属したのは、元禄12年（1699）9月の和解以後⁽²⁾のことである。一乘寺が史料にはじめて登場するのは、応保元年（1161）の『寺門高僧記』所収、覚忠三十三所巡礼記⁽³⁾である。このため、一乘寺の開祖を法道仙人することは伝説とされており、播磨国の他の山岳寺院と同様に山房、山寺を前身として、天台宗の播磨進出の過程において天台寺宗化したものと考えられている。近世に至るまでの一乘寺については、木造あるいは、石造遺物に鎌倉時代の銘文が断片的に残っているが、文献史料では数例が確認されるに過ぎない。そのひとつに、弘安8年（1285）7月、西大寺の律僧寂尊が来山し、2124人に菩薩戒を授けたことがあり、その他には、足利高氏が京都六波羅探題を滅ぼした知らせを聞き、後醍醐天皇が伯耆国船上山から帰京の途中行幸したことなどがある。また、南北朝期に播磨国の赤松世貞・則祐らが、伯耆國の山名時氏との戦いにおいて、法華山に城を構えたことを『太平記』は伝えている。

江戸時代に入り一乘寺は、天台宗寺院として東叡山寛永寺の支配下にあったとされている。そして、元和3年（1617）正月7日、本堂および、鐘楼が焼失し、その11年後の寛永5年（1628）には本堂が再建されたことが『寛永五年建立記』（第40回 文献）に記載されている。この文献⁽⁴⁾には、本堂の再建に関し、次のようなことが記載されている。まず、元和3年の秋に、当時の姫路城主本多忠政が、本堂再建を家臣古澤五郎左衛門尉に命じたこと。再建の良材を四国、九州の遠方より調達し、寛永4年（1627）12月より翌5年（1628）正月にかけ、諸材を高砂浦に運び込み、同年初夏にはそれらを寺内に運び入れたこと。今月（4月）24日に大工初⁽⁵⁾、6月18日に柱立、7月11日に上棟、9月26日に奉使本尊、したこと。普請中の夫夫はのべ11万5千人に及んだことなどである。また、『播磨鑑』の法花山一乘寺記（第40回 文献）にも、本堂再建に関することが記載されているが、記述に若干の相違がみられる⁽⁶⁾。大釜瓦窯跡は、これらの文献に記載された本堂再建時の瓦を焼成した瓦窯跡であると考えられ、これより章を改めて発見された遺構や出土瓦を説明していくものである。

なお、一乘寺の建築物は、三重塔が国宝に指定されている他、護法堂、妙見堂、弁天堂、本堂が重要文化財時に、鐘楼が県指定文化財となっている⁽⁷⁾。さらに、一乘寺が所蔵する文化財には、絹本着色聖徳太子及天台高僧像10幅（国宝）や、白鳳時代の作の本尊（秘仏）、前立の聖観音立像の2躯（いずれも重要文化財）など多くのものがある⁽⁸⁾。

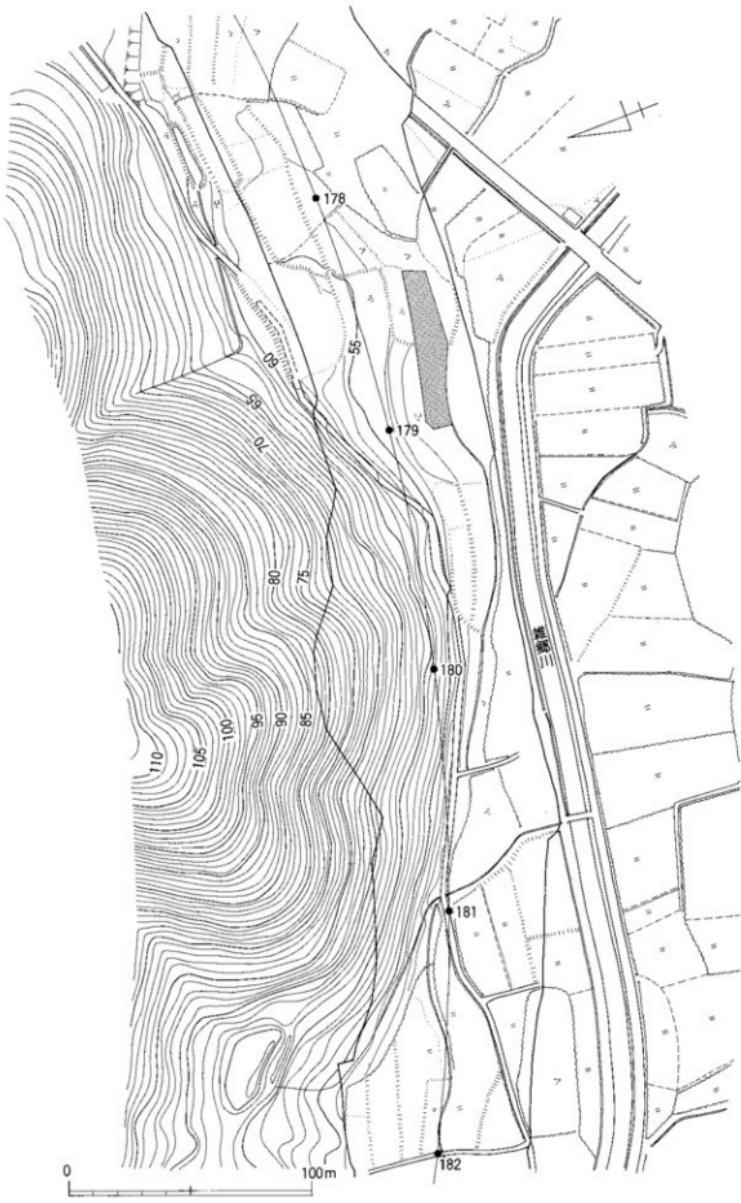
また、大釜より南西約3kmの深志野では、昭和50年頃まで操業していたダルマ窯が存在していた（第2図 10、深志野瓦窯）。旧播磨国では、中世より寺院に加え、城郭にも瓦が葺かれていたことが採集資料や出土遺物などで明らかになっている⁽⁹⁾。このため、姫路の地は、室町時代中期より「姫路系瓦工」と呼ばれる瓦製作集団⁽¹⁰⁾が存在していたことや、現在でも多数の瓦製作所が操業を行っていることなどから、瓦との関係が深い土地といえる。

（註）

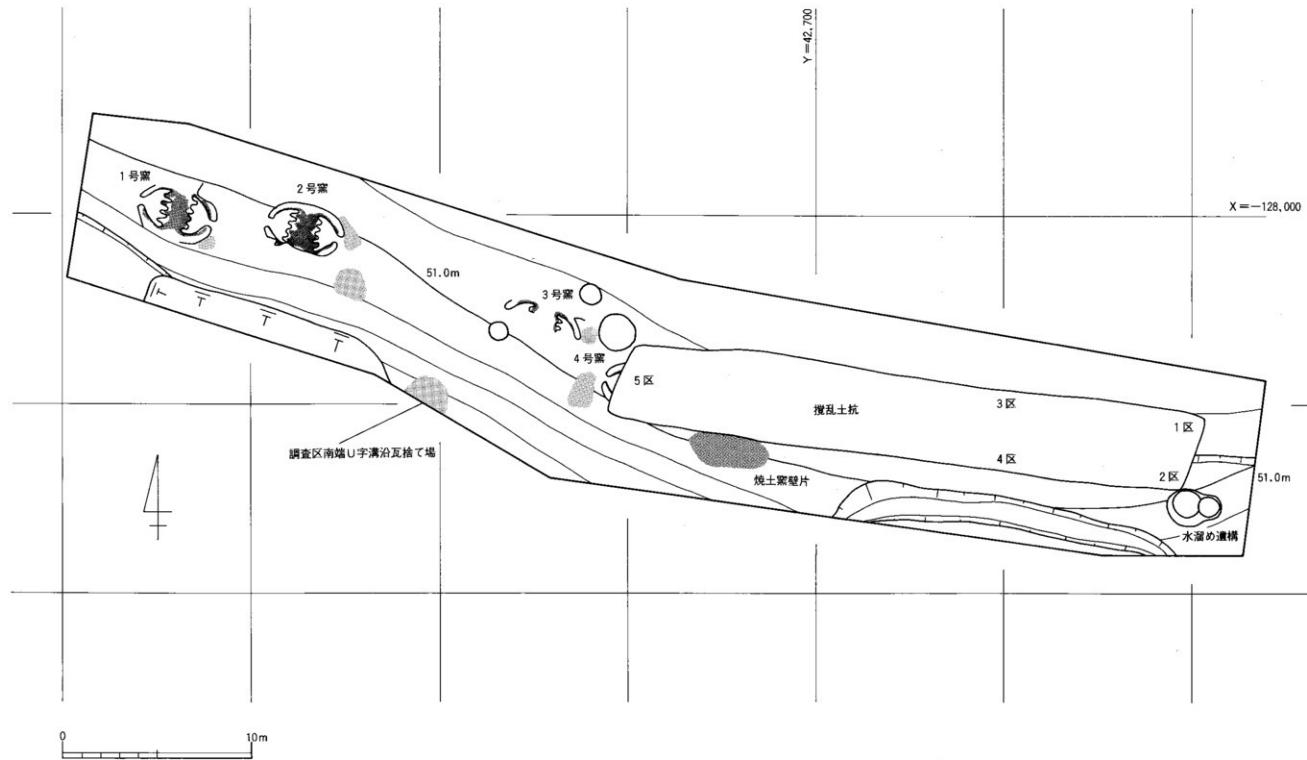
- (1) 播磨六天寺は、書写山円教寺、増位山隨願寺（以上、姫路市）、法華山一乘寺、蓬萊山普光寺（以上、加西市）、妙徳山神積寺（神崎郡福崎町）、八徳山八葉寺（神崎郡香寺町）の六つの天台寺院をいう。
- (2) 法華山をめぐって印南郡24か村と加西郡三口、坂本両村との間で郡境について争論となり、元禄12年（1699）三口、坂本両村が京都の郡代所に訴訟を起こした。郡代所から検使役として小林源四郎と

辻弥五左衛門の両人が実情を調査し、9月に和解が成立した。その時、一乗寺の境内の範囲は、南は笠掛岩のはし限り、西は古林の限とし、加西郡に属する。東は飯森が峯、加なは峯、不老が峯の通りを加西と印南郡の郡境と決められた（『地蔵院文書』より）。

- (3) 西国三十三か所観音巡礼の確実な初見とされている『寺門高僧記』所収、覚忠三十三所巡礼記に「十四番、同國（播磨国）印南郡法華寺」と記載されている。なお、ここでも一乗寺の所在は印南郡となっている。
- (4) 快倫が寛永6年（1629）に著した『寛永五年建立記』の寛永五年建立事による。
- (5) 第40図 文獻の『寛永五年建立記』寛永五年建立事は、兵庫県立歴史博物館編集の『法華山一乗寺』兵庫県立歴史博物館総合調査報告書Ⅰに出典をもとめ、寛永4年12月以降の本堂が再建される作業状況を記述している。文中には「（前略）、同首夏運送寺裏、即今月二十四日大工初、六月十八日柱立、（後略）」と記載されており、ここでは「首夏」を「①夏のはじめ。初夏。②陰曆四月の異称。」（新村出編 『広辞苑』第四版 1991）より、陰曆の4月とし、「今月二十四日」を4月24日と考えた。但し、「今月」の「今」の字は「令」の書体と酷似しており、混同されやすい。「令月」は、「①万事をなすのによい月。めでたい月。②陰曆二月の異称。」（前出『広辞苑』第四版）とされ、他の月の記載が六月、七月あるいは、臘月（12月）となっていることから、「今月二十四日」は2月24日と読める可能性も考えられる。しかし、『寛永五年建立記』の原本は現在、所在不明となっており、「今」と読むか「令」と読むかについては確認できない。このため、文中での時間的な流れとしては、4月（首夏）に諸寺を寺裏に運び、同月24日に大工初とした方が妥当であると判断した。
- (6) 『播磨鑑』法花山一乗寺記（第40図 文獻 以下『播磨鑑』）には、「（前略）、經始ス於寛永戊辰臘月、奏ス成ニワ明年己巳九月ニ、（後略）」と記載されている。しかし、寛永戊辰の年は寛永5年（1628）であり、明年己巳の年は寛永6年（1629）である。このため、『播磨鑑』を記載通りに読むと寛永5年の12月に再建を開始し、翌寛永6年の9月に本堂が完成したことになり、『寛永五年建立記』の年代とは1年のずれがみられる。これは、同時代資料である『寛永五年建立記』とは異なり、およそ100年後の享保己酉の年（享保4年 1719）に書かれたことによる間違いであると考えられる。
- (7) 三重塔は、承安元年（1171）に建築された県下最古のものであり、護法堂は室町初期、妙見堂および、弁天堂は室町中期、本堂は寛永5年（1628）、鐘楼は寛永6年（1629）にそれぞれ建築されている。
- (8) この他にも、彫刻では、木造法道仙人立像、木造僧形坐像が、絵画では、絹本着色阿弥陀如来像、絹本着色五明王像（いずれも重要文化財）などが所蔵されている。
- (9) 室町時代、播磨国の守護赤松氏の居城であった置塙城や、播磨国人恒屋氏の居城である恒屋城では瓦は採集されており、「姫路系瓦工」の本拠地といわれる英賀の地の英賀城、市川を挟んだ東の小寺氏の御着城、西の秀吉時代の姫路城からは、瓦が出土している。
- (10) 付載（「瓦銘一□寛文七丁未年三月日藤原朝臣市兵衛久長作之歳十七才ニ□一について」）において詳細を記述している。



第3図 山陽自動車道路線および、調査地地形図



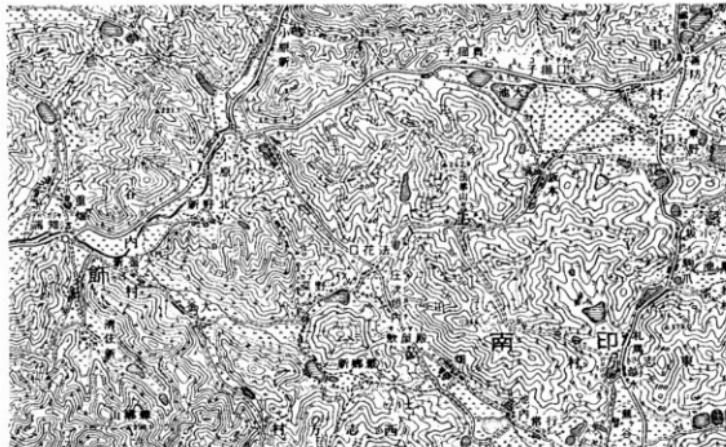
第4図 大壹瓦窯跡遺構配置図

第3章 調査の成果

第1節 遺構

1. 遺構の概要

調査地は、周辺の山々からなれば独立した標高約240mの山塊から派生した丘陵の南緩斜面の末端部に立地している。眼前を天川の支流である雑郷川が東から西に流れしており、標高はおよそ51mを測る。大釜地区では、古くから法華山一乗寺に関係した瓦窯があったと伝えられており、今回の発掘調査により、その伝承を裏付ける瓦窯跡が発見された。南向きの東西に長い緩斜面には、江戸時代初期の瓦窯跡（通称「ダルマ窯」）4基、瓦捨て場、土坑、水溜め遺構等が確認された。この南向きの緩斜面は、背面（北）に山林が広がり、雑郷川が流れる前面（南）および、左右（東西）には障害となるもののがなく開けた、終日日当たりの良好なところである。瓦窯跡は、1号瓦窯跡と2号瓦窯跡は隣接し、若干の空間をおいて、3号瓦窯跡と4号瓦窯跡が近接している。1号瓦窯跡と2号瓦窯跡は地下部分が比較的良好な状態で残存していたが、3号瓦窯跡は南半分が削平され、4号瓦窯跡においては、後世の掘削によりわずかに西側の焚口部のみが残存しているにすぎない状態であった。また、1号瓦窯跡と2号瓦窯跡の南は約0.6mの落ち込みがあり、その東端では多量の炭を含む瓦捨て場が確認された。さらに、各々瓦窯跡焚口周辺あるいは、2号瓦窯跡と3号瓦窯跡との間には、瓦片や窯壁片と考えられる焼成をうけた粘土塊などが散乱していた。この他、3号瓦窯跡、4号瓦窯跡の焚口近辺では、直径約1.0mから1.8mの円形の土坑が3基、調査区南西隅より水溜め遺構などが確認されている。



第5図 遺跡の位置とその周辺（大正6年測量図）



第6図 1号瓦窯跡遺構平面図

2. 瓦窯跡

1号瓦窯跡

1号瓦窯跡は、4基検出された瓦窯跡のうち最西端に位置している。瓦窯の形態は、いわゆる「ダルマ窯」と呼ばれる平窯であり、焼成室を中心におき、左右（東西）両側にそれぞれ燃焼室と焚口を配する窯体構造をもつもの¹⁰⁾である。燃焼室と焼成室とは、4本の畦¹¹⁾と燃焼室から焼成室に約30°の傾斜角度をつけた5本の溝状の焰道によってつながっている。燃焼室は半円形を呈し、直線側に畦と焰道が、その向かいに焚口がつくられている。標高は焚口および、燃焼室で約50.6m、焼成室では約50.8mである。瓦窯跡は、主軸（左右焚口を結ぶ方向、以下同）をN74°Eにほぼ東西方向を指しており、南向きの緩斜面に沿って構築されている。瓦窯の天井あるいは、壁などの地上部分は失われていたが、地下部分は遺構検出面下約0.2mがほぼ完全な状態で残存していた。

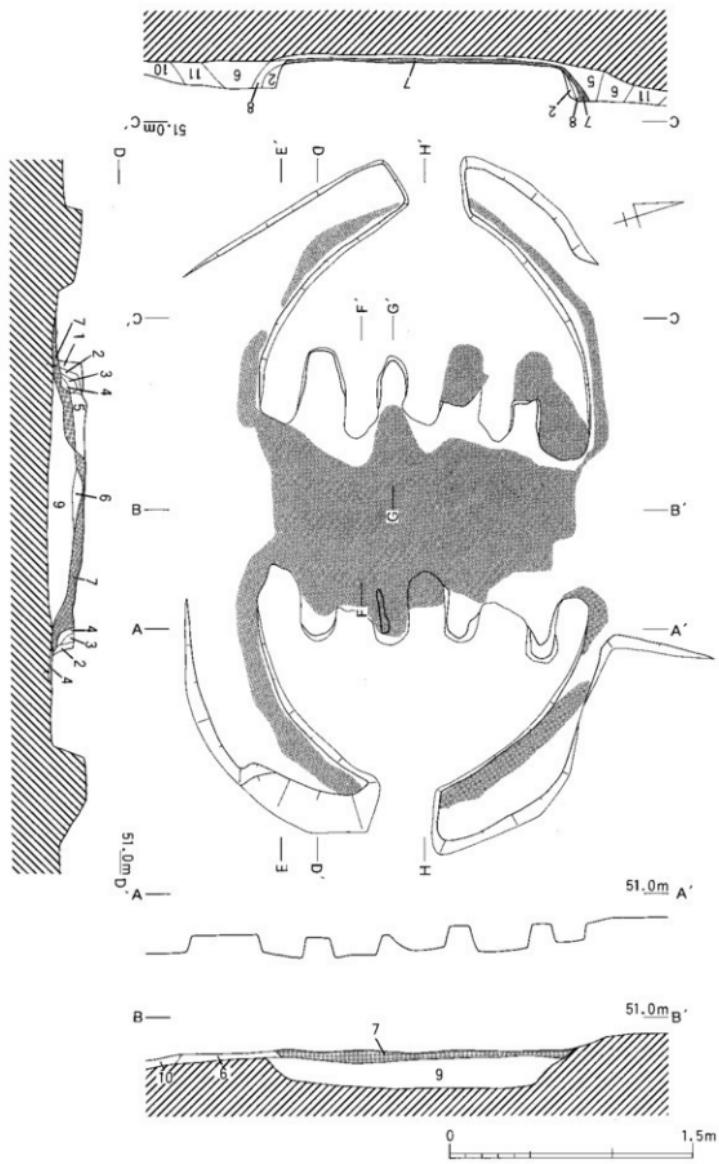
瓦窯跡は全長4.3m、幅2.8mを測り、平面形は楕円形を呈している。各部の計測値¹²⁾は、左右両焚口の幅は0.36mであり、窯壁の厚さは検出された遺構面より約0.4mから0.6mを測るものと推定される。燃焼室は幅約2.0mを測り、4本の畦と5本の焰道がほぼ均一な幅で配されている。畦および、焰道は破損しているものが多く、それぞれの正確な大きさは不明であるが、残存しているものでは、畦は長さ約50cm、幅約20cm、高さ（残存高）約15cmを測り、焰道は長さ約40cm、幅約20cmである。また、焼成室については、長さ約0.9m、幅約2.0mを測るものである。

焼成室の中央部では、操業時の床面が消失し、赤褐色の焼土層が広い範囲にわたって確認された。このため、検出された地下部分は削平をうけており、焼成室と燃焼室との高低差は、現存の15cm以上あつたものと考えられる。しかし、畦の上面あるいは、焰道上方および、焼成室の一部には、灰白色の還元層が部分的に確認されていることから、全面にわたる著しい削平はうけていないものと思われる。

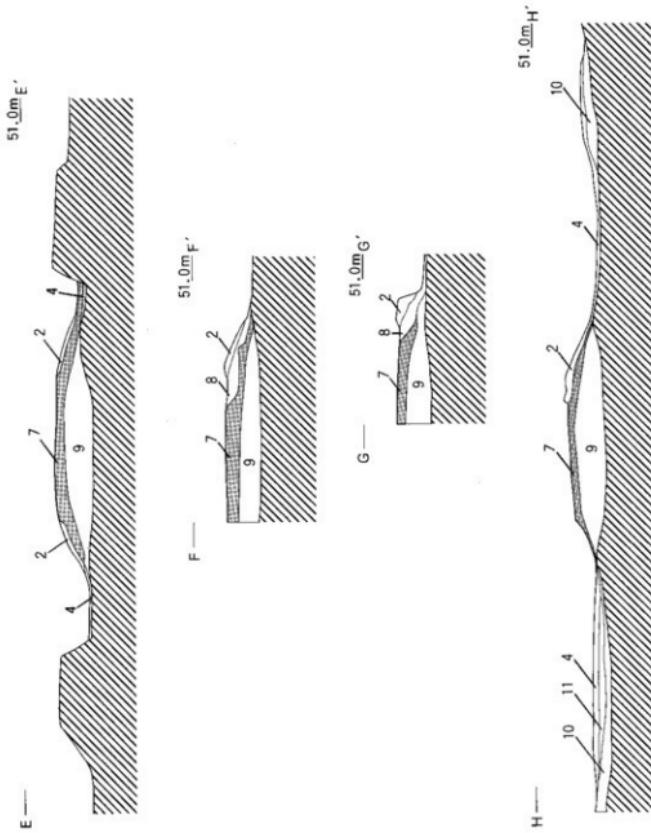
東西両側の焚口および、燃焼室では、焼土あるいは、炭を多量に含んだ土が堆積しており、それらを除去していくと多数の瓦片と、畦上方に接続され分焰柱として使用されていたと思われる円柱形の窯壁材が出土した。窯体内から出土した瓦類は、平瓦、軒平瓦、面戸瓦、鬼瓦などであり、そのうち、東西両燃焼室より出土した瓦片には接合可能な同一個体のものが含まれていることが判明した（第20図、15鬼瓦他）。のことから、この瓦窯は、焼成時に破損した瓦片を破棄した状態で操業自体を終了し、埋没したものと考えられる。

また、窯体の断ち割り調査より、瓦窯の地下部分の構築状況が想定される。まず楕円形に0.2m以上地山を掘り込み、約0.4mから約0.6mの窯壁の厚さを残し、周囲を若干掘り下げる。掘り込んだ楕円の中央に左右に傾斜するように山形状に礫を敷きつめる。そしてそれらを覆うように内側から真砂土、スサ混じりの粘土を貼りつけ、畦および、焰道を成形し、窯体の下部構造を完成させる。以上の構築過程において、1号瓦窯跡の地下部分の特徴として、燃焼室の床面は船底状を呈しない焚口との高低差がない平坦な面であり、また、地下部分の窯壁は、楕円形に掘り込んだ地山の内面にスサ混じりの粘土を貼りつけた構造である、ことなどが挙げられる。

この他、西焚口の南壁際から調査区西壁際までの広い範囲より、直径約10cmから直径約30cmの礫が検出された。これらは、意図的に敷かれたものと考えられるが、表面に熱をうけた痕跡はなく、詳細などは不明である。



第7図 1号瓦窯跡窓体平・断面図



- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1. 灰白色還元層 | 7. 薄赤褐色酸化層 |
| 2. 青灰色還元層 | 8. 薄赤褐色酸化層(若干炭含む) |
| 3. 赤灰色酸化層 | 9. 褐灰色礫層 |
| 4. にぶい赤褐色酸化層 | 10. 灰黃色(小礫含む) |
| 5. にぶい黄色酸化層(小礫含む) | 11. 浅黄色 |
| 6. 浅黄色 | |

第7図 1号瓦窯跡窓体平・断面図



第8図 2号瓦窯跡遺構平面図

2号瓦窯跡

2号瓦窯跡は、1号瓦窯跡の東、約2.8m（1号瓦窯跡東焚口と2号瓦窯跡西焚口の間の距離）の地点に位置する。瓦窯の形態は、1号瓦窯跡と同様「ダルマ窯」であり、天井あるいは、壁などの上部構造は存在せず、遺構検出面下約0.2mが残存していた。瓦窯跡の南壁は、一部削平をうけているが、燃焼室内部の畦および、焰道部はほぼ完存する状態で検出された。主軸はN76°Eを測り、緩傾斜地形に沿ったほぼ東西方向を指している。標高は焚口および、燃焼室で約50.8m、焼成室では約51.0mである。

瓦窯跡は全長4.2m、幅2.7mを測る楕円形を呈している。各部の計測値は、東焚口の幅は0.32mを測り、西焚口の幅は若干狭い0.28mである。窯壁の厚さは、東焚口の北壁において、焚口周辺に散乱する瓦片より操業当時の窯体外側のラインを確認することができ、0.48mを測るものと判明した。その他の東焚口の南壁および、西焚口の南北両壁の厚さについてもおよそ0.4mを測り、0.48mに近い数値を計測している。これらの数値は、1号瓦窯跡の窯壁においても近似しているため、大釜瓦窯跡の窯壁の厚さは、約0.5mを測るものと考えられる。また、燃焼室の幅は、西側は一部削平をうけており不明であるが、東側では約2.0mを測る。燃焼室内部の畦および、焰道については、西側の4本の畦がほぼ完存しており、長さ約45cm、幅約20cm、高さ（残存高）18cmを測るものである。焰道は西側の最南端の1本が削平されているが、その他の残存しているものでは、長さ40cm、幅20cmである。

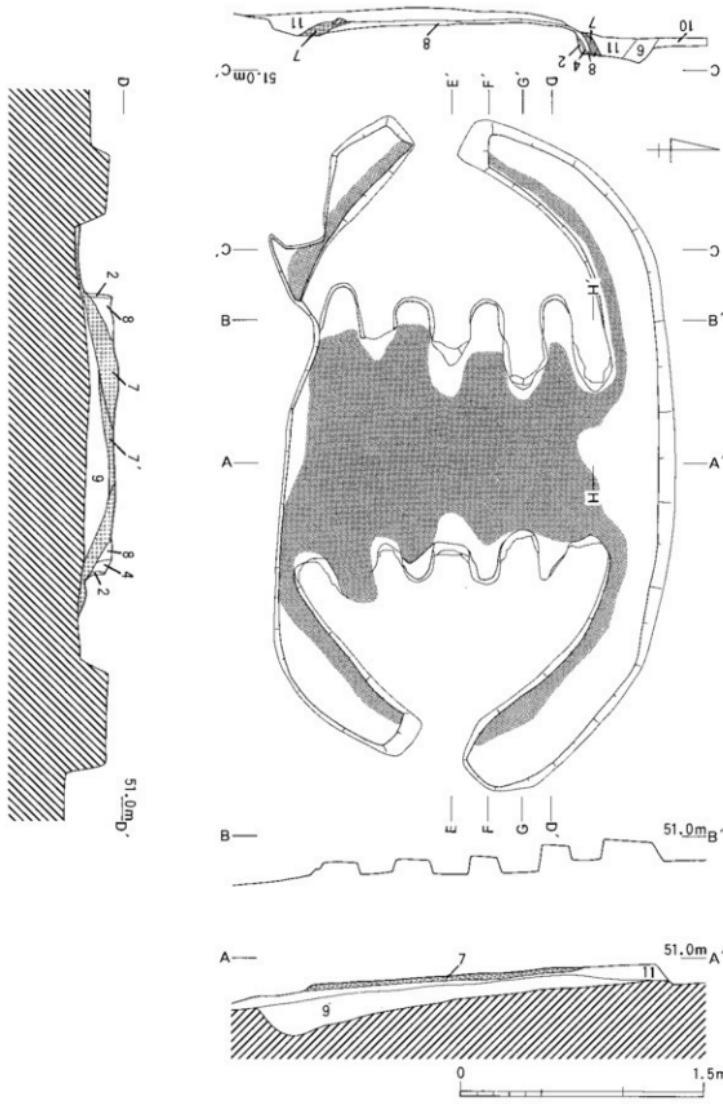
焼成室中央部においては、灰白色の床面は消失し、赤褐色の焼土層が広い範囲にわたって確認された。これらの状況は、1号瓦窯跡と同様であるため、現存の焼成室は少なからず削平をうけているものと考えられる。

東西両側の焚口および、燃焼室においては、焼土あるいは、炭を多量に含んだ土が堆積しており、燃焼室の床面全面より炭が検出された。瓦窯内より出土した瓦類は、平瓦、丸瓦、軒平瓦であるが、東焚口の北壁からは、これらの他に鬼瓦も出土している。また、2号瓦窯跡の南東からは、多量の瓦片とともに、畦上方に接続され分焰柱として使用されたと考えられる全面に強い熱をうけた蒲鉾形を呈する窯壁材が多数出土した。

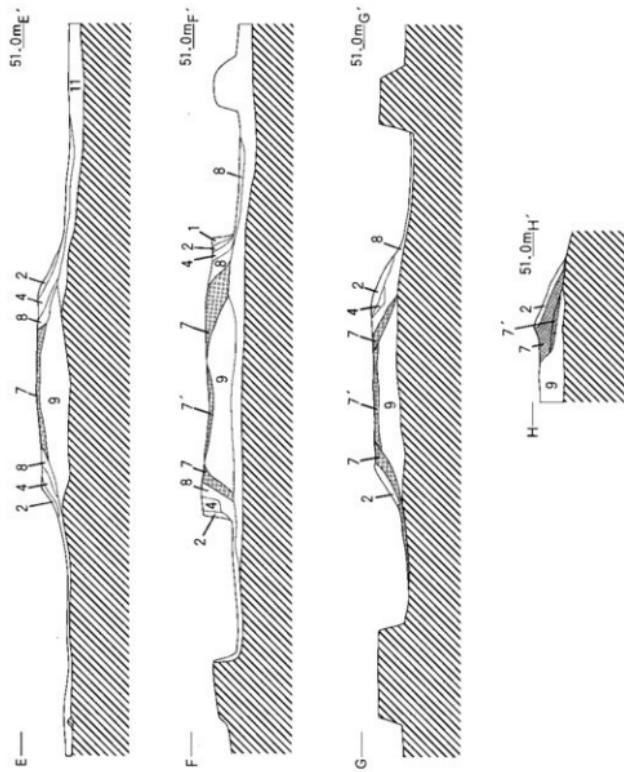
窯体の断ち割り調査では、2号瓦窯跡においても構築状況の復元は可能である。1号瓦窯跡と同様の構築過程であるが、以下に概略を記す。掘り込んだ楕円形状の中央部に礎を敷きつけ、真砂土、粘土によって畦および、焰道を形成する。焼成室と燃焼室内面にも粘土を貼りつけ窯体の地下部分を完成させる。このことから、2号瓦窯跡の地下部分の特徴としては、1号瓦窯跡と同様、燃焼室床面が焚口と同じレベルであることや、地下部分の窯壁は地山に薄く粘土を貼りついていること、などである。

3号瓦窯跡

3号瓦窯跡は、2号瓦窯跡の東、約9.5m（2号瓦窯跡東焚口から3号瓦窯跡西焚口までの距離）離れた地点に位置する。瓦窯の形態は、残存している地下部分より「ダルマ窯」であるが、1号・2号瓦窯跡とは異なり窯体の南北半分が削平されており、残存状況は、極めて悪いものである。このため、瓦窯跡の全長は、約4.4mを計測するが、幅は推定で2.8mを測るものと思われる。瓦窯跡は、主軸をN66°Eに向かって、1・2号瓦窯とはほぼ同じ緩傾斜地形に沿った東西方向に構築されている。標高は焚口および、燃焼室で51.0m、焼成室では51.1mである。西側の焚口および、燃焼室では、北壁と畦および、焰道のそれぞれ1本が残存しており窯壁の幅は約0.4m、畦は長さ約35cm、幅約20cm、高さ（残存高）15cmであり、焰道は長さ約30cm、幅約20cmを測るものである。東側では、北壁と2本の畦および、3本の焰道が残存しているが、計測値は西側のものと近い数値を測っている。



第9図 2号瓦窑跡窯体平・断面図



- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1. 灰白色還元層 | 7. 薄赤褐色酸化層 |
| 2. 青灰色還元層 | 7'. 赤褐色酸化層 |
| 3. 赤灰色酸化層 | 8. 薄赤褐色酸化層(若干炭含む) |
| 4. にぶい赤褐色酸化層 | 9. 褐灰色礫層 |
| 5. にぶい黄色酸化層(小礫含む) | 10. 灰黃色(小礫含む) |
| 6. 浅黄色 | 11. 浅黄色 |

第9図 2号瓦窯跡窓体平・断面図

焼成室中央部においては、灰白色の床面および、その下層の赤褐色の焼土層も削平により消失しており、地山面が検出された。赤褐色の焼土層は、畦および、焰道の一部に確認されていることから、現存の15cm以上の高低差があったものと考えられる。

窯体の断ち割り調査では、1・2号瓦窯跡が、地山面を楕円形状に掘り込み中央部に礫を敷きつめ、それらを覆うようにスサ混じりの粘土を貼りつけ燃焼室および、焼成室を成形し窯体の地下部分を構築しているのに対し、3号瓦窯跡では礫層は確認されなかった。このため、3号瓦窯跡の地下部分における窯体構築は、楕円形に全面を掘り込みず、中央の焼成室部分を平坦に残し、左右両側の燃焼室をそれぞれ半円形に掘り込み、畦および、焰道を真砂土、スサ混じりの粘土によって成形する構築状況が想定される。これは、1号・2号瓦窯跡の下部構造および、構築方法と明らかに異なっており、瓦窯づくりに関わった職人の違いあるいは、1号・2号瓦窯跡との構築地点のわずかな標高の違いに起因しているものであると考えられるが、詳細は不明である。

また、3号瓦窯跡では、南半分が削平をうけ消失しているが、本来の西焚口側の南壁近くに位置する地点より円形の土坑が検出された。この土坑の検出時の大きさは、直径約1.1m、深さ約0.1mを測るものであるが、3号瓦窯跡同様、上方は削平をうけており、大きさは不明である。堆積土の中には、わずかであるが焼土や炭が確認されていたことから、瓦焼成時に燃料を置くための土坑であったと考えられる。この他にも、東焚口側の北壁近くに直径約1.0m、深さ約0.2mを測る土坑が検出されているが、大きさ、堆積状況とも似通っており、同様の性格をもった土坑であると考えられる。

4号瓦窯跡

4号瓦窯跡は、3号瓦窯跡の東、約2.5m（3号瓦窯跡東焚口から4号瓦窯跡西焚口までの距離）の地点に位置する。しかし、瓦窯跡は調査区のおよそ東半分を占める後世の擾乱土坑によって、その大部分が破壊されている。残存している部分は西焚口部の南北の窯壁および、燃焼室の一部のみであり、窯壁幅が約0.45mを測ること以外の数値は不明である。しかし、瓦窯の形態は、「ダルマ窯」であり、残存している部分から復元すれば、1号～3号瓦窯跡に近い窯体規模をもつものと考えられる。

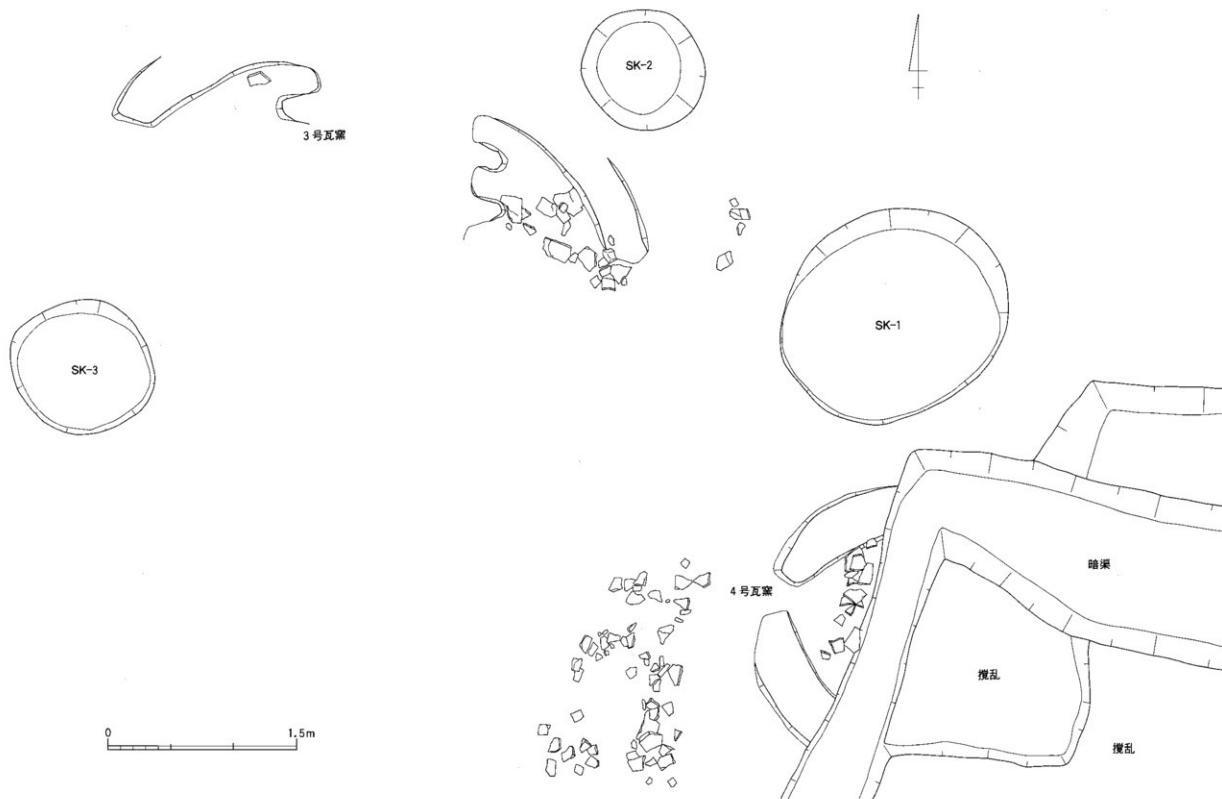
また、4号瓦窯跡の北壁近く、3号瓦窯跡の東焚口北壁との中间点あたりには、深さ約0.3m、長軸約1.9m、短軸約1.6mを測る楕円形の土坑が検出された。堆積土には焼土や炭が含まれ、また、焚口近くにあるため、3号瓦窯跡の焚口付近で検出された土坑と同様、瓦焼成時の燃焼などを置いておくための土坑であったと考えられる。

3. その他の遺構

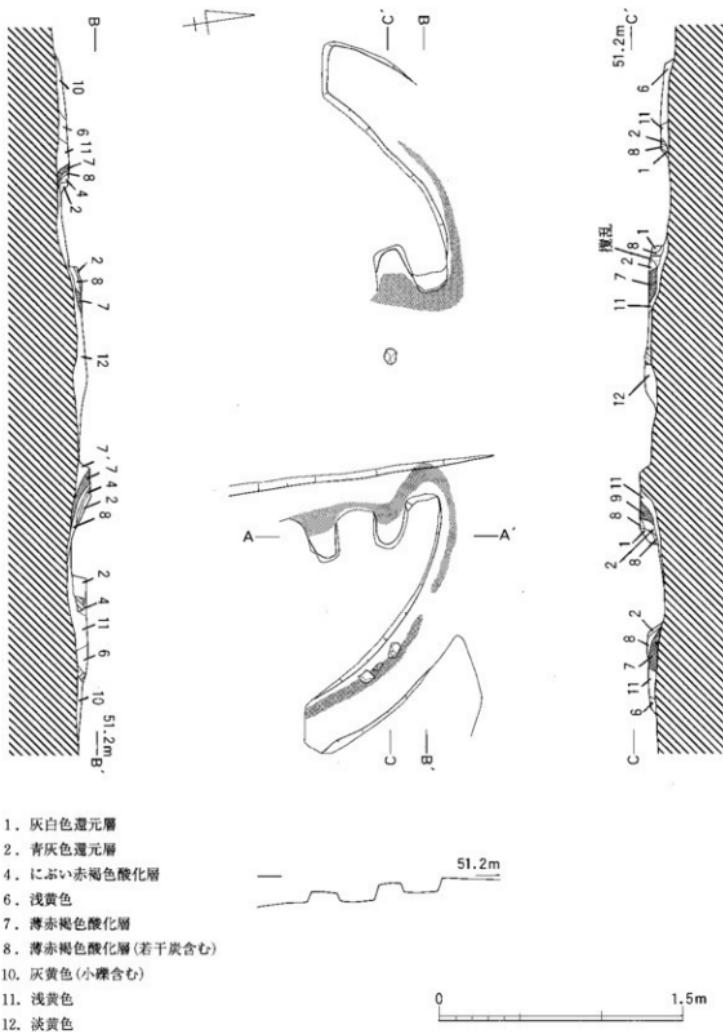
大釜瓦窯跡では、瓦窯跡4基の他に円形土坑、水溜め遺構、溝、擾乱土坑が検出されている。このうち、円形土坑については、瓦窯跡との関係が考えられたため、すでに記述しており、水溜め遺構以下の遺構について述べていきたい。

水溜め遺構

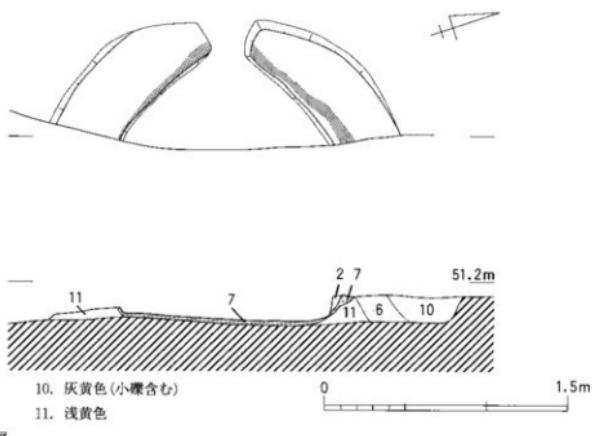
調査区の南東隅より検出された、木枠の檻を埋め込み水溜めとして利用していたもの（以下、水溜め遺構2）を、西側に一部重なるように円形の石組のもの（以下、水溜め遺構1）に再構築した遺構である。



第10図 3・4号瓦窯跡遺構平面図



第11図 3号瓦窯跡窯体平・断面図



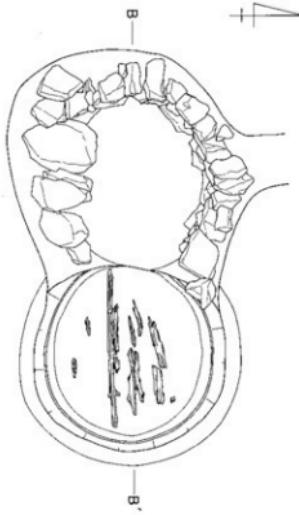
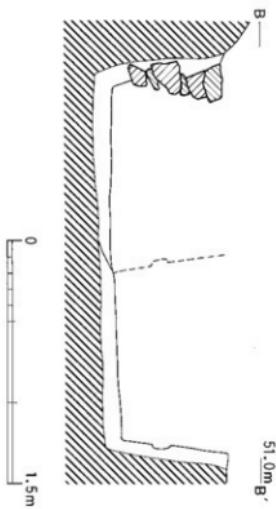
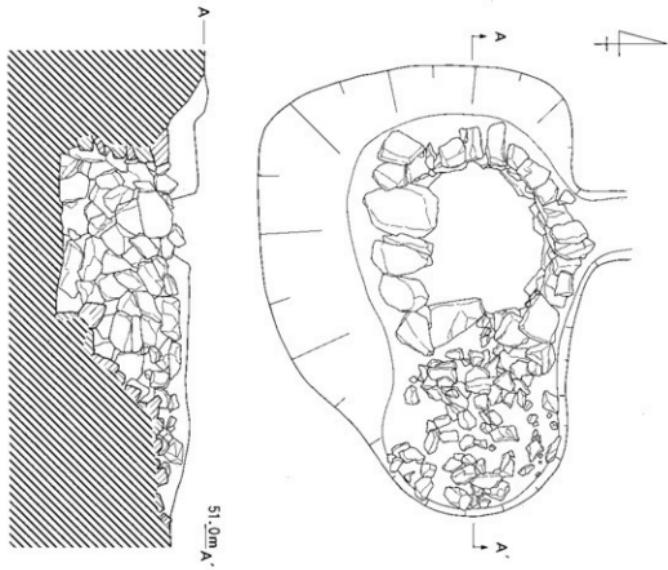
第12図 4号瓦窯跡案体平・断面図

水溜め遺構1は、水溜め遺構2の西端の一部を切り込んで構築されており、時期的には水溜め遺構2より新しいものである。遺構は、直径約0.8mを測る円柱形を呈し、深さは約0.9mを測るものである。遺構の東側、水溜め遺構2を埋め戻した地点は、斜めに石材を積み上げており、足場として利用していたものと思われる。堆積土の状況から遺構は、自然堆積によるものではなく、人為的に埋められたようである。水溜め遺構2は、上部径約1.1m、底部径約1.0m、深さ約0.7mを測る木枠の樽形を呈するものである。側面の木材は腐敗しており検出されなかったが、底面より約0.25mの高さには漆の痕跡を残す龜みが巡っているのが確認され、底面には木材の一部が検出された。しかし、残存している木材の部分は少なく、材質などを確認するには至らなかった。

また、水溜め遺構1および、2の断ち割り調査により、それぞれの構築状況が想定される。まず、直徑約1.4m、深さ0.8mの大きさに地山を掘り込み、その若干大きめの掘り方に円柱形の樽を据え、周囲を掘り返した地山土で埋め戻し構築する。この樽形の水溜めは、その大きさから約0.6m³の容量である。その後、水溜め遺構2を埋め、石組の井戸形態の水溜めに改良する。調査時には底あるいは、周囲から少量はあるが水が湧き出ており、標高約50.5mが地下水位として確認された。しかし、晴天日が続くと水は枯れてしまったことや、底が浅いことから、井戸とは考えられず、木枠の水溜めに替わるものとして構築されたものと考えられる。構築は、水溜め遺構2の西側一部を切り込むように、直徑約1.5m、深さ約1.0mに地山を掘り込み、その掘り方に主に約20cm～約40cmの自然石を積み上げている。裏込め石はなく、下方から石材を一石積み、掘り方との間を地山土で固めていく、全体を構築していくものと考えられる。また、水溜め遺構1からは、鬼瓦の歯（牙）片が出土している

溝および、擾乱土坑

溝は調査区南東部より確認され、調査区南外より北東方向に流れ込み、調査区内では東西方向に向きをかえ、再び調査区外へ南東方向に続いていくものである。両側ともに調査区外へと続いているため全容は不明であるが、確認長約18.5m、幅約1.5m、深さは約0.4mを測る。



第13図 水溜め遺構平・断面図／1(上)・2(下)

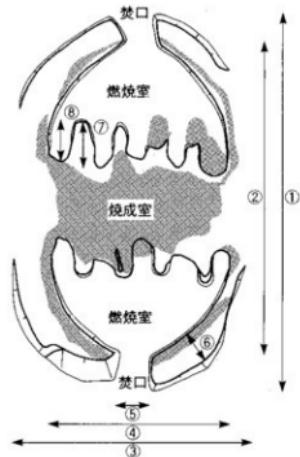
擾乱土坑は、4号瓦窯跡の大半を破壊しており、東西約30.5m、南北約4.5m、深さ約0.3mを測り調査区のほぼ東半分の範囲に及び、水溜め遺構近くにまで広がっている。このため、4号瓦窯跡以東、水溜め遺構までの操業当時の状況は不明である。しかし、比較的浅い落ち込みの擾乱土坑内からは大量の瓦片⁽⁴⁾や窯壁材と思われるスサ混じりの粘土塊や焼土塊が出土しているが、床面には焼土あるいは、熱をうけた痕跡ではなく瓦窯が構築されていたと考えられる箇所は確認できなかった。但し、土坑の南西縁には、東西約6.5m、南北約1.5mの長楕円形を呈する炭、焼土および、窯壁材の塊が確認されたが、4号瓦窯の破壊時のそれらを一括して破棄したと考えられるものである。

(註)

- (1) 大釜瓦窯跡で検出された「ダルマ窯」の各部の名称は下図の通りである。
- (2) ダルマ窯内部の半円柱状を呈する「畦」は、「畝」「ロストル」など呼称は統一されていないため本報告では、「平成9年度特別展『達磨窯』—瓦匠のわざ400年—」の展示図録（吹田市立博物館）による「畦」の名称を使用している。
- (3) 瓦窯跡の全長、幅および、その他の計測位置は、(1)図による。また、4基の瓦窯跡の計測値を以下の一覧表に記した。
- (4) 摆乱土坑から出土した大量の瓦片は、操業当時の位置をとどめておらず、直接資料とはなりえないものであるが、第4図大釜瓦窯跡遺構配置図の区割り位置ごとに取り上げを行った。

(1) 「ダルマ」窯の各部の名称

および、計測位置



(3) 大釜瓦窯跡

(m)	1号 瓦窯跡	2号 瓦窯跡	3号 瓦窯跡	4号 瓦窯跡
① 全 長	4.3	4.2	4.4	—
② 内 寸	3.6	3.5	3.7	—
③ 幅	2.8	2.7	(2.8)	—
④ 燃烧室幅 (燒成室幅)	2.0 (2.0)	2.0 (2.0)	—	—
⑤ 焚口幅／東 西	0.36 0.36	0.36 0.28	—	0.22
⑥ 窯壁幅	約0.50	0.48	約0.40	約0.45
⑦ 畦 数 長さ	4 0.50	4 0.45	— 0.35	—
⑧ 焰道数 長さ	5 0.40	5 0.40	— 0.30	—
残存高	0.15	0.18	0.15	0.10
焼成室標高	50.8	51.0	51.1	—
主軸／N° E	74°	76°	66°	—

第2節 遺物

1. 出土瓦

大釜瓦窯跡より出土した瓦は、コンテナ110箱を数え、すべて近世のいぶし瓦である。出土した瓦類は、平瓦、丸瓦、軒平瓦、面戸瓦、鬼瓦などであり、軒丸瓦は1点もみられなかった。それぞれの瓦については、従来より行われている様々な方法による出土個体数の計測¹⁰は行わず、重量のみを計測し、全体の出土量に占める割合を表示することとした¹¹。また、平瓦の前面には、約1.5cm四方の刻印が數種類確認されており、刻印瓦として分類を実施した。瓦は、瓦窯内の焼成室より燃焼室に落ち込んで放置された状態や、焚口周辺に散乱した状態あるいは、瓦捨て場に一括破棄された状態で出土した。焼成は、灰色を呈するいぶしのかかったものが大半であるが、一部にいぶしのかかっていないものや、埋蔵中にいぶしが消えたと思われる灰白色を呈するもののが存在する¹²。以下に、分類した出土瓦についての記述を進めていくが、あわせて参考資料瓦として報告した、一乗寺本堂軒下の平瓦と軒平瓦¹³についても触れておきたい。

平瓦

出土した平瓦は、その厚さによって大きく2種類に分類される。2cm以上の厚さをもつ厚手の平瓦（以下、平瓦厚）と、2cm以内の薄手の平瓦（以下、平瓦薄）である。2種は、法量および、製作技法において相違が認められる。

平瓦厚は、出土瓦量のうち、約83パーセントを占めているが、全体の大きさがわかるものは3点（4.51. 65）しか出土していない。全長約35cm、前端部幅約28cm、後端部幅約30cmをそれぞれ測り、平面の形状は、前端部が後端部より若干幅が狭くなる台形を呈し、2.2cmから2.8cmの厚さをもっている。これらは、一乗寺参考資料瓦として報告した平瓦（すべて平瓦厚）とはほぼ同じ寸法を測っており、大きさにおいて細分化されることはないようである。また、瓦の前面には、ほぼすべてに刻印が押されているのが確認される。他方平瓦薄は、出土量の約7パーセントに過ぎず、平瓦に占める割合もわずかに10パーセント程度である。平瓦薄の全体の大きさがわかるものは2点（6. 16）のみであり、出土位置も1号瓦窯跡および、2号瓦窯跡の窯体内に限られている。全長約26cm、幅約22cmを測り、平面の形状は正方形に近い長方形を呈し、1.2cmから1.9cmの厚さをもっている。このため、平瓦薄は、全体的に薄く、軽い印象をうけるものである。

統いて、瓦製作時における痕跡では、I類：瓦の側面の形状、II類：凹面における調整法、III類：凸面における調整法、によって分類される。

I類：瓦の側面の形状は、垂直に面取りが行われたもの（I-A）と、側面の形状が内傾するもの（I-B）の2種類である。このうち、平瓦厚における側面については、すべてが垂直に面取りされているが、平瓦薄については、側面の形状が内傾するもの（6. 16）が若干数含まれる。

次に、II類：平瓦凹面における調整については、凹面全体にミガキを行い、表面をなめらかに仕上げているもの（II-a）および、ミガキまでは行っていないが、丁寧なヘラナデを行っているもの（II-b）あるいは、細かな調整を行っていないもの（II-c）とに分類される。ここでは、平瓦厚は、凹面全体にミガキを行い、表面をなめらかに仕上げているものが大半を占め、残りは、丁寧なヘラナデが行われているものである。ミガキおよび、ヘラナデは、端面とともに行われ、横方向の調整を基本として

いるが、たて方向および、斜め方向に調整が加えられているものも確認される。一乗寺参考資料の平瓦では、横方向のミガキの後、両側辺にたて方向のミガキを加えているものが多く確認される。平瓦薄では、それらの痕跡はほとんど認められず、細かな調整はすべてにおいて行われていない。

Ⅲ類：凸面における調整については、たて方向あるいは、横方向の比較的丁寧なヘラナデが認められるもの（Ⅲ-a）と、ほとんど調整を行っていないもの（Ⅲ-β）とに分類される。このうち、調整が行われているものは、平瓦厚において若干数認められるのみであり、大半の平瓦厚と平瓦薄においては、調整は行われていない。また、凸面には、瓦の乾燥時に付いたと思われる薙（コモ：むしろ）による無数の点状の痕跡が認められるものもあり、焼成に至るまでのどの過程においても細かな調整は行われていないようである。

以上のことから、大釜瓦窯跡出土の平瓦は、平瓦厚および、平瓦薄に大別され、その中でも、平瓦厚は垂直に面取りが行われていることから、凹型模骨による1枚作りが想定され、平瓦薄においては、凹型模骨による1枚作りと、側面の形状が内傾しているものが認められることから、桶巻き作りによる製作方法が想定されるものとの2種類が存在することがわかった³⁰。また、瓦の凸面における調整痕よって、凹面においては3種類（Ⅱ-a・b・c）に、凸面においては2種類（Ⅲ-a・β）にそれぞれ分類し、平瓦厚、平瓦薄の製作技法（調整手法）の違いを旨及してきた。しかし、平瓦凸面の調整の違いには、凹面が風雨をうけることによる細かな調整を必要とする反面、凸面においては裏側ということにより労力の無駄を省き調整を行わなかったということが考えられる。さらに、平瓦厚の中でも、刻印の違いによって調整の違いがあるか否かの観察も行ったが、特に目立つて分類することはできなかった。

丸瓦

出土した丸瓦は、全体の出土瓦量からみてもわずか5パーセント程度に過ぎず、全体の大きさがわかるものは2点（21・91）のみである。また、図化できたものについても5点と、絶対数が少なく、分類を行うことは不可能であった。このため、大釜瓦窯跡出土の丸瓦については、その特徴を以下に述べていきたい。大きさは、全長約35cm、幅約19cm、厚さ約2.5cmを測るものであり、平面の形状は、長方形の胴部に、玉縁が接続する有段式丸瓦である。玉縁は長さ約4.5cm、幅約14.5cm、厚さ約2.5cmをそれぞれ測るものである。この他に、胴部に釘孔を有するものが1点出土している。

丸瓦における製作時の痕跡は、凹面において顕著に認められる。凹面には、粘土塊より瓦の厚さに切り離す時に生じた横方向のコビキ痕³¹が残っており、この他に、粗い布目状の痕跡、U字状の吊り紐痕が認められる。出土している丸瓦には、埋蔵中に表面が磨滅しているものが数点認められるが、それらを含めてもすべての丸瓦の凹面には上記の痕跡が残っており、細かな調整が行われていないことがわかる。凸面についてみると、胴部にはたて方向の、玉縁部には横方向のそれぞれ丁寧なミガキあるいは、ヘラナデが行われており、平瓦の凹面同様、表面の調整が細やかに行われている。また、丸瓦凸面のいぶしの付着状況に若干の違いが認められる。丸瓦凸面の頂上部にのみいぶしが付着しているものと、逆に頂上部を除く全面にいぶしが付着しているものであり、これらによって丸瓦における窯詰め状況あるいは、窯詰め時における位置が想定されるものと考えられる。つまり、いぶしが付着するには空間が必要となり、いぶしが付着していない箇所はなんらかのものと接着していると考えられるからである。いぶしが凸面の頂上部のみに付着しているものは、胴部両側辺に重ねによる接着面が存在し、逆に凸面の頂上部を除く全面にいぶしが付着しているものは、2枚の丸瓦が背中合わせの状態に窯詰めされた状況が想定されるものである³²。

以上のように、大釜瓦窯跡出土の丸瓦においては、凸面の調整は比較的丁寧に行われているが、凹面については、製作時の状況をそのまま残す痕跡を認めることができ、これによって、丸瓦の製作状況を復元できるものと考えられる。まず、粘土塊より瓦の厚さに切り離しが行われる。この時、凹面側に横方向のコビキ痕、いわゆるコビキB⁽⁶⁾痕が残る。統いて、粘土板を丸瓦用の模骨に貼りつけ、凸面に調整を行う。模骨内側の凹面には、模骨と粘土板とが分離しやすいように巻きつけた布筒の粗い布目の痕跡および、粘土板が下方にずり落ちないように模骨全周にU字が4つ巡るように巻きつけた吊り縫痕が、それぞれ刻みこまれる。その後、模骨から布筒をつけた状態ではずし、布筒を抜き取る。最後に、円筒状の瓦を半裁し、丸瓦が完成される。

また最近では、粘土塊から粘土板を切り離す時に生じるコビキ痕には、斜め方向に認められるコビキA手法と、横方向に認められるコビキB手法の2種類の違いにより、製作年代を限定する研究が行われている⁽⁷⁾が、大釜瓦窯跡出土の丸瓦では、すべてコビキB手法によるものである。

軒平瓦

大釜瓦窯跡より出土した軒平瓦は9点であり、出土瓦量の約0.6パーセントに過ぎない。これらの瓦当面の文様は、中央に宝珠を飾り、中心より左右に下巻き、上巻きの2葉の唐草を配した、すべて同一のものである。しかし、軒平瓦の出土点数が少ないとや、残存している文様部が小破片であることなどから、瓦の同范関係を確認するには至らなかった。このため、大釜瓦窯跡出土の軒平瓦では、瓦当文様においては分類は行えなかったが、瓦当周縁部における側縁幅の違いおよび、製作時の痕跡について述べていきたい。また、大釜瓦窯跡出土と同一文様の軒平瓦が、現在も一乗寺本堂の屋根瓦として葺かれていると同時に、本堂軒下に保存されているのが確認された⁽⁸⁾ため、参考資料としてあわせて報告している。

出土した軒平瓦における瓦当周縁部の側縁幅は、2.0cm、2.9cm、3.2cmをそれぞれ測り、左右別に比較してみると、右側は、2.9cm(19)と3.2cm(20)の2種であり、左側は2.0cm(36)と2.9cm(67)の2種である。参考資料瓦として報告した一乗寺本堂軒下の軒平瓦では、2.0cm、2.3cm、2.8cm、3.1cmをそれぞれ測り、同一の文様内では、右側2.8cm、左側2.3cmを測るもの(110)と右側2.0cm、左側3.1cmを測るもの(111)が存在する。出土軒平瓦では、側縁部は左右いずれか片方だけが残存しているのみであるが、左右両側縁幅の数値を比較対称できた一乗寺軒平瓦では、側縁幅は左右非対称であり、数値も均一ではないことがわかった。このことから、大釜瓦窯焼成の軒平瓦は、側縁幅の数値を比較することによって同范関係を理解するひとつの資料として考えられる反面、製作時期などを考える指標としては扱えないものといえる。

軒平瓦の製作時の痕跡についてみてみると、瓦当面および、顎部あるいは、平瓦凹面については、丁寧なミガキ、ヘラナデによる調整痕が認められる。瓦当部と平瓦部との接合方法は、瓦の破損状況や断面にみられる胎土の違いによって2種類に分類される。ひとつは、瓦当部裏側に彫り込み溝を設け、平瓦部をはめこみ、瓦当接合部周辺に粘土を貼り付け、整形したもの(以下、I類)であり、またひとつは、瓦当部を顎部を含めて製作後、平瓦部を接合するもの(以下、II類)である。しかし、II類については、残存している瓦当部と欠損している平瓦部の割れ方からI類とは考えられず、推定されたものであり、製作および、焼成時に疑問の残るものである。

大釜瓦窯跡出土の軒平瓦は、文様は1種類のみであり、若干の違いを計測した周縁部における側縁幅についても分類は行えないものと考えられる。また同様に、瓦当部と平瓦部との接合においても、確認

できるものはⅠ類のみであり、ここでも明確に分類はできなかった。

面戸瓦

大釜瓦窯跡では、丸瓦あるいは、平瓦には分類されない形状を呈する瓦が6点出土した。これらは、Ⅰ類：丸瓦の頂上部を切断した片方部に相当する形状を呈する瓦（7・8・9・10）と、Ⅱ類：側面に切り込みを有する瓦（34・57）の2種類に分類され、面戸瓦と考えられる。Ⅰ類は、すべて1号瓦窯跡より出土しているが、白色を呈しており、いぶしの痕跡がみられないものである。瓦はいずれも小破片であり、全体の大きさや形状は不明であるが、凹凸両面に残る製作痕より、丸瓦と同様の製作過程が行われていることがわかる。凹凸両面には、スサ混じりの粘土塊が多く付着しており、調整痕の見いだせないものも含まれるが、凸面は横方向の丁寧なミガキが行われ、表面はなめらかに仕上げられている。また、凹面には丸瓦の凹面と同様、横方向のコビキ痕、吊り紐痕および、粗い布目状の痕跡が残り、細かな調整が行われていないものと、ヘラナデによる調整が行われているものがある。瓦の両側面には、ヘラナデによる調整痕が認められ、さらにスサが付着していることから、焼成後に丸瓦を半裁したものではなく、焼成前に半裁し、製作されたものと考えられる⁵⁰。Ⅱ類は、調査区南端U字溝沿いより出土した、右側面が中程から内側へ隅丸状に切り込まれていくもの（34）と、5区より出土した、左側面が中程から内側へ曲線状に切り込まれていくもの（57）の2点である。2点の厚さは、1.4cmと1.8cmを測り、平瓦における平瓦薄に分類されるものである。凹凸両面ともに調整は、横方向に丁寧なヘラナデが行われているが、凹面には一部横方向のコビキ痕が残り、凸面には一部薦（コモ：むしろ）による点状の痕跡が認められる。

以上のように6点の瓦は、丸瓦あるいは、平瓦（平瓦薄）と同一の製作過程においてつくられているものであるが、製作途中よりそれぞれの用途に応じた形状や調整が行われ、面戸瓦として使用されたと考えられる。

鬼瓦

出土した鬼瓦は、出土瓦量のわずか3パーセント程度に過ぎないが、小破片に及ぶすべてを報告しており、33点を数える。そのうち、鬼瓦として、あるいは、鬼瓦鬼面⁵¹のどの部位に相当するかが確実に判断されるものは少なく、その他のものは、形状あるいは、製作痕などから鬼瓦として分類している。また、銘あるいは、銘文は確認されなかった。

鬼（表）面および、裏面ともに残存し、確実に鬼瓦として認識できるものは、3点（15・69・93）である。いずれも鬼面（鬼の顔の部分）は欠損しているが、櫛目痕や指頭によるナデおよび、押さえによって鬼（表）面と鬼面との接合が行われた痕跡が残っており、焼成時に剥離したものと考えられる。これらは、平面形状において、Ⅰ類：直線的で平坦な底部から側辺にはほぼ垂直に立ち上がるものと、Ⅱ類：直線的で平坦な底部から一旦鈍角にたちあがり、それから垂直に立ち上がるものとに、それぞれ分類される。また、鬼（表）面側辺に装飾された連珠文のつくり方および、連珠溝の形状においても相違がみられ⁵²、ともに3種類に分類される。連珠文のつくり方には、ヘラ状の工具によって文様を彫り込んでいるもの（Ⅰ-A）と、連珠を貼りつけているもの（Ⅱ-A）および、連珠溝を彫り込むことによって連珠を浮かび上がらせているもの（Ⅱ-B）の3種類が確認される。連珠溝の形状では、側辺、上下辺ともに直線的（上方は斜め、下方は平坦）で鬼（表）面内におさまるもの（Ⅰ-a）と、底部の一部のみが残存しており全体の形状は不明であるが、側辺に沿って直線的で鬼（表）面下方を突き抜けるも

の（II-a）と、鬼瓦の形状に沿って直線的（下方は斜め）で鬼（表）面内におさまるもの（II-b）の3種類に分類される。しかし、これら3点は、大きさや底辺の形状から、大棟に葺かれる鬼瓦より、降り棟鬼瓦である可能性が高く、製作痕についてみても、鬼面の接合方法は同一であり、鬼（表）面、裏面の調整手法には際立った違いは認められなかった⁴⁶。

この他に、鬼（表）面および、裏面ともに小破片ながら残存しているものが4点（72・73・92・96）、鬼（表）面のみ残存しているものが1点（94）、裏面のみ残存しているものが3点（25・49・71）それぞれ出土している。また、鬼瓦裏面から破損した把手部が3点（77・78・81）出土している。

次に、鬼瓦鬼面のどの部位に相当するかが確認されたものには、角部のもの（37・75・76・98）と、歯部のもの（74・99）があり、さらに1点、額あるいは、頸部と考えられるもの（50）が出土している。このうち、角部のものには、裏面に鷹目痕や鬼面との接合痕（指頭によるナデおよび、押さえによる痕跡）が残っており、製作過程において角部のみを製作し、鬼面に貼りつけていることが確認された。歯部のものには、下歯の一節と下唇および、顎部分のもの（74）と、上唇および、上歯部分のもの（99）があり、ともに整形と調整を細かに行い各部分を表現している。しかし、これらには角部のように鬼面との接合痕は認められず、個別に細かく製作したものか、鬼面のどの部位を含めて製作したかは判断できなかった。

また、鬼瓦として分類しているものの中に、どの部位か判断できないものが2点（70・95）出土している。形状は軒丸瓦の瓦当部に丸瓦部を接合したものに酷似しているが、文様の痕跡あるいは、鬼面との接合痕が全く認められないものである。これらは、形状より鬼瓦と考える一方、軒瓦の一部とも考えられるが、出土点数が少ないと、小破片であることから、詳細は不明である⁴⁷。

以上のように、大釜瓦窯跡出土の鬼瓦は33点であるが、形状や部位が確認されたものは少なく、多くは小破片の部位不明のものである。しかし、これらには、製作時の痕跡が残っており、鬼瓦の製作過程の復元がほぼ行われるものと考えられる。まず、鬼瓦を形成する大きさの箱状の粘土塊より、裏面においては、周縁部と把手部分を除き全面的に削りとことによって、それらを浮かび上がらせる。鬼（表）面では、側辺に連珠文様を飾り、鬼（表）面との接合部には櫛目をつけておく。またこれとは別に、鬼面の部位を製作する。鬼面の部位は、大釜瓦窯跡出土瓦では、角部および、歯部が確認されているだけであるが、その他の部分である額部や耳、眼、鼻、頸部などを製作する。この時、角部はそれのみを製作し、鬼面に貼り付けるものであるが、額部や耳、眼、鼻、歯、頸部については、一括して製作するものと推定される⁴⁸。最後に、鬼瓦の土台部である鬼（表）面に鬼の顔の部分をすべて接合し、鬼瓦を完成させる。大釜瓦窯跡出土の鬼瓦からは、これら鬼瓦の製作は、同一の職人あるいは、職人集団によって行われたものか、複数のものによって行われたものかは、調整手法の違いから明らかにはできなかつた。

刻印瓦

大釜瓦窯跡出土の平瓦（平瓦厚）には、前面に刻印が押されているものが84点確認された（以下、刻印瓦）。刻印は、たて横約1.5cmを測る陰刻で、刻印の種類には、「半円4分」形、「分銅」形、「桜」形、「丸三角」形、「太陽」形、「元」の字形、「台形」形、「丸」形、の以上9種類が確認された。刻印瓦については、種認調査時に出土した平瓦よりその存在が確認されていたため、調査中は瓦の出土位置を詳細に記録し、刻印瓦の出土分布状況をおさえることとした（第14図⁴⁹・第1表）。またあわせて、出土瓦整理中に、刻印が平瓦前面のどの位置に押されているかを計測⁵⁰し、図示した（第15図・第2

表)。

刻印瓦は、調査区の約東半分を占める後世の擾乱土坑からの出土が46点と最も多く、半数以上が当時の位置をとどめておらず直接資料とは成りえないものである。しかし、瓦窯内あるいは、周辺の瓦捨て場からの出土も確認され、良好な資料が少なからずえられた。これによれば、1号瓦窯跡より出土した刻印瓦は3種類、12点である。このうち、「分銅」形のものが8点と最も多く、次いで「半円4分」形が3点、「桜」形が1点それぞれ出土している。2号瓦窯跡については、「丸三角」形の1種類の刻印瓦が4点出土した。また、3号瓦窯跡では刻印瓦は確認されなかったが、4号瓦窯跡では「丸三角」形が2点、「元」の字形が2点、「丸」形が2点と3種類、6点の刻印瓦が出土している。この他、2号瓦窯跡と3号瓦窯跡の間の瓦が散乱していた地点では、「分銅」形が2点、「太陽」形が1点と2種類、3点の刻印瓦が出土し、調査区南端U字溝沿いの瓦一括で場においては4種類、13点の刻印瓦が出土した。13点の内訳は、「半円4分」形が9点、「分銅」形が1点、「丸三角」形が2点、「四角」形が1点である。

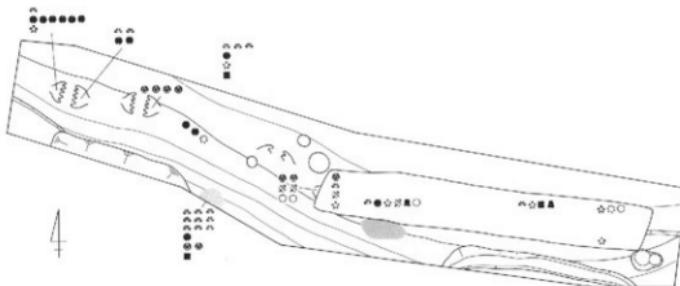
平瓦前面の刻印が押されている位置については、側辺部が残存し計測が可能な刻印瓦は66点を数えたが、直接資料と成りうるものは30点であった。これらからは、文様ごとによる刻印位置の左右の統一性や、側辺部からの距離の一定性あるいは、出土地点による刻印位置の規則性などをみいだせることはできなかった。

以上のように、大釜瓦窯跡出土の刻印瓦については、出土位置および、刻印位置を図示し、瓦窯跡出土資料から瓦に残る刻印の意味するところを理解しようと試みたが、直接的な成果をえるにはおよばなかつた。しかし、1号瓦窯跡では、「半円4分」形および、「分銅」形、「桜」形の3種類が、2号瓦窯跡においては、「丸三角」形のみが、また、4号瓦窯跡では、「丸三角」形および、「元」の字形、「丸」形の3種類の出土が確認され、刻印瓦の出土分布には、刻印の文様ごとにある程度分類される傾向がえられたものと考えられる。また、周辺に散乱している瓦および、捨て場一括の瓦についても、刻印を確認することによってどの瓦窯で焼成され、破棄されたものであるかを想定することが可能になつたと考えられる。つまり、大釜瓦窯跡では、各瓦窯跡には2、3種類の限られた刻印瓦を窯詰めし、焼成時の大量の瓦（この場合、平瓦厚）を管理していたものと推定される。

なお、大釜瓦窯跡出土の刻印瓦と同じ文様をもつ刻印瓦が、一乗寺参考資料瓦や本堂軒下に保存されている中にも多数確認されており、大釜瓦窯跡が一乗寺本堂の再建瓦を焼成した瓦窯と考えられる根拠のひとつでもある。

2. 窯壁材

大釜瓦窯跡では、調査区内より窯壁材と考えられるスサ混じりの粘土塊が多量に出土している。そのうち、2号瓦窯跡の南東および、擾乱土坑の南西際には集中して分布しており、それぞれ2号瓦窯、4号瓦窯を破壊した時の窯壁材と考えられる。出土した窯壁材は、形状をとどめない焼成をうけたスサ混じりの粘土塊が大半であるが、一部に円柱形あるいは、蒲鉾形を呈するものがある。これらは、形状および、大きさなどから、瓦窯内の柱上方に接続され分焰柱として使用されたと考えられるものである。

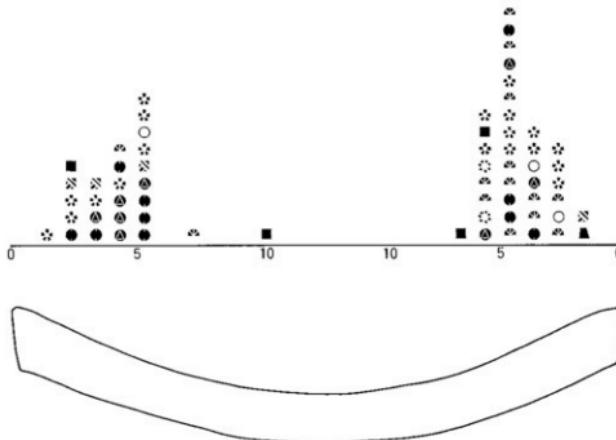


第14図 大釜瓦窯跡刻印瓦出土位置図

第1表 大釜瓦窯跡刻印瓦出土位置一覧表

刻印の種類 出土位置	半円 4分	分 銅	桜	丸三角	太 陽	四 角	「元」の字	台 形	丸
1号瓦窯跡	1. 2. 11 3. 4. 6 7. 8. 9 10. 12	5.							
2号瓦窯跡				13. 14. 15 16.					
2号瓦窯と 3号瓦窯の間		17. 84.			18.				
3号瓦窯跡									
U字溝脇	21. 23. 24 25. 26. 27 28. 30. 31	22.		19. 29.		20.			
4号瓦窯跡				32. 34.			33. 37.		35. 36
その他 西側限 5区 4区	77. 81. 82. 72. 51.	78. 62.	79. 76. 52. 53. 54. 56. 59. 60. 61. 63. 64. 65. 70. 47. 50. 44. 45. 46. 39. 40. 41. 42.	71.		80.	73. 74. 75. 58.	66.	55. 67. 68. 69.
3区 2区 1区 表塀	48.				43.	49.		51.	38.
							81.		

No.は第2表と同一



第15図 大釜瓦窯跡刻印瓦刻印位置図

第2表 大釜瓦窯跡刻印瓦刻印位置一覧表

No.	左(cm)	右(cm)	備考	No.	左(cm)	右(cm)	備考	No.	左(cm)	右(cm)	備考
1	(8.0)	4.4	△	29	(3.4)	3.4	△	32	(6.2)	4.8	△
2	(7.4)	(2.2)	△	30	(3.1)	4.0	△	33	5.8	2.7	(3.1) △ 59
3	3.5	(4.8)	●	31	(1.0)	(4.0)	△	59	(0.7)	4.9	△ 63
4	(8.3)	4.3	● 1	32	5.2	(0.2)	△ 41	60	(5.1)	2.5	△
5	(4.4)	(0.5)	△	33	(4.4)	(6.1)	△	61	(3.7)	5.8	△ 62
6	5.2	(3.9)	●	34	4.9	(10.5)	△ 38	62	4.9	(0.7)	●
7	(8.6)	(0.4)	△	35	(9.3)	2.4	○ 40	63	1.5	(4.7)	△
8	5.1	(5.9)	●	36	(7.7)	3.6	○ 39	64	(6.3)	(3.8)	△
9	(0.8)	3.9	●	37	5.2	(1.2)	△	65	(5.4)	(4.2)	△ 66
10	2.1	(4.7)	●	38	(2.3)	(2.8)	○	66	(1.2)	(3.1)	■
11	7.8	(6.8)	△ 2	39	5.3	(1.5)	△	67	(1.0)	(0.3)	○
12	(6.7)	4.4	● 3	40	(7.9)	(2.2)	△	68	(1.5)	(4.6)	○
13	(1.2)	(5.6)	△	41	(2.1)	4.5	△	69	5.1	(8.4)	○
14	3.7	(6.2)	△	42	2.7	(7.7)	△	70	5.5	(1.1)	△ 64
15	4.5	(9.1)	△	43	(4.4)	5.0	△ 97	71	(10.2)	4.0	△ 56
16	(3.6)	5.7	△	44	4.1	(2.2)	△	72	4.8	(3.6)	△ 53
17	5.1	(0.5)	●	45	(1.9)	3.9	△	73	3.3	(0.7)	△ 52
18	(11.2)	5.2	△ 22	46	(0.4)	4.6	△	74	(0.2)	(9.8)	△
19	4.7	(0.5)	△	47	(7.4)	5.6	△ 89	75	(14.6)	1.5	△ 54
20	(5.2)	6.9	■ 29	48	(12.2)	2.5	△	76	(10.0)	2.7	△ 55
21	(3.7)	5.9	△ 28	49	(3.0)	5.6	■ 90	77	(2.8)	4.9	△ 44
22	(1.5)	(6.6)	●	50	2.9	(1.7)	△	78	(2.9)	4.6	● 45
23	(1.7)	5.0	△	51	(6.1)	1.6	■ 88	79	5.7	(6.0)	△ 42
24	(4.5)	3.2	△	52	(11.0)	3.9	△ 65	80	2.3	(1.6)	■ 46
25	(2.2)	2.4	△ 31	53	3.9	(3.7)	△	81	(0.8)	(2.8)	△
26	(1.1)	4.3	△	54	(5.5)	2.4	△ 60	82	(6.7)	4.0	△ 43
27	(8.7)	(2.6)	△	55	(2.2)	(3.7)	○	83	10.7	(4.6)	△ 100
28	(13.1)	3.7	△ 30	56	(1.3)	4.1	△ 61	84	(1.7)	6.0	● 24

備考のNo.は遺物番号

(註)

- (1) 五十川伸夫「平瓦の数量計測方法の分析－生産遺跡出土瓦の場合－」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』 1986 京都大学理学部文化財研究センター
- (2) 大釜瓦窯跡より出土した瓦は、総重量約757kgである（重量、割合は少数点以下、四捨五入）。

	平瓦 厚	平瓦 薄	丸 瓦	軒 平瓦	軒 丸 瓦	面 戸 瓦	鬼 瓦
重量 (kg)	629	55	41	4.5	—	3.0	24.5
割合 (%)	83.0	7.3	5.4	0.6	—	0.4	3.3

また、平瓦1枚の重量は約3.8kg、丸瓦1枚の重量は約2.8kgであった。

- (3) 近世瓦特有のいぶしは、焼成の最終段階でその工程を行うものであるが、焼成によりいぶしの付着状況が異なり、また、地下に埋蔵中、地下水などによっていぶしが消えてしまうようである。
- (4) 一乗寺本堂の南東および、北西軒下には、現在も平瓦および、軒平瓦が多数保存されている。今回大釜瓦窯跡出土瓦を整理するにあたり、参考資料として、一乗寺住職大田実秀氏より平瓦（刻印瓦）5枚、軒平瓦2枚をお借りし、本書に報告させて頂いた。
- (5) 近世以降の平瓦製作には、桶巻き作りあるいは、凸型模骨および、凹型模骨による1枚作りによるものが想定されるが、布目痕やハナレ砂による痕跡などにより、それぞれの製作技法の分類が行われている。しかし、瓦の側面の形状によってそれらの製作技法の違いが判断できると考えられる（第16図 平瓦の製作技法）。凹型1枚作りでは、粘土板を模骨に貼りつけ、模骨にあわせて側面を切断するため、側面は垂直な形状を呈し、桶巻き作りでは、模骨に巻きつけた円柱状の粘土を最終的に4分割するため、側面は内傾した形状を呈するようになると考えるものである。また、大釜瓦窯跡出土瓦では1点も出土していないが、凸型1枚作りでは、両側刃に板をおき凸面に力を加えるため、断面形状が「く」の字形を呈するようになる。
- (6) コビキは、「タタラ（粘土を直方体に積みあげたもの）からコビキ（瓦の大きさに応じた粘土板を切り取ること）する道具の違いを丸瓦凹面にのこる痕跡から捉え、（中略）このうち、コビキの痕跡では、継弧線が無数についたいわゆる糸切状のコビキAと胎土中にある砂粒の移動したあとが横筋になつてあらわれるコビキBに分れる。Aは弧線に直交する方向で切るところから、鉄線ないし糸の両端を手にもって手前にひっぱるのに対し、Bは軸木につくりつけた張力の大きい鉄線でもって横筋と同一方向に切りとったと考えられるものである。」
- 森田克行『攝津 高槻城』 1985 高槻市教育委員会
- (7) 「ダルマ窯」における瓦の窯詰め状況は、現在でも一部の瓦屋で操業が行われているため、当時の状況が復元される。それによれば、平瓦および、丸瓦（玉縁部を上に）はともに、規則正しく立て並べ、さらに2段3段と立て重ねるようである。
- (8) 註6と同じ
- (9) 註6の文献より
- (10) 現在、一乗寺本堂に葺かれている軒平瓦は、数種類の文様が確認されるが、大釜瓦窯跡出土と同じ文様の軒平瓦も数点確認される。また、一乗寺では、本堂の瓦の葺き替えが計画されており、今後、新たな資料がえられるとともに、大釜瓦窯跡出土瓦との関係がより理解できるものと考えられる。
- (11) 大沢窯跡の瓦捨て場の土坑より出土した近世瓦のうち、⁷ 斧斗瓦では「あらかじめ分割線を入れておき、焼成後分割するもの（A）と、焼成前に分割し、分割面をヘラケズリ調整するもの（B）」の2

種類の製作技法が確認されている。

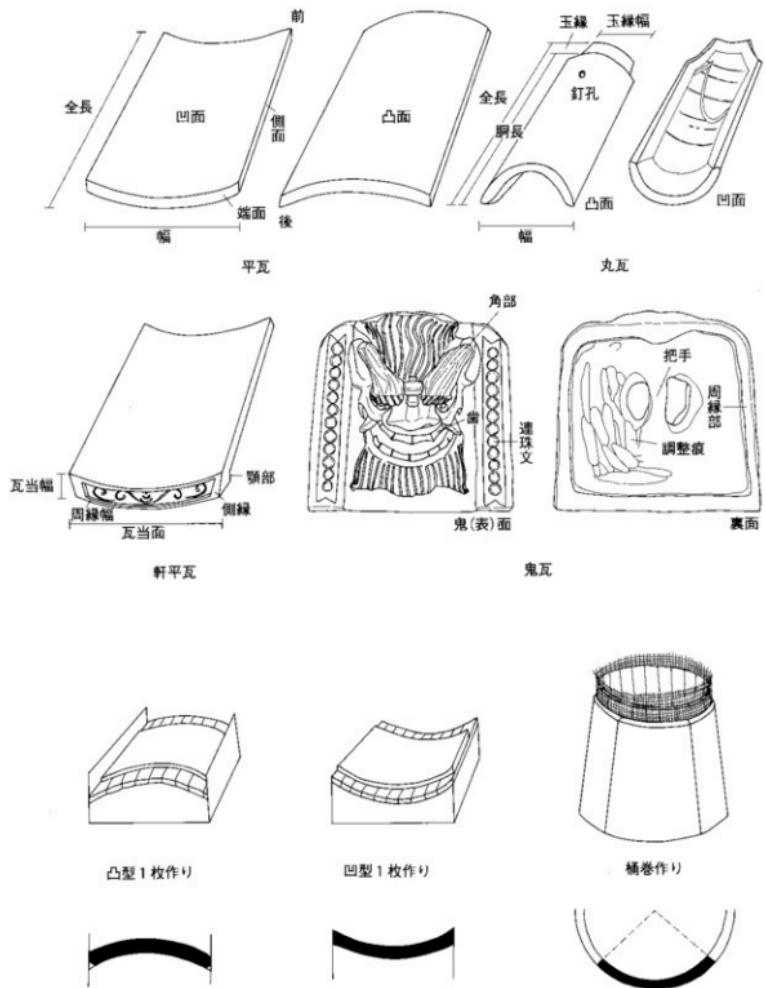
佐藤則之他『醍沢・大沢窯跡ほか』 1989 宮城県教育委員会

- (12) 大釜瓦窯跡出土の鬼瓦では、以下のように名称を区別し、使用している。鬼瓦を形作る大きさの箱状のものの、おもて面=「鬼（表）面」。その裏面=「裏面」。鬼（表）面に接合されている鬼の顔の部分=「鬼瓦鬼面」あるいは、「鬼面」。
- (13) 小林章男『続 鬼瓦』 1991 （株）共同精版印刷
- (14) 大釜瓦窯跡出土の鬼瓦は、鬼（表）面はミガキあるいは、ヘラナデによって丁寧に表面を仕上げているが、裏面および、側面の調整には統一性がなく、丁寧なヘラナデや粗いナデが混在している。また、裏面のナデは、指ナデによって行われた形状を呈している。
- (15) 姫路市船津町において、主として文化財修理用耐久瓦製造および、建築工事業（姫路城、熊本城、二条城、四天王寺、円教寺など）を行っておられる小林平一氏に実見して頂き、瓦の一部ではないかとのご教示を頂いた。
- (16) これまでにも多くの鬼瓦を復元された小林平一氏の製作現場および、お話によるものである。
- (17) 撲乱土坑より出土した刻印瓦においては、調査中に区割りした範囲（第4図参照）より出土した刻印文様のみを図示しており、出土点数については省略した。
- (18) 平瓦前面の刻印が押されている位置については、左右側邊から刻印の中心まで何センチ何ミリの位置に刻印が認められるかを計測した。また、図示するにあたっては、1センチ単位で区切り（0.0～0.9センチ、1.0センチ～1.9センチ以下同）、側邊からの位置を明示した。

出土瓦観察表および、実測図

凡 例

1. 全長および、幅の計測値は、復元推定によるものは（ ）で記入している。
2. 各瓦の部位名称については、第16図に明記している。
3. 出土位置において、調査区南端U字溝沿いは3号瓦窯跡南西の瓦捨て場を表し、5区以下、4区～1区は、第4図に記載した位置を示している。
4. 西拡張区は、広く調査区西半分の範囲を表している。



第16図 出土瓦の部位名称／平瓦の製作技法

第3表 大釜瓦窯跡出土瓦観察表 (1)

No.	種別	出土地	計測値	形態状の特徴	技法上の特徴	地土・色調・焼成	備考	
1	平瓦原	1号瓦窯 東燃焼室	全長 厚さ	平面形状は不明 右前面部分が焼成 側面は垂直に直取り	表面は横方向に直線的なハラチで 凹凸が見られないが、左側入 れ具合が直線でないため、表 面若干の起伏が認められる 凸凹はたておろび、斜め方向 に直るハラチの痕がある	地土-モルタルからら いの細砂粒を 含む 色調-灰白色 焼成-いぶしなし	右前面面に分 割の刻印あり	
2	平瓦原	1号瓦窯 西燃焼室	全長 厚さ	平面形状は不明 右前面第一部が焼成 側面は垂直に直取り	表面は横方向に直線的なハラチで 凹凸が見られないが、左側入 れ具合が直線でないが、表 面若干の起伏が認められる 凸凹はたておろび、斜め方向 に直るハラチの痕がある	地土-モルタルからら いの細砂粒を 含む 色調-灰白色 焼成-いぶしなし	右前面面に分 割の刻印あり	
3	平瓦原	1号瓦窯 西燃焼室	全長 厚さ	平面形状は不明 右前面部分が焼成 側面は垂直に直取り	表面は横方向に直線的なハラチで 凹凸が見られないが、左側入 れ具合が直線でないが、表 面若干の起伏が認められる 凸凹はたておろび、斜め方向 に直るハラチの痕がある	地土-モルタルからら いの細砂粒を 含む 色調-灰白色 焼成-いぶしなし	右前面面に分 割の刻印あり	
4	平瓦原	1号瓦窯 西燃焼室および、灰原	全長 幅(奥) 厚さ	34.3cm 27.5cm (後30.5cm) 2.5cm	平面形状は右前面が後端部よ り若干長い状態で焼成 側面は垂直に直取り 厚さは全体的にほぼ均一	表面は横方向に直線的なハラチで 凹凸が見られないが、左側入 れ具合が直線でないが、表 面若干の起伏が認められる 凸凹はたておろび、斜め方向 に直るハラチの痕がある	地土-モルタルからら いの細砂粒を 含む 色調-灰白色 焼成-いぶしなし	右前面面に分 割の刻印あり
5	平瓦原	1号瓦窯 西燃焼室	全長 厚さ	25.5cm 1.9cm	平面形状は左側面が欠損して いるが、右側面を呈する ものとわかれ 側面は垂直に直取り 厚さは全体的にほぼ均一	表面は左側面が行なわれて いるが、右側面を呈する ものとわかれ 側面は垂直に直取り 厚さは全体的にほぼ均一	地土-モルタルからら いの細砂粒を 含む 色調-灰白色 焼成-いぶしなし	原さが薄い (原さが軽い) 軸の部分に 腰かれたと考えられる
6	平瓦原	1号瓦窯 東燃焼室	全長 厚さ	25.8cm 21.6cm 1.6cm	平面形状はほぼ正方形を呈す る 側面の裏面は内傾 背面面にて取りめが行な れていて、裏面 厚さは全体的にほぼ均一	表面は横方向の丁字なましガキ で、裏面は内傾してある 背面面にて取りめが行な れていて、裏面 厚さは全体的にほぼ均一	地土-モルタルからら いの細砂粒を 含む 色調-灰白色 焼成-いぶしなし	軸の底部分 に腰かれたと 考えられる
7	面戸瓦	1号瓦窯 東燃焼室	全長 厚さ	12.8cm 2.4cm	平面形状は不明である 瓦の頂上部を切断した片方 面に相当する	凸凹は横方向の丁字なましガキ で、裏面は内傾してある 背面面にて取りめが行な れていて、裏面 厚さは全体的にほぼ均一	地土-モルタルからら いの細砂粒を 含む 色調-灰白色 焼成-いぶしなし	九瓦瓦半腰出し 面戸瓦に転用 したものと考 えられる
8	面戸瓦	1号瓦窯 東燃焼室	全長 厚さ	11.1cm 2.7cm	平面形状は不明 瓦の頂上部を切断した片方 面に相当する	凸凹は横方向の丁字なましガキ で、裏面は内傾してある 背面面にて取りめが行な れていて、裏面 厚さは全体的にほぼ均一	地土-モルタルからら いの細砂粒を 含む 色調-灰白色 焼成-いぶしなし	九瓦瓦半腰出し 面戸瓦に転用 したものと考 えられる
9	面戸瓦	1号瓦窯 東燃焼室	全長 厚さ	12.9cm 3.0cm	平面形状は不明 瓦の頂上部を切断した片方 面に相当する	凸凹は横方向の丁字なましガキ で、裏面は内傾してある 背面面にて取りめが行な れていて、裏面 厚さは全体的にほぼ均一	地土-モルタルからら いの細砂粒を 含む 色調-灰白色 焼成-いぶしなし	九瓦瓦半腰出し 面戸瓦に転用 したものと考 えられる
10	面戸瓦	1号瓦窯 西燃焼室	全長 厚さ	13.4cm 3.0cm	平面形状は不明 瓦の頂上部を切断した片方 面に相当する	凸凹は横方向の丁字なましガキ で、裏面は内傾してある 背面面にて取りめが行な れていて、裏面 厚さは全体的にほぼ均一	地土-モルタルからら いの細砂粒を 含む 色調-灰白色 焼成-いぶしなし	九瓦瓦半腰出し 面戸瓦に転用 したものと考 えられる
11	面戸瓦	1号瓦窯 西燃焼室	全長 厚さ	12.0cm 2.6cm	平面形状は不明 瓦の頂上部を切断した片方 面に相当する	凸凹は横方向の丁字なましガキ で、裏面は内傾してある 背面面にて取りめが行な れていて、裏面 厚さは全体的にほぼ均一	地土-モルタルからら いの細砂粒を 含む 色調-灰白色 焼成-いぶしなし	九瓦瓦半腰出し 面戸瓦に転用 したものと考 えられる
12	軽瓦	1号瓦窯 西燃焼室	全長 厚さ 瓦当 側壁	— 2.6cm 1.2cm 1.2cm	中心軸は直線 側壁はモルタルから直取り左1重 の一部のみが焼成	瓦当面および、裏面は丁字 なましガキで、裏面はモルタル 瓦当部の折合は断面に見える 筋より瓦当部に取りめ溝 を認める 側壁は全部モルタルで、モルタル を充填して瓦当部を支子し取 付けていると考えられる	地土-モルタルからら いの細砂粒を 含む 色調-灰白色 焼成-全面いぶ し	瓦当面の中央 部および、 瓦当部の一部を残 存
13	鬼瓦	1号瓦窯 西灰原	全長 厚さ	— 3.0cm	鬼瓦の一部と考えられるが、 形状および、部位不明	裏面面および、側面は丁字 なましガキで、裏面はモルタル 瓦当部の折合は断面に見える 筋より瓦当部に取りめ溝 を認める	地土-モルタルからら いの細砂粒を 含む 色調-灰白色 焼成-全面いぶ し	瓦当面の中央 部および、 瓦当部の一部を残 存

第4表 大釜瓦跡出土瓦観察表 (2)

No.	種別	出土地点	計測値	形態状の特徴	技法上の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
14	鬼瓦	1号瓦窯跡 西灰原	全長 厚さ	30.2cm 2.4cm	鬼瓦の一部と考えられるが、形状および、部位不明	(鬼) 面は丁寧なミガがあり、裏面はなめらかである 裏面は一部に丁寧なミガの付いたものと付いたものとあり、全体的にミガが付いていない	胎土 - 細粒を含む 色調 - 灰色 焼成 - 全面にいぶし	
15	鬼瓦	1号瓦窯跡 東・西焼成室	全長 厚さ 周縁幅	30.2cm 2.2cm 4.8cm	左上3-7番の大半が欠損して 左側は瓦面で、右側は裏面 はまろく、裏面は平坦な は正方形を呈する 鬼(表) 面には脚部される腰 用溝によるナギおよび、押さ みの跡がある。裏面は左側 に側面の複数段(内)側 側は欠損)が残る 連続溝はほぼ、上下ともに 直線的である	鬼(表) 面は横方向の棒、不 規則な凹凸がある。裏面はなまらかである 裏面は一部に丁寧なミガの付いたものと付いたものとあり、全体的にミガが付いていない	胎土 - 細粒を含む 色調 - 灰色 焼成 - 全面にいぶし	東西面焼成室 より、焼成跡 に被覆したと 考えられる
16	平瓦薄	2号瓦窯跡 東焼成室	全長 厚さ	26.1cm 1.4cm	平面形状は正方形に近い長方 形を呈する 左側端部が欠損 側面の腰用溝は内側 厚さは全体的にほぼ均一	面端部は横方向工具により 削り込まれている 裏面は左側端部にナギテで行 われているが、右側(腰用溝 によるもの)によって削られ たとされる跡がある 側面は腰用溝により削り 込まれていて、浮きあひが見 出されている	胎土 - 細粒を含む 色調 - 灰色 焼成 - 陶面に一部に 白粉の上に	面端および、 側・端面にス テラ斐ジの物 質が若干付 着
17	平瓦薄	2号瓦窯跡 東焼成室	全長 厚さ	25.2cm 1.4cm	平面形状は左半分が欠損して 左側端部が欠損して、右側は 正方形に近い長方形を呈する ものと考えられる 側面は側面に面取り	面端部は横方向の丁寧なヘラナ テが行われていて、左側端部 はなまらかである。右側端部 は左側端部と同様、横方 向の長いヘラナテが行われて いる	胎土 - 細粒を含む 色調 - 灰色 焼成 - 陶面に一部に 白粉の上に	面端および、 側面にス テラ斐ジの物 質が若干付 着
18	平瓦薄	2号瓦窯跡 西焼成室	全長 厚さ	24.9cm 1.2cm	平面形状は左半分が欠損して おり不規則であるが、10と同様 正方形に近い長方形を呈する 側面は側面に面取り	面端部は横方向および、基部に ヘラナテが行われているが、裏面 は若干の状況の状況で認め られる。左側端部は不規則なヘ ラナテが行われていて、右側端部 は左側端部と同様、横方 向の長いヘラナテが行われて いるが、(ヨモ)むきの跡がある 他の腰用溝は、左側端部の腰 用溝は側面に面取りをして後 上部を削り整めている	胎土 - 細粒を含む 色調 - 灰色 焼成 - 陶面に一部に 白粉の上に	窓の底部分 に残されたと 考えられる
19	軒瓦	2号瓦窯跡 東焼成室	全長 厚さ 瓦当部 周縁幅	— 2.5cm 2.5cm 1.7cm 2.8cm	中心飾りの部分は欠損 唐草は必ず中心部から右方に が残存しており、中心から下 き、上巻きの上巻きの2葉	瓦当部(瓦面および、裏面) は必ず中心部から右方に が残存しているが、瓦(ヨモ)む きの跡がある。左側端部の腰 用溝は側面に面取りをして後 上部を削り整めている	胎土 - 細粒を含む 色調 - 灰色 焼成 - 全面にいぶし	瓦当面の右端 部が残存
20	軒瓦	2号瓦窯跡 東焼成室	全長 厚さ 瓦当部 周縁幅	— 2.5cm 2.5cm 1.3cm 2.8cm	中心飾りは宝珠 唐草は必ず中心部と下巻き、上 巻きの上巻きおよび、下巻き 左1葉が残存	瓦当部(瓦面および、裏面) は必ず中心部から右方に が残存しているが、瓦(ヨモ)む きの跡がある。左側端部の腰 用溝は側面に面取りをして後 上部を削り整めている	胎土 - 細粒を含む 色調 - 灰色 焼成 - 全面にいぶし	瓦当面の右端 部が残存
21	丸瓦	2号瓦窯跡 西焼成室	全長 厚さ 瓦当部 周縁幅	36.2cm 2.5cm 18.5cm 2.5cm 21.5cm 4.5cm 14.5cm	長方形の割部に玉縁が後被 石三線縁および、右前縁部の 腰用溝が付いており、裏面 は全体的にほぼ均一	表面はたて方向に、玉縁部は 必ず左側に腰用ヘラナテが行 われていて、右側端部は丁寧な ヘラナテが付いており、左側端部 の腰用ヘラナテははっきりして いるが、瓦当部の欠損状況によ り、腰用ヘラナテは到底さ ず不規則である	胎土 - 細粒を含む 色調 - 灰色 焼成 - 陶面に一部に 白粉の上に	いぶしの付着 部の裏面 成形の裏面が 確認できる 図版25、②
22	平瓦厚	2号瓦窯跡と 3号瓦窯跡の間	全長 厚さ	— 2.5cm	平面形状は不明 右側端部が残存 裏面は裏面に面取り	面端および、側・端面は横方 向に大きなミガが付いてお り、裏面はなめらかである 裏面は左側端部が付いてお り、右側端部が付いてお り、左側端部の腰用溝が付 いており、右側端部の腰用 溝が付いていない	胎土 - 細粒を含む 色調 - 灰色 焼成 - 陶面に一部 に白粉の上に	右端面に太 陽形の印附有 り
23	軒瓦	2号瓦窯跡と 3号瓦窯跡の間	全長 厚さ 瓦当部 周縁幅	— 2.5cm — 1.2cm	中心飾りは宝珠 唐草は必ず中心部と下巻き、上 巻きの右巻きが残存	表面はたて方向に、玉縁部は 必ず左側に腰用ヘラナテが行 われていて、右側端部は丁寧な ヘラナテが付いており、左側端部 の腰用ヘラナテははっきりして いるが、瓦当部の欠損状況によ り、腰用ヘラナテは到底さ ず不規則である	胎土 - 細粒を含む 色調 - 灰色 焼成 - 陶面に一部 に白粉の上に	瓦当面の右端 部が残存
24	丸瓦	2号瓦窯跡と 3号瓦窯跡の間	全長 厚さ 玉縁部 周縁幅	— 2.7cm — 4.4cm	長方形の割部に玉縁が後被 る形状を呈するものと思われ て玉縁部の一部が残存	表面はたて方向に、玉縁部は 必ず左側に腰用ヘラナテが行 われていて、右側端部は丁寧な ヘラナテが付いており、裏面はな めらかである 裏面は左側端部の腰用ヘラナテ が付いており、右側端部の腰用 ヘラナテが付いていない	胎土 - 細粒を含む 色調 - 灰色 焼成 - 陶面に一部 に白粉の上に	玉縁接続面に 付着の跡印 あり

第5表 大金瓦跡出土瓦観察表 (3)

No.	種別	出土地	計測値	形態状の特徴	技法上の特徴	胎土・色調・焼成	備考
25	鬼瓦	2号瓦張部と 3号瓦張部の間	全長 厚さ	倒壊した鬼瓦裏面の一部と考 えられる一部が残存しており 切り込みが認められる	表面は全面にわたりナデが行 われており、削り落とされたよ るものと見えて行われたよ るものと見えて行われたよ り思われる形状である。	胎土— ϵ 1mmくら いの細砂粒を含む 色調—灰褐色 焼成—表面および 裏面ともに灰褐色 いぶし	
26	丸瓦	3号瓦張部 東側教室	全長 幅 厚さ 玉縁幅 玉縁幅	18.2cm 4.2cm 2.5cm 5.8cm	瓦が割れた割れ部に玉縁が接着す る形を呈するものと思われ る。 玉縁部が残存	表面および、玉縁部は横方向 に瓦なうナラフを行われて いる。 裏面は横方向に瓦なうナラフを行 われていて、横方向の接縫部は 削り落とされたよ り思われる。	胎土— ϵ 1mmくら いの細砂粒を含む 色調—灰褐色 焼成—表面および 裏面ともに灰褐色 いぶし
27	平瓦厚	調査区南端 U字溝沿い	全長 幅 厚さ	20.3cm 3.7cm 2.5cm	平面形状は前縁部が欠損して いるが、前縁部が後縁部より 若干高く、谷形を呈するも の。 裏面は直角に面取り	表面は横方向に丁寧なヘラナ デが行われている。 裏面は不完全方向の粗いヘラナ デが行われていて、裏面に点状の 剥離部が認められる。	胎土— ϵ 1mmくら いの細砂粒を含む 色調—灰褐色 焼成—表面および 裏面ともに灰褐色 いぶし
28	平瓦厚	調査区南端 U字溝沿い	全長 幅 厚さ	2.7cm	平面形状は不明 右側縁部が残存 裏面は直角に面取り	表面形状は横方向の 瓦なうナラフを行われて いる。 裏面は直角に面取り	胎土— ϵ 1~2mm くらいの細砂粒を含む 色調—灰褐色 焼成—表面および 裏面ともに灰褐色 いぶし
29	平瓦厚	調査区南端 U字溝沿い	全長 幅 厚さ	2.7cm	平面形状は不明 右側縁部の一部が残存 裏面は直角に面取り	表面および、裏面は横方向の 瓦なうナラフを行われて いる。 裏面は不完全方向にヘラナデが 行われていて、裏面に点状の 剥離部が認められる。	胎土— ϵ 1~2mm くらいの細砂粒を含む 色調—青褐色 焼成—表面および 裏面ともに灰褐色 いぶし
30	平瓦厚	調査区南端 U字溝沿い	全長 幅 厚さ	2.5cm	平面形状は不明 右側縁部の一部が残存 裏面は直角に面取り	表面および、裏面は横方向の 瓦なうナラフを行われて いる。 裏面は不完全方向にヘラナデが 行われていて、裏面に点状の 剥離部が認められる。	胎土— ϵ 1mmくら いの細砂粒を含む 色調—灰褐色 焼成—表面および 裏面ともに灰褐色 いぶし
31	平瓦厚	調査区南端 U字溝沿い	全長 幅 厚さ	2.7cm	平面形状は不明 右側縁部の一部が残存 裏面は直角に面取り	表面および、裏面は横方向に 瓦なうナラフを行われて いる。 裏面は直角に面取り	胎土— ϵ 1mmくら いの細砂粒を含む 色調—灰白色 焼成—いぶし
32	平瓦厚	調査区南端 U字溝沿い	全長 幅 厚さ	2.5cm	平面形状は不明 右側縁部の一部が残存 裏面は直角に面取り	表面および、裏面は横方向の 瓦なうナラフを行われて いる。 裏面および、裏面は直角に 面取り	胎土— ϵ 1mmくら いの細砂粒を含む 色調—灰褐色 焼成—いぶし
33	平瓦厚	調査区南端 U字溝沿い	全長 幅 厚さ	2.6cm	平面形状は不明 右側縁部の一部が残存 裏面は直角に面取り	表面および、側・端面は横方 向に丁寧なヘラナデが行われ ていて、裏面は直角に面取り 左側縁部は中央から内側へ残 り、裏面は直角に面取り	胎土— ϵ 1mmくら いの細砂粒を含む 色調—灰白色 焼成—いぶし
34	腰面戸 瓦	調査区市端 U字溝沿い	全長 幅 厚さ	1.4cm	平面形状は不明 右側縁部が残存 右側縁部は中央から内側へ残 り、裏面は直角に面取り	表面形状は横方向に丁寧 なヘラナデが行われていて、 裏面は直角に面取り	胎土— ϵ 1~2mm くらいの細砂粒を含む 色調—灰褐色 焼成—いぶし
35	平瓦厚	調査区市端 U字溝沿い	全長 幅 厚さ	24.7cm 2.6cm	平面形状はほぼ長方形を呈す るものと思われる 右側縁部が残存 裏面は直角に面取り	表面および、端面は横方向に 瓦なうナラフを行われて いる。 裏面は不完全方向に粗いヘラナ デが行われていて	胎土— ϵ 1mmくら いの細砂粒を含む 色調—灰褐色 焼成—表面および 裏面ともに灰褐色 いぶし
36	新平瓦	調査区市端 U字溝沿い	全長 幅 厚さ 瓦頭幅 瓦頭幅	2.3cm 1.4cm 0.9cm	中心部分は欠損 裏面はほほん中心部から左半分 を残しておらず、中心部から 下向き、上巻きの2葉	瓦頭部(正反面)および、裏面 は丁寧なヘラナデが行われて いる。瓦頭部の断合反対は、瓦当部 と瓦頭部を接続する際の接縫部 に瓦頭部を設け、瓦頭部を めこみ、瓦当接合部に粘土 を貼り付けていたと想えられ る。	胎土— ϵ 1mmくら いの細砂粒を含む 色調—灰褐色 焼成—表面および 裏面ともに灰褐色 いぶし
37	鬼瓦	調査区市端 U字溝沿い	全長 幅 厚さ	2.5cm	形狀より鬼瓦裏面の角の付け 根部と考えられる	鬼(差) 避け合の先端に向け て不完全方向に削り落とされた 裏面ははめなかつである 裏面は横形状の剥離部を残り、 鬼瓦との複合状況が推定され る	胎土— ϵ 1mmくら いの細砂粒を含む 色調—灰褐色 焼成—部分的に灰 色のいぶし
38	平瓦厚	4号瓦張部 西側教室	全長 幅 厚さ	2.5cm	平面形状は不明 左側縁部の一部が残存 裏面は直角に面取り	表面および、端面は横方向の 瓦なうナラフを行わせ、表面 は瓦頭部の剥離部で覆われて いるが、不完全方向の粗いヘラナ デがよく、側(コモ：むろろ) に残る点状の剥離部が認められる	胎土— ϵ 1mmくら いの細砂粒を含む 色調—灰褐色 焼成—表面および 裏面ともに灰褐色 いぶし

第6表 大金瓦室跡出土瓦類発表 (4)

No.	種別	出 土 位 置	計面積	形態状の特徴	技法上の特徴	地 考	
39	平瓦厚	4号瓦窯跡 西窓櫻室	全長 幅 厚さ	平面形状は不明 右側面部の一部が残存 側面は垂直に面取り	正面および、裏面は横方向の 引抜きが行われたものと思われるが 表面は磨滅している 背面およそ側面は側面打たて方 向に粗いへラナダが行われる 側面には横方向に細いの筋 目がある	肋土- ϵ 1mmくらい の繊維粒を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし	右前面面に円 形の剥印あり
40	平瓦厚	4号瓦窯跡 西窓櫻室	全長 幅 厚さ	平面形状は不明 右側面部の一部が残存 側面は垂直に面取り	正面および、裏面は横方向の 引抜きが行われたものと思われるが 表面は磨滅している 背面およそ側面は側面打たて方 向に粗いへラナダが行われる 側面には横方向に細いの筋 目がある	肋土- ϵ 1~2mmの砂粒 を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし	右前面面に円 形の剥印あり
41	平瓦厚	4号瓦窯跡 西窓櫻室	全長 幅 厚さ	平面形状は不明 右側面部の一部が残存 側面は垂直に面取り	正面および、側面は横方向の 引抜きが行われたものと思われる 表面は磨滅している 背面およそ側面は側面打たて方 向に粗いへラナダが行われる 側面面際には横方向の の線の痕跡が残る	肋土- ϵ 1mmくらい の繊維粒を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし	左背面面にわ かに円形の剥印あり
42	平瓦厚	西松原区	全長 幅 厚さ	平面形状は不明 右側面部の一部が残存 側面は垂直に面取りされた後、 部分的に整形されている	正面および、側面は横方向に 引抜きが行われたものと思われる 表面は磨滅している 背面は側面打たて方 向の粗いへラナダが行われ 前面面際には横方向の の線の痕跡が残る	肋土- ϵ 1~2mmの砂粒 を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし	左前面面に横 形の剥印あり
43	平瓦厚	西松原区	全長 幅 厚さ	平面形状は不明 右側面部の一部が残存 側面は垂直に面取り	正面および、側面は横方向の 引抜きが行われたものと思われる 表面は磨滅している 背面は側面打たて方 向の粗いへラナダが行われ 前面面際には横方向の の線の痕跡が残る	肋土- ϵ 1mmくらい の繊維粒を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし	右前面面に手 印あり
44	平瓦厚	西松原区	全長 幅 厚さ	平面形状は不明 右側面部の一部が残存 側面は垂直に面取り	正面および、裏面は横方向の 引抜きが行われたものと思われる 表面は磨滅している 背面は側面打たて方 向の粗いへラナダが行われ 前面面際には横方向の の線の痕跡が残る	肋土- ϵ 1~2mmの砂粒 を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし	右前面面に手 印4分割の剥 印あり
45	平瓦厚	西松原区	全長 幅 厚さ	平面形状は不明 右側面部の一部が残存 側面は垂直に面取り	正面および、側面は横方向の 引抜きが行われたものと思われる 表面は磨滅している 背面は側面打たて方 向の粗いへラナダが行われ 前面面際には横方向の の線の痕跡が残る	肋土- ϵ 1mmくらい の繊維粒を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし	右前面面に手 印4分割の剥 印あり
46	平瓦厚	西松原区	全長 幅 厚さ	平面形状は不明 右側面部の一部が残存 側面は垂直に面取り	正面および、裏面は横方向の 引抜きが行われたものと思われる 表面は磨滅している 背面は側面打たて方 向の粗いへラナダが行われ 前面面際には横方向の の線の痕跡が残る	肋土- ϵ 1mmくらい の繊維粒を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし	右前面面に四 角形の剥印あり
47	軒平瓦	西松原区	全長 幅 厚さ (平瓦部)	中心軋りの部分は欠損 唐草は下書きおよび、上書き の左2葉のごく一部のみが残存	瓦当部(瓦当面および、裏面) は側面打たてラナダが行われて いる 瓦当部の接合状況は不明であ る	肋土- ϵ 1mmくらい の繊維粒を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし	瓦当部の左下 半部のごく一 部のみが残存
48	軒平瓦	西松原区	全長 幅 厚さ (平瓦部)	中心軋りの部分は欠損 唐草は下書きおよび、上書き の左2葉のごく一部のみが残存	瓦当部(瓦当面および、裏面) は側面打たてラナダが行われて いる 瓦当部の接合状況は不明であ る	肋土- ϵ 1mmくらい の繊維粒を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし	瓦当部の左下 半部のごく一 部のみが残存
49	鬼瓦	西松原区	全長 幅 厚さ	鬼瓦の一部と考えられるが、 裏面および、裏面、側面 側面の一部が残存	鬼(裏)面は不定方向の比較 的粗いへラナダが行われてい る 裏面および、裏面部分はラナ ダが丁寧に行われており、ラナ ダあるいは、帯ナデ(背光に よって行われたものと思わ れる)	肋土- ϵ 1mmくらい の繊維粒を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし	肋土- ϵ 1mmくらい の繊維粒を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし
50	鬼瓦	西松原区	全長 幅 厚さ	鬼瓦の一部と考えられ、形状 は複雑で、裏面は側面と形状の 相違あるいは、裏面の裏側(裏 裏)の一部と思われる	裏面(模倣している面)は横 方向に丁寧なへラナダが行わ れている	肋土- ϵ 1mmくらい の繊維粒を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし	肋土- ϵ 1mmくらい の繊維粒を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし
51	平瓦厚	5 区	全長 幅 厚さ	平面形状は前縁部より 若干右側が抉い形を呈する 側面は直角に面取り 厚さは全体的にほぼ均一	前面および、裏面は横方向の 引抜きが行われたものと思わ れる 表面は磨滅している 背面は側面打たて方 向に粗いへラナダが行われ た後面を斜めに整形してい る	肋土- ϵ 1mmくらい の繊維粒を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし	肋土- ϵ 1mmくらい の繊維粒を含む 色調-灰白色 焼成-全面に液灰 色-青いぶし

第7表 大金瓦窓跡出土瓦觀察表 (5)

No.	種別	出 土 位 置	計 制 体	形 狀 特 徴	技 法 上 の 特 徴	勘 考	
52	平瓦厚	5 区	全長 輪 厚さ	平面形状は不明 左側端部の一部が残存 側面は垂直に面取り	断面および、端面は横方向の 大きなヘラマークが行われてい る。表面は削減している。 凸面および、側面はたて方向 に粗いヘラマークが行われ、削 減面にはV字状の痕跡が残 る。	粘土- ϵ 1mmくら いの細砂粒を 含む 色調- 灰色 焼成- 全面にいぶ し	左側端面に 「元」の字形 の刻印あり
53	平瓦厚	5 区	全長 輪 厚さ	平面形状は不明 左側端部の一部が残存 側面は垂直に面取り	断面および、端面は横方向の 大きなヘラマークが行われてい る。表面は削減している。 凸面および、側面はたて方向 に粗いヘラマークが行われ、削 減面にはV字状の痕跡が残 る。	粘土- ϵ 1mmくら いの細砂粒を 含む 色調- 灰色 焼成- 全面にいぶ し	右斜端面に半 円4セリの跡 印あり
54	平瓦厚	5 区	全長 輪 厚さ	平面形状は不明 右側端部の一部が残存 側面は垂直に面取り	断面および、端面は横方向の 大きなヘラマークが行われ、削 減面にはV字状の痕跡が残 る。	粘土- ϵ 1mmくら いの細砂粒を 含む 色調- 灰色 焼成- 全面にいぶ し	右斜端面に 「元」の字形 の刻印あり
55	平瓦厚	5 区	全長 輪 厚さ	平面形状は不明 右側端部の一部が残存 側面は垂直に面取り	断面および、端面は横方向の 大きなヘラマークが行われ、表面 は削減している。 凸面および、側面はたて方向 に粗いヘラマークが行われ、削 減面にはV字状の痕跡が残 る。	粘土- ϵ 1mmくら いの細砂粒を 含む 色調- 灰色 焼成- 全面にいぶ し	右斜端面に 「元」の字形 の刻印あり
56	平瓦厚	5 区	全長 輪 厚さ	平面形状は不明 左側端部の一部が残存 側面は垂直に面取り	断面および、端面は横方向の 大きなヘラマークが行われ、表面 は削減している。 凸面および、側面はたて方向 に粗いヘラマークが行われ、削 減面にはV字状の痕跡が残 る。	粘土- ϵ 1mmくら いの細砂粒を 含む 色調- 灰色 焼成- 全面にいぶ し	右斜端面に 「元」の字形 の刻印あり
57	檻戸瓦	5 区	全長 輪 厚さ	平面形状は不明 左側端部の一部が残存 左側端部中段から内側へ向 きに切らんでいく 側面は垂直に面取り	断面および、端面は比較的丁 寧なヘラマークが行われている が、断面には「元」の字形が 残る。	粘土- ϵ 1mmくら いの細砂粒を 含む 色調- 灰色 焼成- 全面にいぶ し	形状から檻戸 瓦と考ら れる 図版25.④
58	軒瓦	5 区	全長 輪 厚さ (平瓦部) 瓦側輪 輪端輪	中心部分は宝珠 唐草は中心部から左右下巻き の2葉の一部が残存	凸面および、端面は平瓦部は 削減されていないが、側面は削 減されている。	粘土- ϵ 1mmくら いの細砂粒を 含む 色調- 灰色 焼成- 全面にいぶ し	凸面の中心 部および、半 円の一部が残 存
59	平瓦厚	4 区	全長 輪 厚さ	平面形状は不明 左側端部の一部が残存 側面は垂直に面取り	断面および、端面は横方向に 丁寧なミガキが行われており 表面は削減してある。	粘土- ϵ 1mmくら いの細砂粒を 含む 色調- 灰色 焼成- いぶし	右斜端面に 「元」の字形 の刻印あり
60	平瓦厚	4 区	全長 輪 厚さ	平面形状は不明 右側端部の一部が残存 側面は垂直に面取り	断面および、端面は横方向の 大きなヘラマークが行われ ている。	粘土- ϵ 1mmくら いの細砂粒を 含む 色調- 灰色 焼成- 全面にいぶ し	右斜端面に 「元」の字形 の刻印あり
61	平瓦厚	4 区	全長 輪 厚さ	平面形状は不明 右側端部の一部が残存 側面は垂直に面取り	断面および、端面は横方向の 丁寧なミガキが行われている が、表面は削減してある。	粘土- ϵ 1mmくら いの細砂粒を 含む 色調- 灰色 焼成- 全面にいぶ し	右斜端面に 「元」の字形 の刻印あり
62	平瓦厚	4 区	全長 輪 厚さ	平面形状は不明 右側端部の一部が残存 側面は垂直に面取り	断面および、端面は横方向の 丁寧なミガキが行われ、表面 は削減してある。	粘土- ϵ 1mmくら いの細砂粒を 含む 色調- 灰色 焼成- 全面にいぶ し	右斜端面に 「元」の字形 の刻印あり
63	平瓦厚	4 区	全長 輪 厚さ	平面形状は不明 右側端部の一部が残存 側面は垂直に面取り	断面および、端面は横方向の 丁寧なミガキが行われ、削 減面には横方向の一部の削 痕があるが、表面は削減して いる。	粘土- ϵ 1mmくら いの細砂粒を 含む 色調- 灰色 焼成- 全面にいぶ し	右斜端面に 「元」の字形 の刻印あり

第8表 大釜瓦窯跡出土瓦觀察表 (6)

番号	種別	出土地位置	計測値	形態状の特徴	技法上の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
64	平瓦厚	4 区	全長 幅 厚さ	平面形状は不明 右直角部の一部が残存 側面は垂直に面取り	凹面および、側面は横方向に 丁寧なまがきが行われ、表面 はなめらかである。 凸面および、側面は横方向に 丁寧なまがきが行われ、表面 はなめらかである。	胎土：土と砂を 含む 色調：灰色 焼成：いぶしなし	胎土：土と砂を 含む 色調：灰色 焼成：いぶしなし	
65	平瓦厚	4 区	全長 幅 厚さ (後) 厚さ	34.1cm 2.6cm 30.5cm 2.4cm	平面形状は直角部が後部部 位で欠損するが、側面は 垂直に面取り	凹面および、側面は横方 向に丁寧なまがきが行われ、 表面はなめらかである。 凸面および、側面は横方 向に丁寧なまがきが行われ、 表面はなめらかである。	胎土：土と砂を 含む 色調：灰色 焼成：いぶしなし	右直角部には一線の接着が残 る。
66	平瓦厚	4 区	全長 幅 厚さ	平面形状は不明 右直角部の一部が残存 側面は垂直に面取り	凹面および、側面は横方 向に丁寧なまがきが 行われ、表面はなめらかである。 凸面および、側面は横方 向に丁寧なまがきが行われ、 表面はなめらかである。	胎土：土と砂を 含む 色調：灰色 焼成：いぶしなし	右直角部には一線の接着が残 る。	
67	軒平瓦	4 区	全長 幅 厚さ (平瓦部)	中心飾りの部分は欠損 側面は直角部の側面が半分 が残されている。中央部から 下巻き、上巻きの2重	瓦直角部「瓦当」とよび、側面 は直角部の側面が半分が 残されている。側面は直角部 の側面が半分が残されている。 瓦直角部の直角部の側面から瓦 当部の接合は、側面に彫り 込み溝が切れていたことは考 えられない。	胎土：土と砂を 含む 色調：灰色 焼成：いぶし	左直角部の左半 分が残れ	
68	丸瓦	4 区	全長 幅 厚さ 玉縁長 玉縁幅	平面形状は不明 斜面部頂上面の一部が残存 斜面部頂上面に釘孔あり	凹面および、 釘孔はたて方向 の直角部の側面 が残り、なめらかな 面が、表面は直角部 の側面が残っている。 斜面部頂上面に釘孔 が残る。	胎土：土と砂を 含む 色調：灰色 焼成：いぶし	左直角部の左半 分が残れ	
69	鬼瓦	4 区	全長 幅 厚さ	平面形状は不明であるが、鬼 瓦の左直角部と側面から 半周の底部から約185°の角 度が残されている。側面 は直角部の側面から 斜面に差している。	鬼（表）直面は接合される部 分が全く失われているが、 斜面部頂上面に釘孔がある。 斜面部頂上面は下巻きを残してお り、側面に沿って直角部の 大変した痕跡と左直角部との あいだに、たて 0.8cm、横 2 .6cmの割合で開けられている	胎土：土と砂を 含む 色調：灰色 焼成：いぶし	左直角部の左半 分が残れ	
70	鬼瓦か	4 区	全長 幅 厚さ	残している形形状は、軒瓦左 の直角部に丸瓦部を接合した形 状に側面している。文様 は斜面部頂上面に残る。 斜面部頂上面に釘孔あるのは、 軒瓦の一部だと 考えられる。	鬼（鬼あるいは、鬼）直面は 斜面部頂上面に残るが、丁寧な まがきを行ったものと考えられ る。表面は斜面部頂上面に残 している。	胎土：土と砂を 含む 色調：灰色 焼成：いぶし	形狀より鬼瓦 あるいは、鬼と 考へられる ことがないであ る。	
71	鬼瓦	4 区	全長 幅 厚さ	平面形状は不明であるが、斜 面部頂上面の底面～側面 と考えられる わざかに立ち上がる直角部が 残存する。	直面には斜面部頂上面はあるが、文 様は斜面部頂上面に残る。 斜面部頂上面に丁寧なまがきを行 われている。	胎土：土と砂を 含む 色調：灰色 焼成：いぶし	斜面部頂上面に 丁寧なまがきを行 われたものと考 えられる。	
72	鬼瓦	4 区	全長 幅 厚さ	平面形状は不明であるが、鬼 瓦の右下巻きと側面から 半周の底部から約185°の角 度が残っている。	鬼（表）直面は接合される部 分が全く失われている。	胎土：土と砂を 含む 色調：灰色 焼成：いぶし	斜面部頂上面に 丁寧なまがきを行 われたものと考 えられる。	
73	鬼瓦か	4 区	全長 幅 厚さ	平面形状は不明であるが、鬼 瓦の右下巻きと側面から 半周の底部から約185°の角 度が残っている。	鬼（表）直面は接合される部 分が全く失われている。	胎土：土と砂を 含む 色調：灰色 焼成：いぶし	斜面部頂上面に 丁寧なまがきを行 われたものと考 えられる。	

第9表 大金瓦窓跡出土瓦觀察表 (7)

No.	種別	出土地	計測値	形態状の特徴	技法上の特徴	粘土・色調・焼成	備考
74	鬼瓦	4 区	全長 厚さ	—— —— 平頭形状は不明であるが、鬼瓦と同様の下唇部より、縦に盛りかなめらかで、その部分はわずかに残存しておらず、その上から左上がりに内凹彫形を呈する	鬼面はたており、横方向の丁寧な手仕事であるが、表面はなめらかである。下唇は左彫に盛り上げて表現し、縦やかな丸みをもつて表現されている。左側は左彫に盛り上げて表現している。	粘土—e 1mm らいの細砂粒を含む 色調—灰白色 焼成—全面に淡灰色のいぶし	粘土・色調・焼成
75	鬼瓦	4 区	全長 電 先端部幅 厚さ	—— —— —— 鬼瓦裏面の右角部(向かって左側)に大きな左上上がりの内凹彫形を呈する	鬼面は先端部に丁寧な手仕事であるが、表面はなめらかである。先端部は整形形状に強く押し削られたものと思われるが、表面は削除されたものと思われる。左側は左彫に盛り上げて表現している。	粘土—e 1mm らいの細砂粒を含む 色調—灰白色 焼成—いぶしなし	全体部分の状況から左側部の製作後、鬼面に貼り付けている
76	鬼瓦	4 区	全長 電 先端部幅 厚さ	—— —— —— 鬼瓦裏面の左角部(向かって右側)に大きな左上上がりの内凹彫形を呈する	鬼面は先端部に丁寧な手仕事であるが、表面はなめらかである。先端部は整形形状に強く押し削られたものと思われるが、表面は削除されたものと思われる。左側は左彫に盛り上げて表現している。	粘土—e 1mm らいの細砂粒を含む 色調—灰白色 焼成—いぶしなし	複数の形状としており、75、76が右一対の鬼面の角部で考えられる
77	鬼瓦	4 区	全長 電 厚さ	—— —— 5.5cm 鬼瓦の中心部に位置する把手部分に左彫による彫刻が施されている。	鬼面は把手部分に左彫による彫刻が施されているが、形状および部位は不明である。	粘土—e 1mm らいの細砂粒を含む 色調—灰白色 焼成—全面にいぶし	複数の形状としており、75、76が右一対の鬼面の角部で考えられる
78	鬼瓦	4 区	全長 電 厚さ	—— —— 5.5cm 鬼瓦の把手部分にかかる一部に左彫による彫刻が施されているが、形状および部位は不明	鬼(表)面は不定方向に丁寧な手仕事であるが、表面はなめらかである。	粘土—e 1mm らいの細砂粒を含む 色調—灰白色 焼成—全面にいぶし	複数の形状としており、75、76が右一対の鬼面の角部で考えられる
79	鬼瓦	4 区	全長 電 厚さ	—— —— —— 鬼瓦の側面の一部と考えられる左側部に左彫による彫刻が施されている。	鬼(表)面および裏面はたて方向に丁寧な手仕事であるが、表面はなめらかである。	粘土—e 1mm らいの細砂粒を含む 色調—灰白色 焼成—全面にいぶし	複数の形状としており、75、76が右一対の鬼面の角部で考えられる
80	鬼瓦	4 区	全長 電 厚さ	—— —— 3.5cm 鬼瓦の側面の一部とと考えられる左側部に左彫による彫刻が施されている。	鬼(表)面および裏面はたて方向に丁寧な手仕事であるが、表面はなめらかである。	粘土—e 1mm らいの細砂粒を含む 色調—灰白色 焼成—全面にいぶし	複数の形状としており、75、76が右一対の鬼面の角部で考えられる
81	鬼瓦	4 区	全長 電 厚さ	—— —— —— 斜削した鬼瓦裏面の把手周辺部分の一部とと考えられる	裏面は部分的にたておよび横方向に左彫による彫刻が施されているが、全体的に表面は凹凸があり、たて方向に斜削した把手部分にたて方向に丁寧な手仕事であるが、表面はなめらかである。	粘土—e 1mm らいの細砂粒を含む 色調—灰白色 焼成—全面に淡灰色のいぶし	複数の形状としており、75、76が右一対の鬼面の角部で考えられる
82	鬼瓦	4 区	全長 電 厚さ	—— —— —— 平面形状は不明であるが、鬼瓦の左側部に左彫による彫刻が施されている。	裏面はたて方向に丁寧な手仕事であるが、表面はなめらかである。	粘土—e 1mm らいの細砂粒を含む 色調—灰白色 焼成—全面に淡灰色のいぶし	複数の形状としており、75、76が右一対の鬼面の角部で考えられる
83	鬼瓦	4 区	全長 電 厚さ	—— —— —— 鬼瓦の側面の一部とと考えられる左側部に左彫による彫刻が施されている。	裏面はたて方向の調整が施されているが、表面はなめらかである。	粘土—e 1mm らいの細砂粒を含む 色調—灰白色 焼成—全面に淡灰色のいぶし	複数の形状としており、75、76が右一対の鬼面の角部で考えられる
84	鬼瓦	4 区	全長 電 厚さ	—— —— —— 斜削した鬼瓦裏面の把手周辺部分の一部とと考えられる	裏面はたて方向の丁寧な手仕事であるが、表面はなめらかである。	粘土—e 1mm らいの細砂粒を含む 色調—灰白色 焼成—全面に淡灰色のいぶし	複数の形状としており、75、76が右一対の鬼面の角部で考えられる

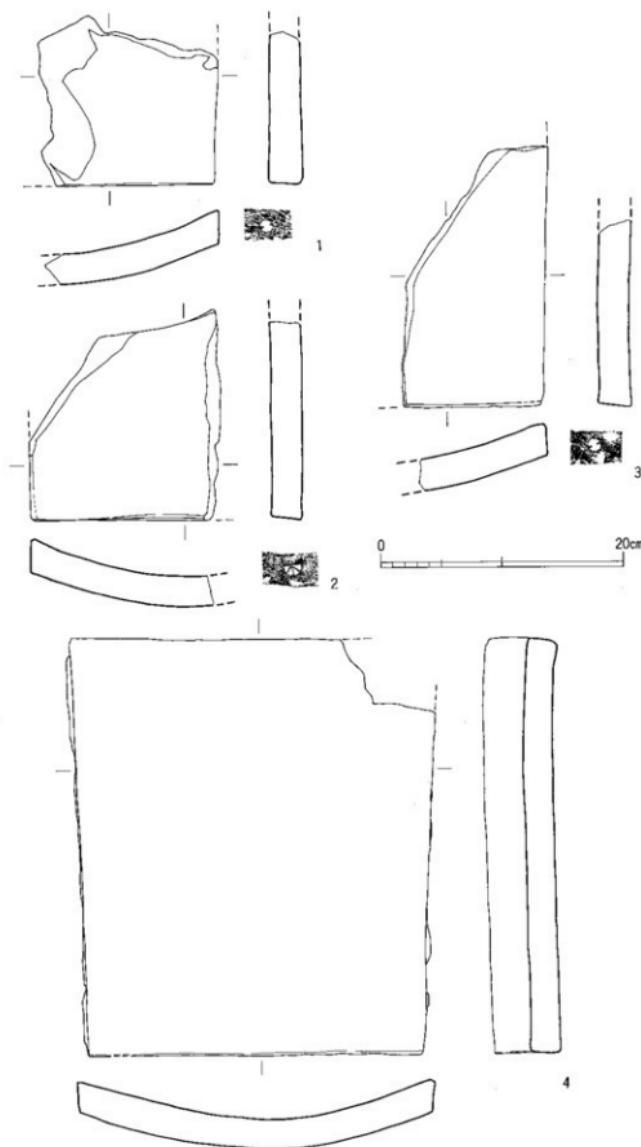
第10表 大釜瓦窯跡出土瓦觀察表 (8)

番 号	種 別	出 土 位 置	計 面 積	形 態 状 の 特 徴	技 法 上 の 特 徴	胎 土・色調・焼成 考	
						胎 土	色 調
85	鬼 瓦	4 区	全長 厚さ	平面形状は不明であるが、鬼 瓦の側面の一部と考えられる 陶器は不定方向に丁寧な ミガキが施され、表面はな めらかである。側面は 側面と側面との接合による 瘤目痕がある。	陶土 - & 1 号から の砂粒を含む 色調 - 茶色 焼成 - いぶしなし	胎土 - & 1 号から の砂粒を含む 色調 - 茶色 焼成 - いぶしなし	
86	鬼 瓦	4 区	全長 厚さ	軽く削った鬼瓦(表)の一部 と考えられる。	鬼(表) - 表は不定方向に丁寧 なミガキが行われ、表面はな めらかである。側面は 側面と側面との接合による 瘤目痕がある。	胎土 - & 1 号から の砂粒を含む 色調 - 茶色 焼成 - いぶしなし	
87	鬼 瓦	4 区	全長 厚さ	鬼瓦の側面の一部と考えられ る(表)。表面および、側面の一 部が残存する。	鬼(表) - 表は不定方向に丁寧 なヘラナガが行われるが、な らべや部分的に擦り付けて いる。	胎土 - & 1 号から の砂粒を含む 色調 - 茶色 焼成 - いぶしなし	
88	平瓦厚	3 区	全長 厚さ	34.8cm 2.4cm	平面形状は左半分が残して いるが、右側面が後削られ、右 側面が残る。台形を呈す のである。	断面および、端面は横方向の 窪みが複数個ある。左半分が はぎ取られたものと見られるが 表面は整備している。右側面 にはヘラナガが行われているか どうか(モコモシ)によると 残されている状況の痕跡が認め られる。	胎土 - & 1 ~ 2 号 くらいの砂粒を含む 色調 - 茶色 焼成 - 一端に後灰 色のいぶし
89	平瓦厚	3 区	全長 厚さ	平面形状は不規 則前面部が残存 側面は垂直に取り	断面および、端面は横方向の 窪みが複数個ある。左半分が はぎ取られたものと見られるが 表面は整備している。右側面 にはヘラナガが行われているか どうか(モコモシ)によると 残されている状況の痕跡が認め られる。	胎土 - & 1 号から の砂粒を含む 色調 - 茶色 焼成 - 一端に後灰 色のいぶし	
90	平瓦厚	3 区	全長 厚さ	平面形状は不明 右前面部の一部が残存 側面は垂直に取り	断面は横方向の後、たて方向 に丁寧なミガキが行われる。 表面はなめらかである。左半 分は横方向のコビナガ、右 側面は後削られ、右側面には 瘤目痕が残る。	胎土 - & 1 号から の砂粒を含む 色調 - 茶色 焼成 - 全面にいぶし	
91	丸 瓦	3 区	全長 厚さ	34.1cm 2.8cm 幅員 25.5cm 上縁幅 4.5cm 下縁幅 (13.8cm)	丸瓦の側面に瓦筋が接着 して瓦筋部および、左前面部 の側面が欠損。	丸瓦は不定方向にて、横方 向に丁寧なミガキが行われ る。表面はなめらかである。 側面は横方向のコビナガ、另 一方は後削られ、右側面には 瘤目痕が残っており、横方向の 調整は行われていない。	胎土 - & 1 号から の砂粒を含む 色調 - 茶色 焼成 - 横方向上と左 側面に後灰色の いぶし いふしの付着 状況による 成時の焼成 状況が未定 で、参考に 図版25.①
92	鬼 瓦	3 区	全長 厚さ	鬼瓦の側面の一部と考えられ る(表)。表面および、左前面 部の一部が残存する。	鬼(表) - 表は不定方向に丁寧 なミガキが行われ、表面はな めらかである。側面は横 方向にて、丁寧なミガキが 行われており、たて方向の一部の 側面が残る。	胎土 - & 1 号から の砂粒を含む 色調 - 茶色 焼成 - 一端に後灰 色のいぶし	
93	鬼 瓦	3 区	全長 厚さ	平面形状は不明であるが、鬼 瓦の側面の一部と想定される。 半径と底面が 19.5° の角 度で最も立ち上がり、底面 は内側に巻きついている。 鬼瓦の側面に瓦筋が接着する 陶器の部分が全て削り切られているが 右側には3列の連珠文が残る。 焼成済みは瓦の側面に斜め 線状の溝である。	鬼(表) - 表は不定方向にて、横 方向に丁寧なミガキが 行われる。表面はな めらかである。側面は横 方向にて、丁寧なミガキが 行われており、たて方向の一部の 側面が残る。	胎土 - & 1 号から の砂粒を含む 色調 - 茶色 焼成 - 一端に後灰 色のいぶし	
94	鬼 瓦	3 区	全長 厚さ	削りした鬼瓦(表)の一部 と考えられる。	鬼(表) - 表は一定方向にて なめらかが行われ、表面はな めらかである。	胎土 - & 1 号から の砂粒を含む 色調 - 茶色 焼成 - 一端に後灰 色のいぶし	
95	鬼瓦か	3 区	全長 厚さ	形状は丸瓦の両端部に類似 しており、70% 削減するもの と思われる。	表(鬼あるいは、焼) - 表は不 定方向にて、なめらかが行 われていて、表面はな めらかである。裏面には 文様が施されている。	胎土 - & 2 ~ 3 号 くらいの小石 を含む 色調 - 茶色 焼成 - いぶしなし	

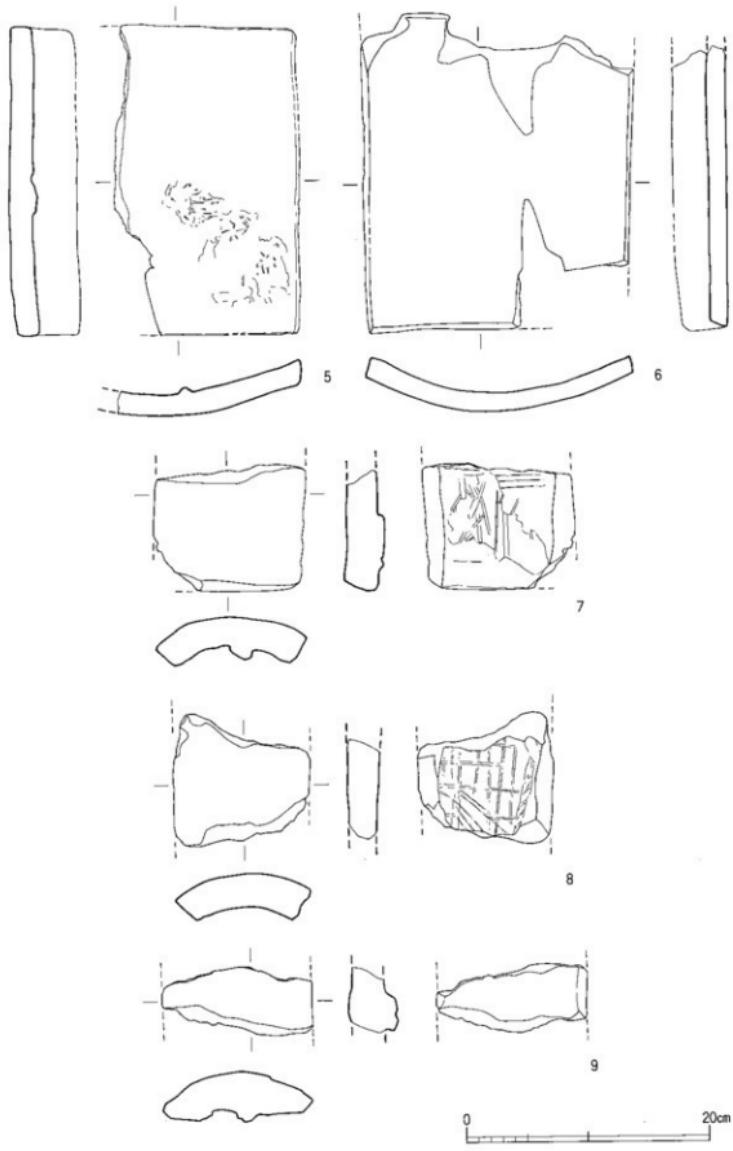
第11表 大釜瓦窯跡出土瓦觀察表 (9)／付大釜瓦窯跡出土窯壁材觀察表

第12表 一乘寺参考資料瓦觀察表 (1)

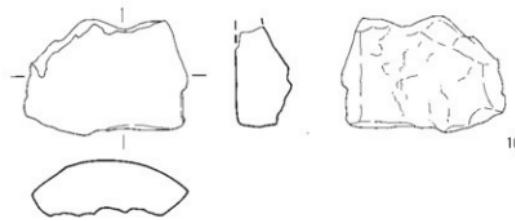
順	種類	土 位	計画	形態の特徴	技法上の特徴	動土・色調・度成	備考	
105	平瓦厚	一乗寺 本堂軒下	全長 幅 厚さ	34.7cm 29.3cm 2.6cm	平面形状は背高部が後端部より若干右側が傾いて形を呈する 側面は直線にて配置 厚さは全体的にほぼ均一	表面は一部中央部が削離していながら、裏面の方の東面ではガタの後の、西面では南側面にたててある 裏面は表面より削離してある 裏面はなめらかである 白面は土台および、斜め方向に比較的多く、裏面は少くである 裏面は表面にて削離してある 裏面は裏面にて削離してある	動土 = 6.1m ³ ら いの細砂粒を 含む 色調 = 茶褐色 度成 = ブラック 地盤 = 全面にいぶ し	左前面に刷印があり 右前面に墨印あり
106	平瓦厚	一乗寺 本堂軒下	全長 幅 厚さ	35.3cm 28.4cm 2.8cm	平面形状は背高部が後端部より若干右側が傾いて形を呈する 側面は直線にて配置 厚さは全体的にほぼ均一	表面は複数方向の丁寧なごまぎの後の、裏面にて削離してある 裏面の東面にごまぎを加えておる 裏面はなめらかである 白面は土台および、斜め方向に比較的多く、裏面は少くである 裏面は表面にて削離してある 裏面は裏面にて削離してある	動土 = 6.1m ³ ら いの細砂粒を 含む 色調 = 茶褐色 度成 = ブラック 地盤 = 全面にいぶ し	左前面に墨印あり 右前面に墨印あり
107	平瓦厚	一乗寺 本堂軒下	全長 幅 厚さ	34.8cm 29.3cm 2.8cm	平面形状は背高部が後端部より若干右側が傾いて形を呈する 側面は直線にて配置 厚さは全体的にほぼ均一	表面は複数方向の丁寧なごまぎの後の、裏面にて削離してある 裏面の東面にごまぎを加えておる 裏面はなめらかである 白面は土台および、斜め方向に比較的多く、裏面は少くである 裏面は表面にて削離してある 裏面は裏面にて削離してある	動土 = 6.1m ³ ら いの細砂粒を 含む 色調 = 茶褐色 度成 = ブラック 地盤 = 全面にいぶ し	左前面に墨印あり 右前面に墨印あり
108	平瓦厚	一乗寺 本堂軒下	全長 幅 厚さ	34.7cm 27.7cm 2.8cm	平面形状は背高部が後端部より若干右側が傾いて形を呈する 側面は直線にて配置 厚さは全体的にほぼ均一	表面は複数方向の丁寧なごまぎの後の、裏面にて削離してある 裏面の東面にごまぎを加えておる 裏面はなめらかである 白面は土台および、斜め方向に比較的多く、裏面は少くである 裏面は表面にて削離してある 裏面は裏面にて削離してある	動土 = 6.1m ³ ら いの細砂粒を 含む 色調 = 茶褐色 度成 = ブラック 地盤 = 全面にいぶ し	左前面に刷印あり 右前面に刷印あり
109	平瓦厚	一乗寺	全長 幅 厚さ	34.7cm 28.5cm 2.8cm	平面形状は背高部が後端部より若干右側が傾いて形を呈する 側面は直線にて配置 厚さは全体的にほぼ均一	表面は複数方向の丁寧なごまぎが行われ、裏面はなめらかである 裏面は土台および、斜め方向に比較的多く、裏面は少くである 裏面は表面にて削離してある 裏面は裏面にて削離してある	動土 = 6.1m ³ ら いの細砂粒を 含む 色調 = 茶褐色 度成 = ブラック 地盤 = 全面にいぶ し	右前面に墨印あり
110	軒平瓦	一乗寺 本堂軒下	全長 幅 厚さ (平均)	36.8cm 29.3cm 2.6cm 2.5cm	瓦当部の中心動きは宝珠、 唇部は左右対称となる中心動き から左唇起立おおひ、上巻きの 瓦当部の平面形状は背高部が 後端部(瓦当部)より若干右側 が傾いて形を呈する 側面は直線にて配置	瓦当部(瓦当頭および、裏面) は複数方向の丁寧なごまぎが 行われている 裏面は複数方向の丁寧なごまぎの 後の、裏面にて削離してある 裏面はなめらかである 白面は土台および、斜め方向に 比較的多く、裏面は少くである 裏面は表面にて削離してある 裏面は裏面にて削離してある	動土 = 6.1m ³ ら いの細砂粒を 含む 色調 = 茶褐色 度成 = ブラック 地盤 = 全面にいぶ し	右前面に墨印あり
111	軒平瓦	一乗寺 本堂軒下	全長 幅 厚さ (平均)	35.9cm 28.6cm 2.6cm 2.5cm	瓦当部の中心動きは宝珠、 唇部は左右対称となる中心動き から左唇起立おおひ、上巻きの 瓦当部の平面形状は背高部が 後端部(瓦当部)より若干右側 が傾いて形を呈する 側面は直線にて配置	瓦当部(瓦当頭および、裏面) は複数方向の丁寧なごまぎが 行われている 裏面は複数方向の丁寧なごまぎの 後の、裏面にて削離してある 裏面はなめらかである 白面は土台および、斜め方向に 比較的多く、裏面は少くである 裏面は表面にて削離してある 裏面は裏面にて削離してある	動土 = 6.1m ³ ら いの細砂粒を 含む 色調 = 茶褐色 度成 = ブラック 地盤 = 全面にいぶ し	瓦当部 = 平瓦の接着は、瓦当部に複数箇所で落成され、落成部 に割り込み落成を設けている



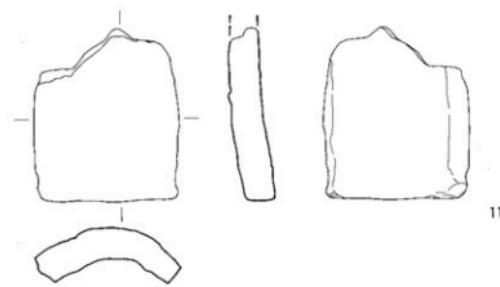
第17図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (1)



第18図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (2)



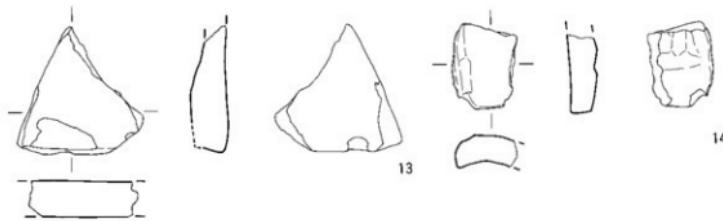
10



11



12

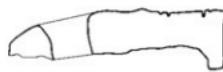
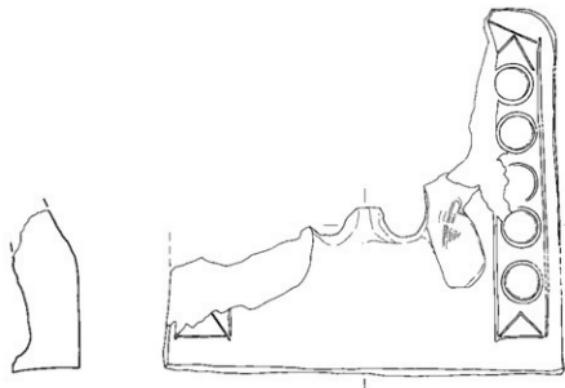


13

14



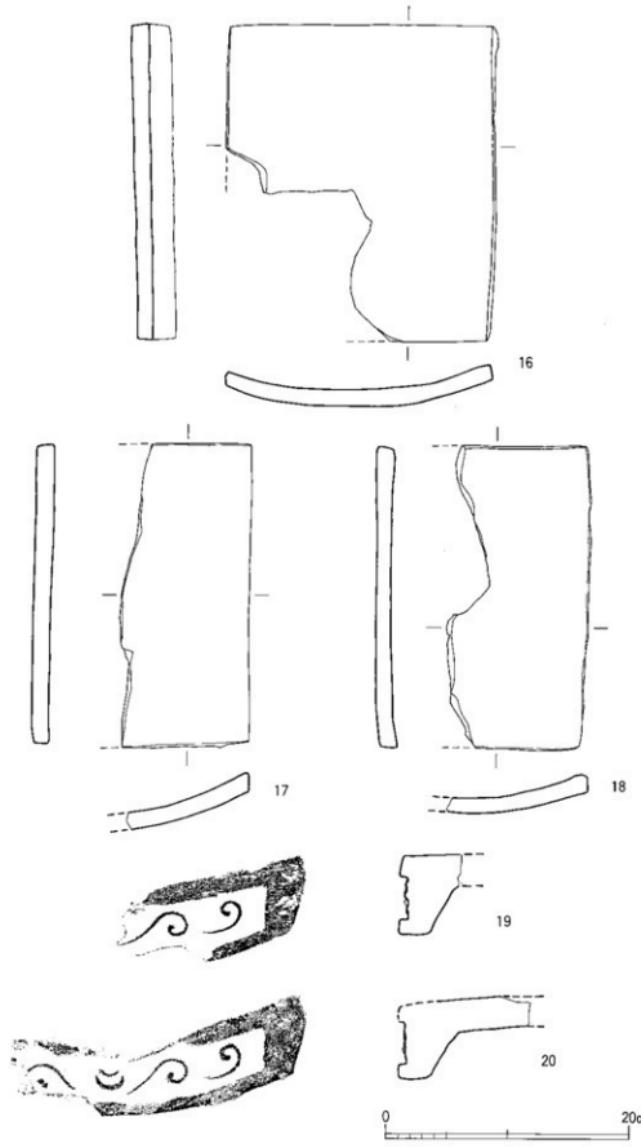
第19図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (3)



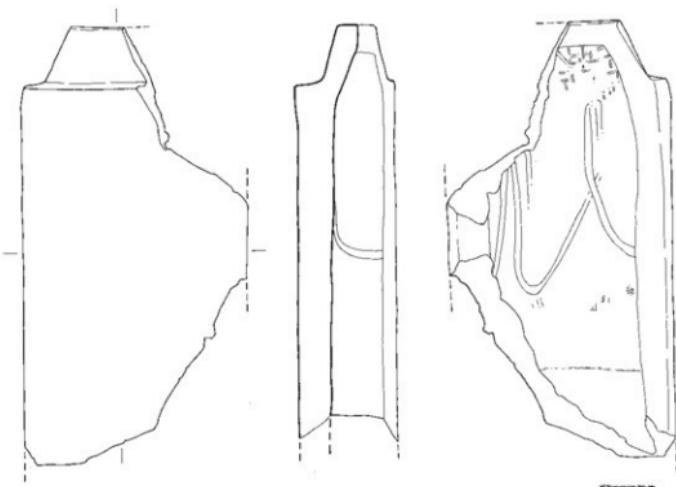
15



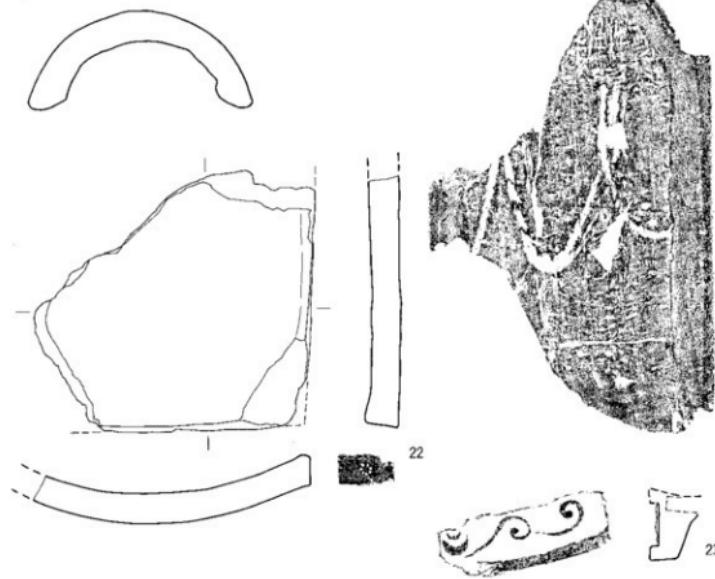
第20図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (4)



第21図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (5)



21



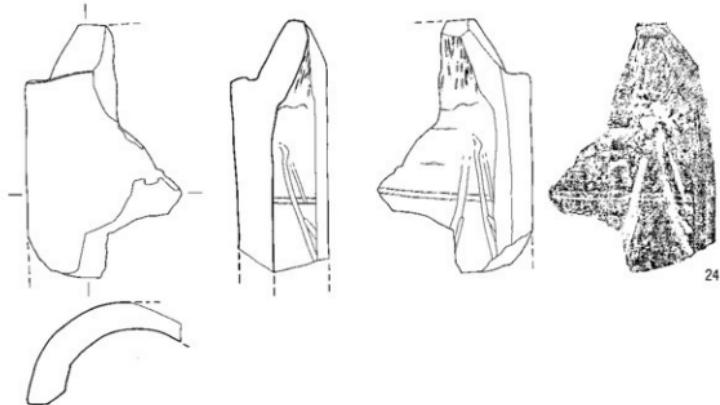
22



23



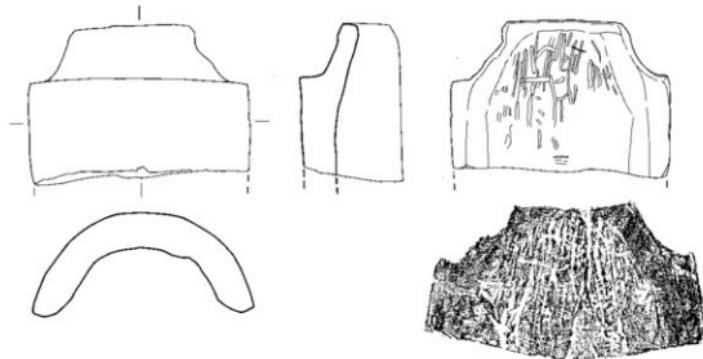
第22図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (6)



24



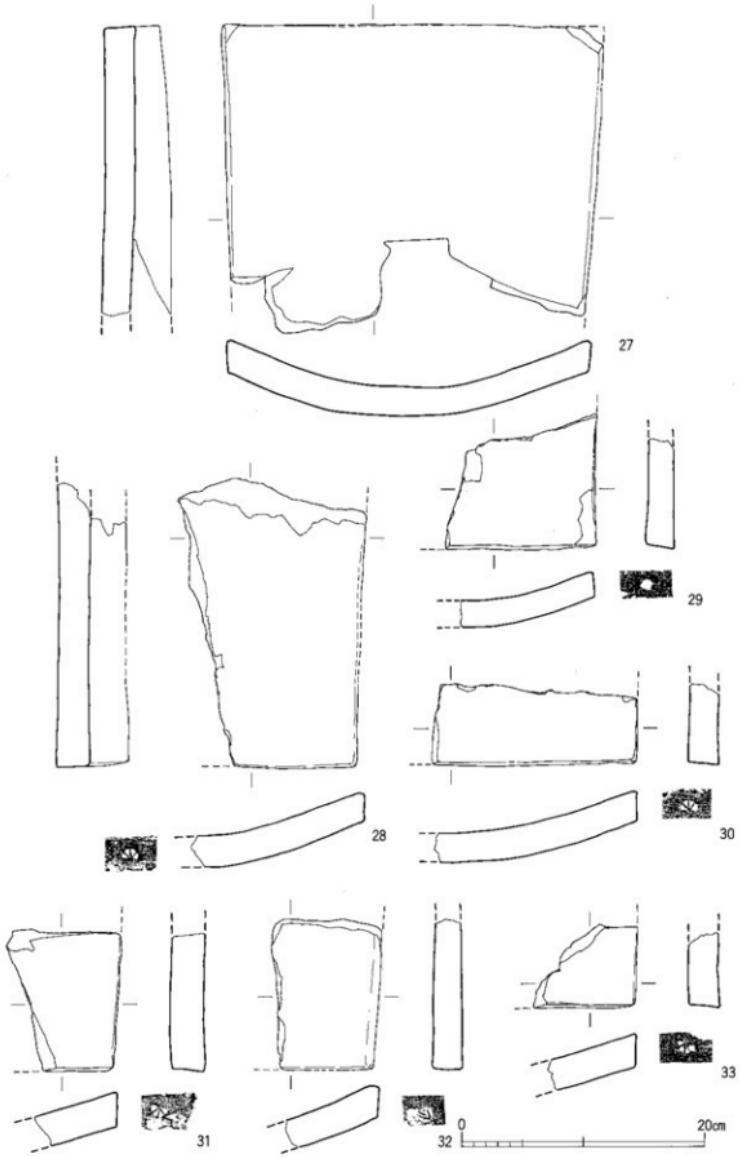
25



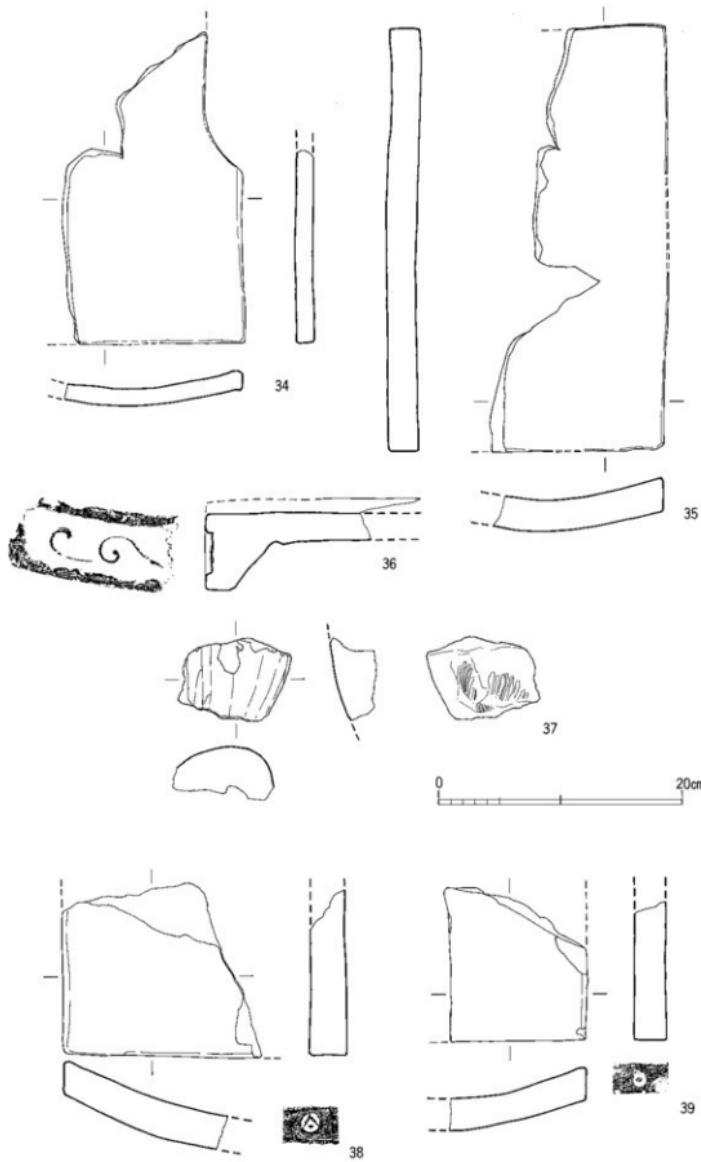
26



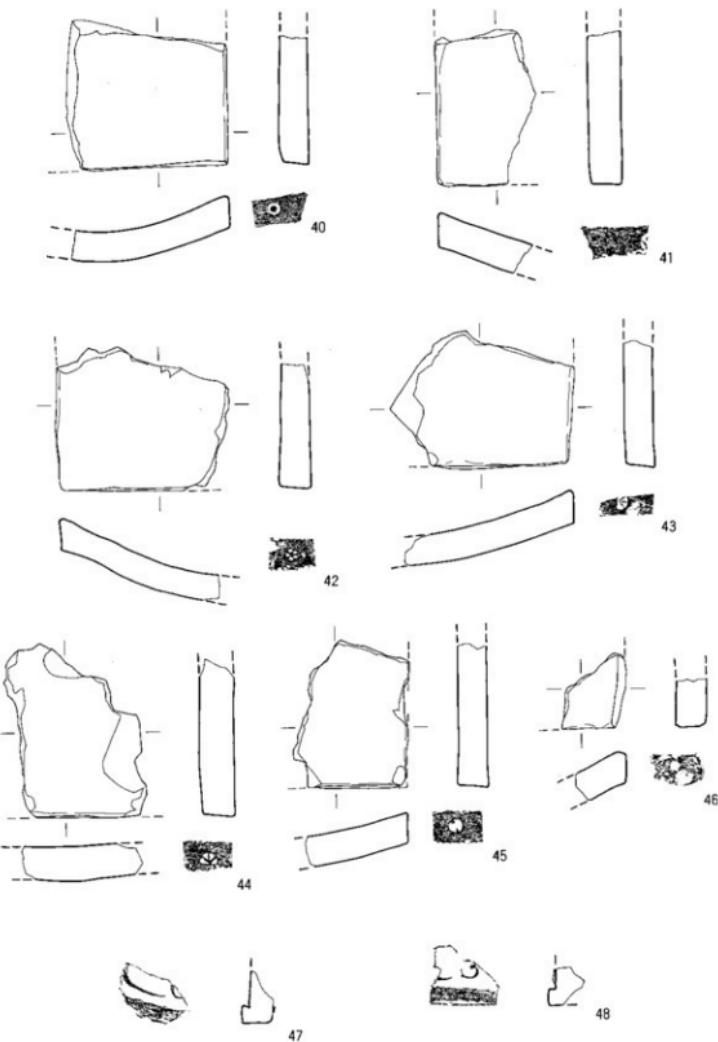
第23図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (7)



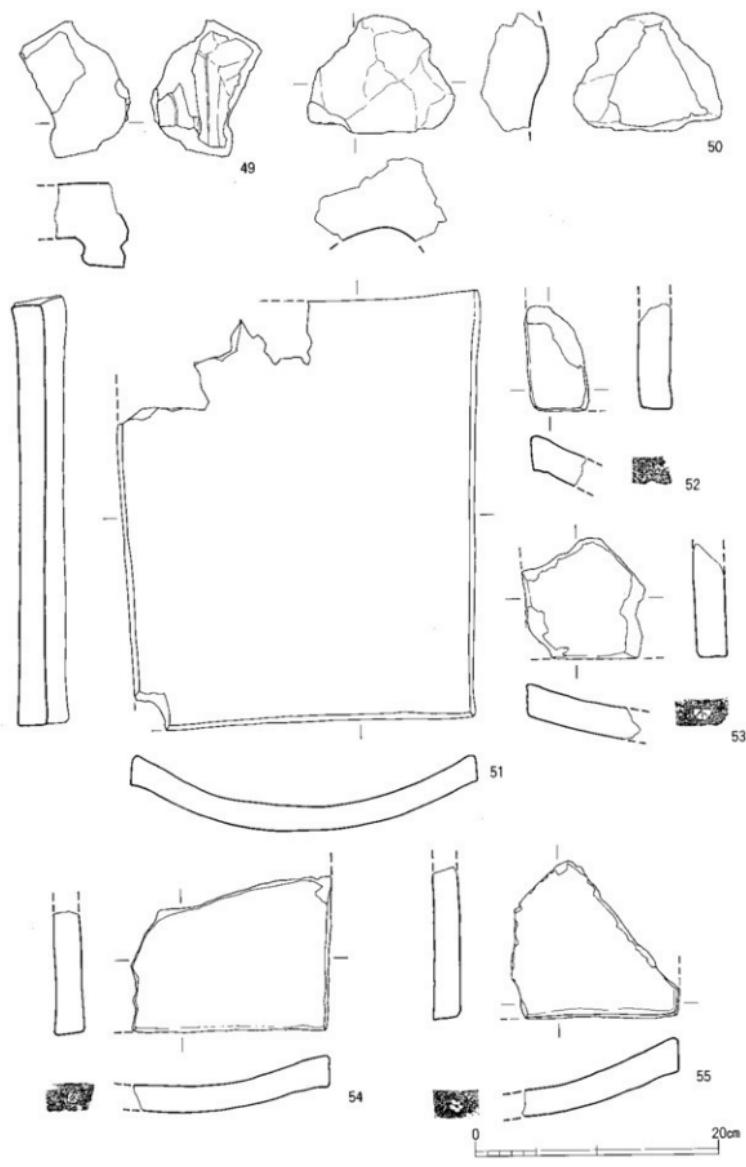
第24図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (8)



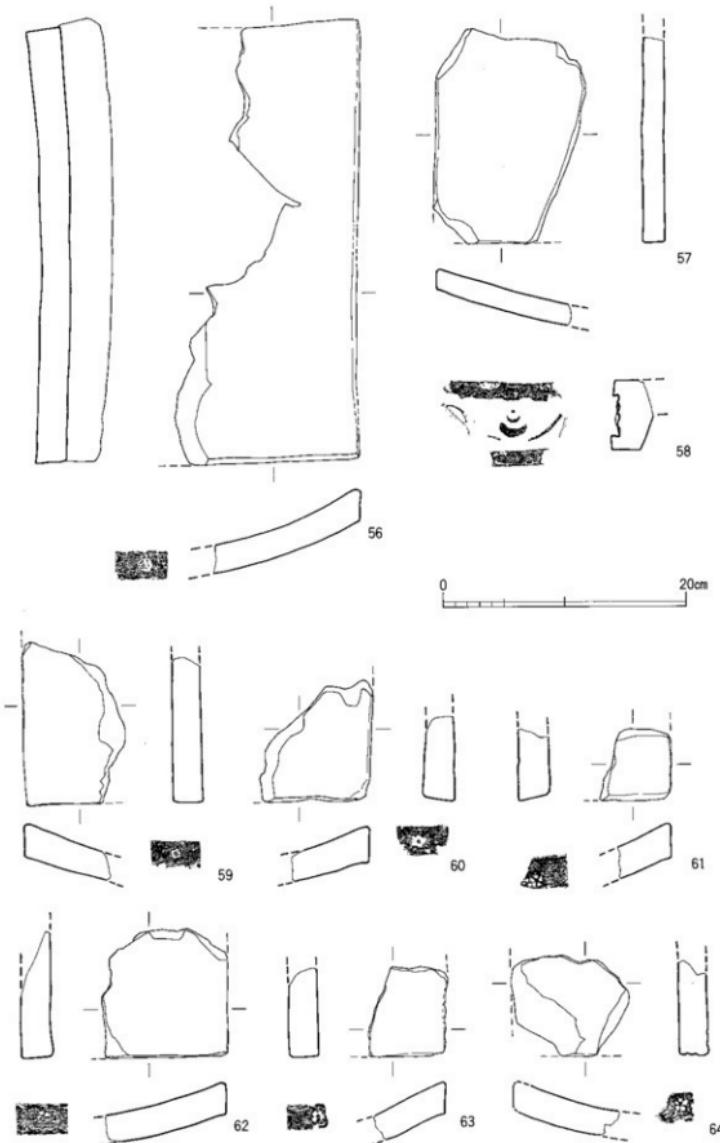
第25図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (9)



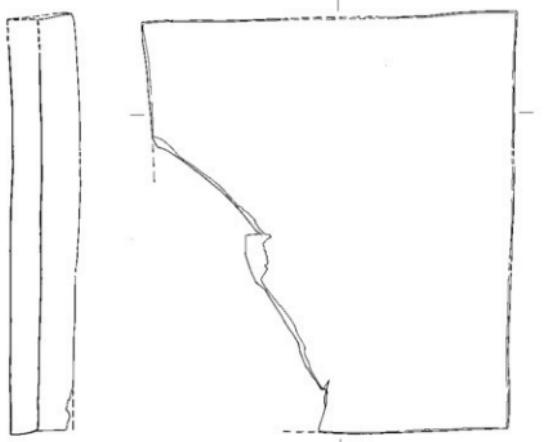
第26図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (10)



第27図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (1)



第28図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (12)



65



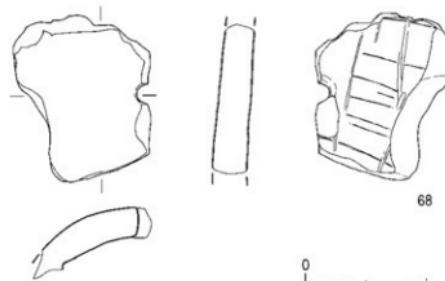
66



67



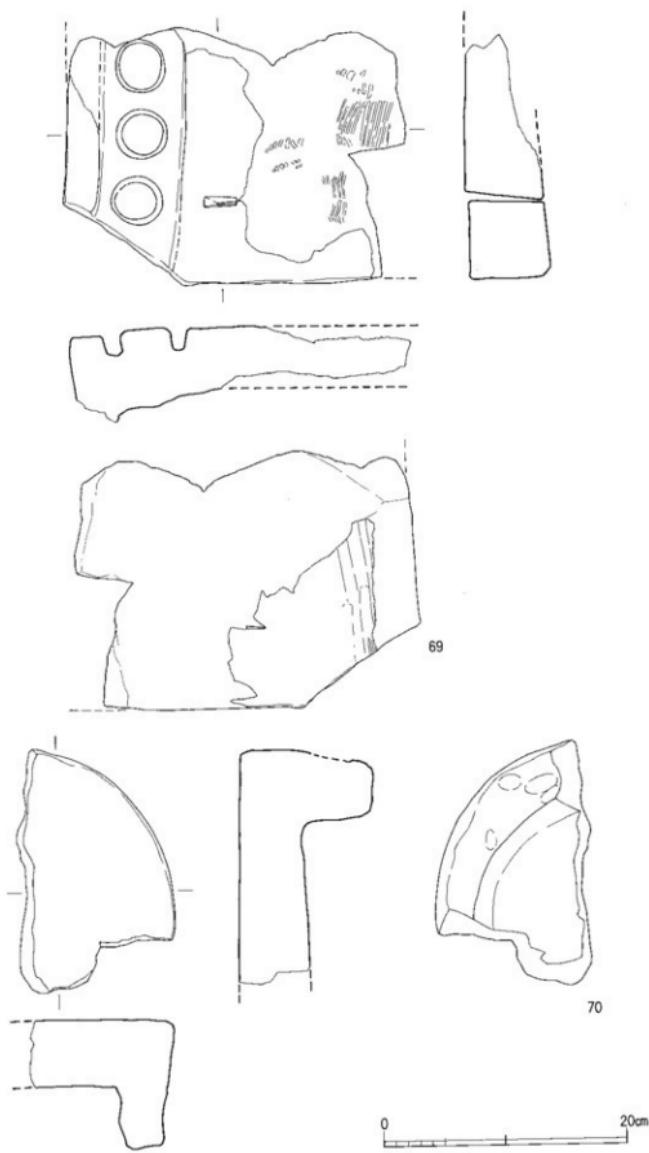
68



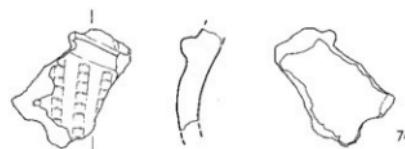
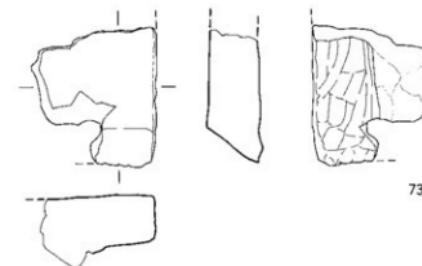
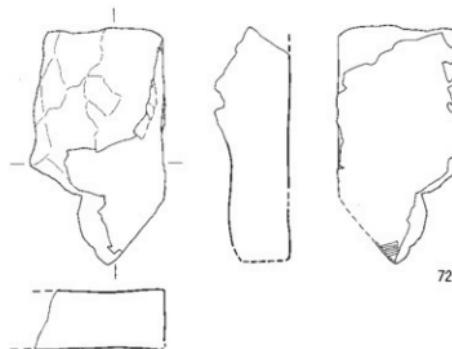
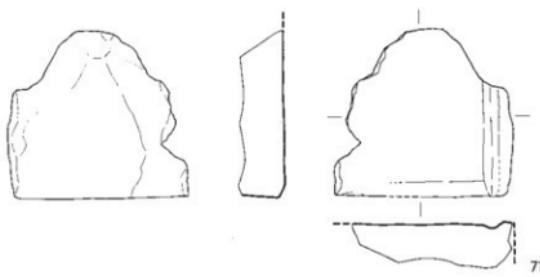
20cm

0

第29図 大金瓦窯跡出土瓦実測図 (13)



第30図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (14)



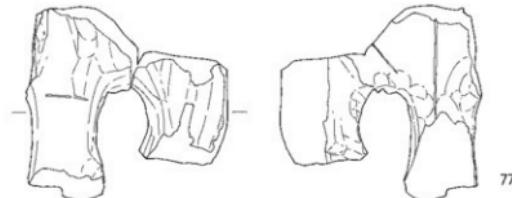
第31図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (15)



75



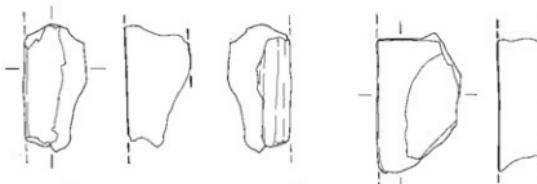
76



77



78



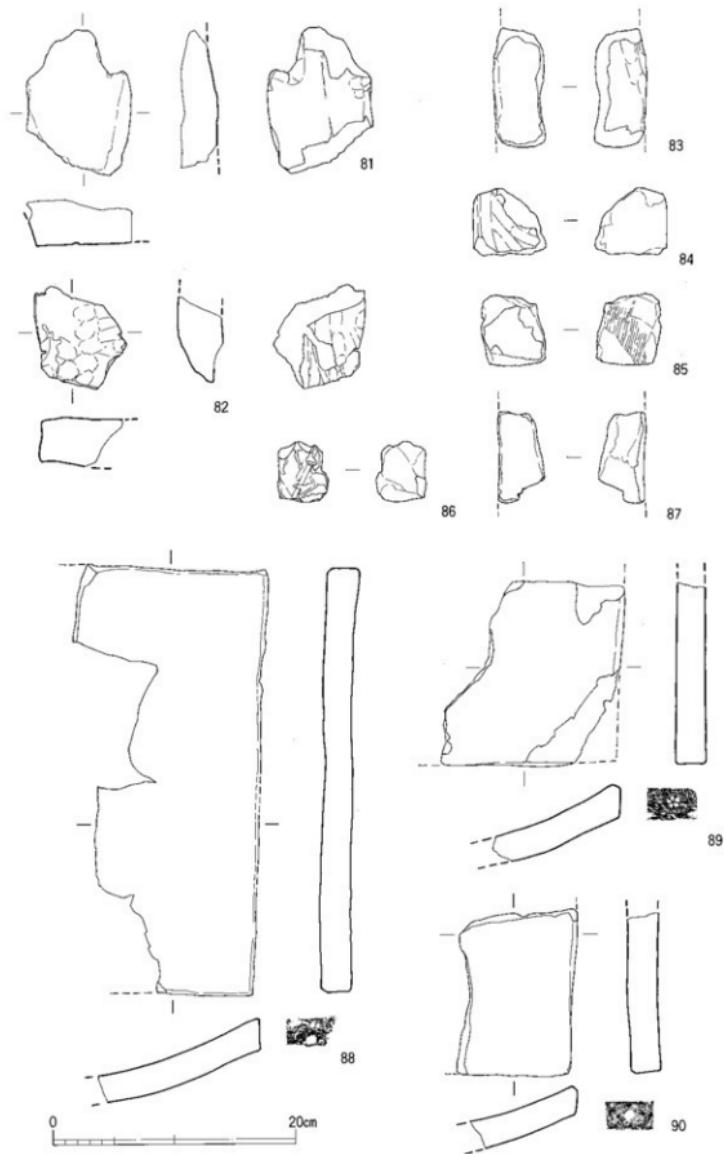
79



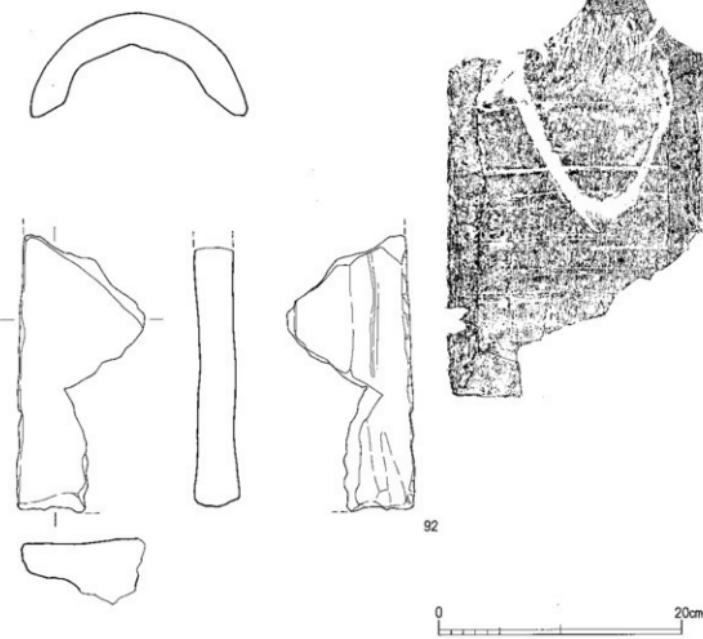
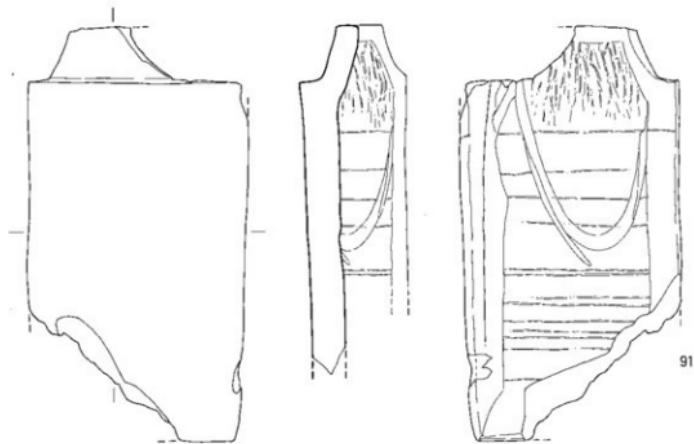
80



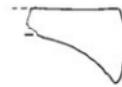
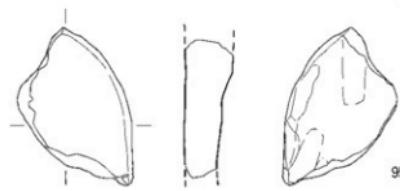
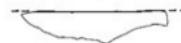
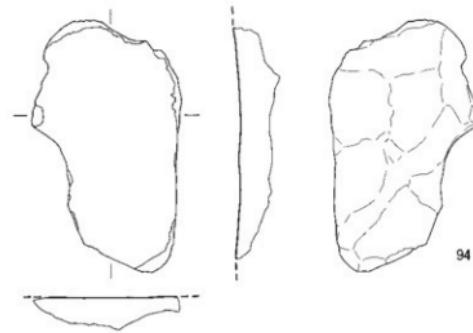
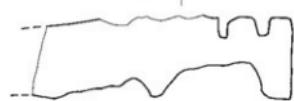
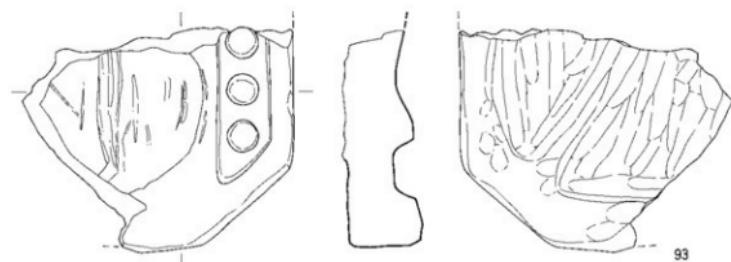
第32図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (16)



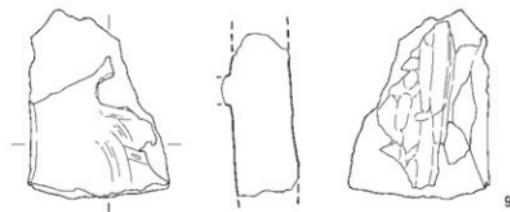
第33図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (17)



第34図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (18)



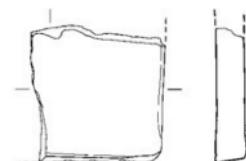
第35図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (9)



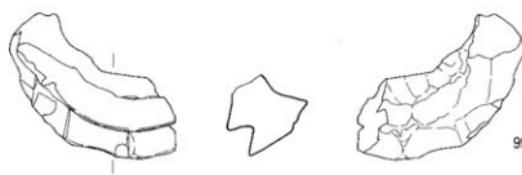
96



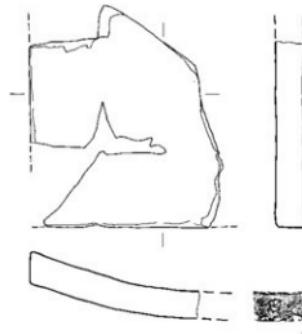
97



98

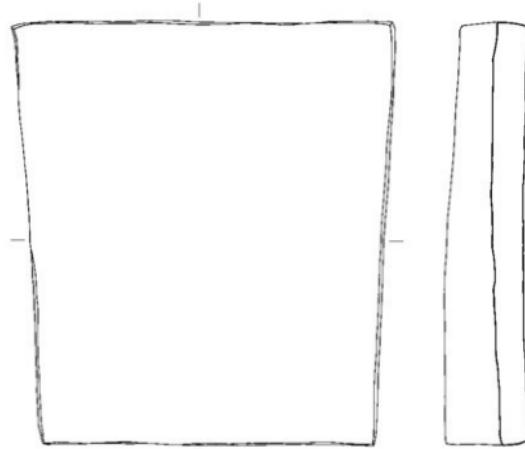


99

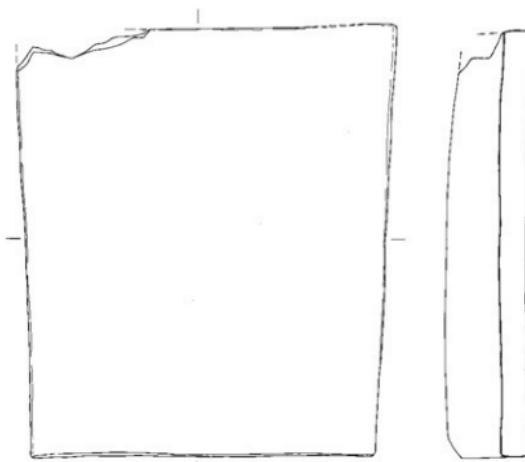


100

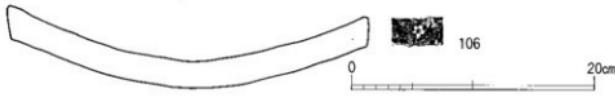
第36図 大釜瓦窯跡出土瓦実測図 (2)



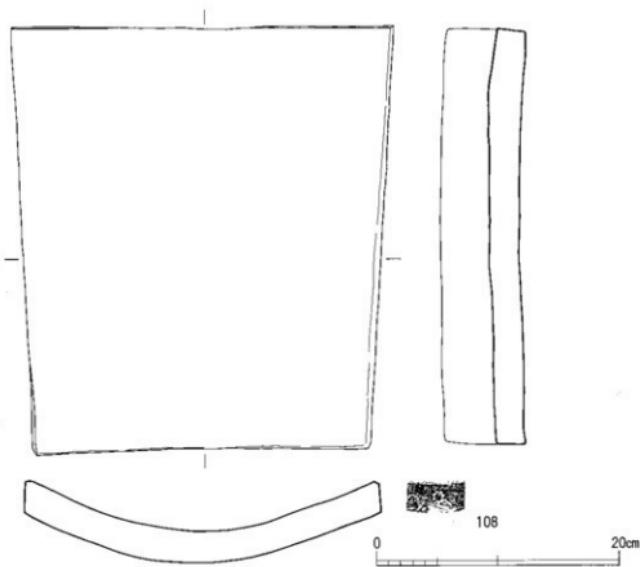
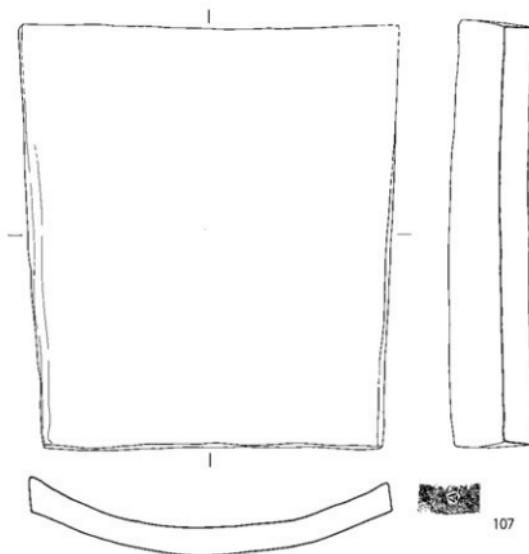
105



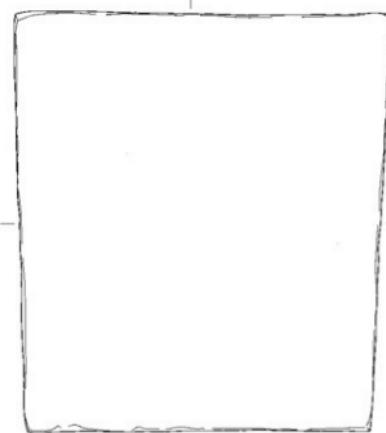
106



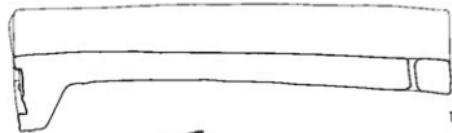
第37図 一乗寺参考資料瓦実測図 (1)



第38図 一乗寺参考資料瓦案測図 (2)



109



110



111



第39図 一乗寺参考資料瓦実測図 (3)

一寃永五年建立記

原以雙腳法邁出西寧芳蹤，赴東瀛列城，至歸國兩日，人至三十七代，考證天皇白雉元年六月。

法花山一乘寺記

第40図 文献 一乗寺に関する古文書

第4章 まとめ

今回、調査を実施した大釜瓦窯跡では、「ダルマ窯」と呼ばれる形態の瓦窯跡が4基検出された。そのうち、1号・2号瓦窯跡は、地下部分がほぼ完存する状態で確認されており、発掘調査例の少ないダルマ窯の実態を知る上で貴重な調査であった。また、後に詳しく述べるが、瓦窯の操業時期が江戸時代初期であることや、瓦の供給先が法華山一乗寺であることなど大きな成果がえられた。以下に、大釜瓦窯跡より検出されたダルマ窯についての補足説明および、その他の遺跡より発掘されたダルマ窯の調査成果などを「中近世瓦窯—ダルマ窯—の調査について」として、また、大釜瓦窯跡出土瓦に加え、広く播磨地域より確認されている軒平瓦からみた大釜瓦窯跡の瓦製作集団の追跡や、大釜瓦窯跡出土の刻印瓦などを「大釜瓦窯跡出土瓦について」として、若干の考察を行い、大釜瓦窯跡発掘調査のまとめとしたい。

中近世瓦窯—ダルマ窯—の調査について

大釜瓦窯跡ダルマ窯の補足説明

大釜瓦窯跡より検出された4基のダルマ窯については、検出状況あるいは、計測値などはすでに記述している（第3章 第1節）ため、ここでは地上部分の復元を窯詰め状況などから考え、今後のダルマ窯調査における一資料とし、あわせてダルマ窯におけるいぶし瓦の焼成過程についても言及したい。

ダルマ窯における1回の窯詰め時の瓦の枚数は、瓦窯（焼成室）の大きさによって焼成枚数の多少があり、数値は不均一であるが、許容枚数以上や以下であれば、熱効率や採算など生産上、非効率的と考えられる。大釜瓦窯跡より検出されたダルマ窯の焼成室の寸法は、長さ約0.9m、幅約2.0mであり、大釜瓦窯跡出土の平瓦では約60枚が、丸瓦では約90枚が並べられることになる¹⁰。これらを4段に積み重ね窯詰めすることにより¹¹、大釜瓦窯跡ダルマ窯の1回の焼成枚数が導き出される。また、2号瓦窯跡における窯壁の厚さが0.48mであることから、大釜瓦窯跡ダルマ窯の焼成室は、焼成室内寸の高さ（瓦の全長×4段）とをあわせ、高さ約2.1m（焼成室内寸約1.6m+窯壁約0.5m）を計測するものと推定される。燃焼室の高さについては、現存しているダルマ窯の焼成室と燃焼室の高さの比率から考えると約1.2mを測るものと考えられる（第41図¹²）。

以上のことから、大釜瓦窯跡ダルマ窯について、地上部分の復元数値は焼成室の高さ約2.1m（内寸の高さ約1.6m）、燃焼室の高さ約1.2m（内寸の高さ約0.7m）を測り、1回の窯詰め時の瓦（平瓦および、丸瓦）の焼成枚数はおよそ200枚から350枚程度と考えられる¹³。

一乗寺本堂に葺かれている瓦の使用枚数は、平瓦約3000枚、丸瓦約1500枚、軒平瓦および、軒丸瓦約500枚、その他の瓦約500枚のおよそ5500枚を数えるものである¹⁴。これらの数値は、創建時におけるすべての瓦の使用推定枚数であるが、寛永5年（1628）の一乗寺の本堂再建時において上記の数値枚数を大釜瓦窯跡で焼成したか否かは不明であるといわざるをえない。それは、大釜瓦窯跡以外にも瓦を焼成した窯跡が存在したことを考えすべきことや、本堂が消失した時の破損あるいは、2次焼成を免れた瓦を再度葺いている可能性などが考えられるからである。また、現在の本堂の軒平瓦の文様を観察すると、大釜瓦窯跡より出土した軒平瓦と同一文様である本堂再建時の瓦が存在する反面、異なる文様も多数含まれており、部分的な瓦の葺き替えは頻繁に行われていることは明らかである。このため、大釜瓦窯跡焼成瓦が現在、何パーセント程度葺かれているか、さらにはそれ以前の瓦が葺かれているかはより以上

に不明といわざるをえない状況である。しかし、ここでは、木材、石材、瓦などを新たに調達し、本堂を再建したとする『寛永五年建立記』の寛永五年建立事あるいは、『播磨鑑』の法花山一乗寺記（第40図 文献）を根拠として、すべての瓦が大釜瓦窯跡において焼成されたと仮定し、その焼成状況を考えてみたい。それによると、上記の数値より、4基の瓦窯が検出された大釜瓦窯跡では、最低5回、瓦捨て場などの破損した瓦の量から考えるとそれ以上の6回から7回の、のべ25回前後の焼成により瓦を完成したものと推定される¹⁶。

統いてダルマ窯におけるいぶし瓦の焼成は、以下の工程で行われる¹⁷。①粘土によって最高温度を決め、階段状に徐々に温度を上げていく。市川水系に含まれる姫路の粘土では、最高温度は約1200℃といわれ、収縮率は約1割である。②最高温度を2～3日間保ち続けた（業界では「ハラス」という）のち、自然に温度を950℃～980℃まで下げていく。ここまで工程で瓦は還元焰焼成となっており、これより、いぶしの工程に入る。③半密閉状態の瓦窯内に、黒松の「フシ」を3分位の短時間に燃焼室いっぱいに放り込み、焚口および、煙出し部などを完全に密閉する。この時、焚口部に入れる「フシ」は、湿ったものや水を意図的にかけた完全燃焼がしにくいものであり、所要時間も迅速を要する。④瓦窯内は、「フシ」によって水蒸気や熱が充満しており、瓦にカーボンが付着し、いぶし瓦が完成する。瓦窯内の密閉が不完全であれば、灰白色を呈し、灰色の良質ないぶし瓦はできない。以上の工程は、燃料に影響されるといわれるが、およそ4～5日間の焼成日数を必要とするものである。



三州瓦 高橋榮、秋人瓦窯



藤岡瓦(有)共和建材瓦
第41図 現存ダルマ窯／全景・焚口部

各地で発掘されたダルマ窯について

大釜瓦窯跡より検出された形態のいわゆる「ダルマ窯」の発掘調査は、全国で確認できたものは、19遺跡42基である（第13表）。分布状況は、近畿地域がおよそ8割を占めており、その他の地域では少数であるが、北は秋田県から南は熊本県までほぼ全国的に広がっている。また、上記のように考古学的な調査が行われたもの他に、民俗学的な資料として瓦職の実態や、ダルマ窯の測量調査を報告した資料もみられる⁶。民俗学的な資料の中には、近世末から近代の瓦産地の窯業遺構となっているものや、現代の瓦産地で廃窯あるいは、現存しているものが含まれている。

発掘調査されたダルマ窯のうち、出土瓦などから瓦の供給先が判明しているものは、寺内焼窯跡（秋田県）、龍泉寺宮東遺跡（大阪府）、根来寺坊院跡、小峯寺瓦窯跡（以上、和歌山県）、浜津旧清遺跡、如意寺跡遺跡、大釜瓦窯跡（以上、兵庫県）、平山瓦窯跡（熊本県）の8遺跡である。これらは中世寺院と近世城郭に大別されるが、発掘された瓦窯跡の操業時期や基数および、瓦窯の大きさなどから創建時あるいは、築城時の瓦を焼成したとは考えられず、寺域内や近辺に瓦窯を構築し、補修瓦を主として焼成したものといえる。このうち、浜津旧清遺跡より検出されたダルマ窯は、出土した軒平瓦の文様から操業は桃山時代初期とされており、最古のダルマ窯として位置付けられる。また、平山瓦窯跡では出土した軒先瓦の文様や熱残留磁気測定法などにより、慶長6年（1601）から寛永9年（1632）までの期間に操業し、八代城に供給されたことが報告されており、さらに遺跡の現地保存が進められている。この他、寺内焼窯跡ではダルマ窯の他に陶器窯や煉瓦窯が発掘されており、瓦窯の操業は明治13年（1880）を下限とし、文政年間（1818～1829）以降とされている。しかし、総じてダルマ窯の調査については、計測値を除いては詳細な調査報告が行われておらず、また、近世以降ダルマ窯による瓦生産がほぼ全国的に行われていたにも関わらず発掘例が少ない状況である。これは、ダルマ窯が瓦窯跡として調査されるよりもむしろ寺域内あるいは、集落跡などの調査中に発見されることが多いことや、出土する瓦の量が少なく操業時期や供給先を特定できないことなどによるものと考えられる。さらに、一部に現存、操業しているダルマ窯が存在していることも考古学的遺跡として発掘調査の対象となりにくい状況のひとつといえる。このように発掘例が少なく、限られた調査成果の中で、ダルマ窯の発生について、「達磨窯の発明者は畿内の天台、あるいは真言に所属する造瓦集団とする見方が自然で、或いはこれに南都の造瓦集団を加えなければならないかもしれない。数少ない発掘資料による限り、桃山～江戸初期の達磨窯は京から大阪・兵庫へと山岳に展開する天台寺院を周回する造瓦集団や、伝統的な焼瓦を製造しつつ、各地を躍る南都系の造瓦集団の動きのなかにみえてくる」との所見⁷が述べられているのは興味深いことである。

今後、ダルマ窯の調査の課題としては、①今まで発掘されたダルマ窯の調査成果を再考し、用語の統一などを含め調査を確立すること、②調査者によって検出された遺構と出土した遺物からより多くの成果が報告されること、③中世寺院および、織豊期から近世城郭の発掘が行われ、出土した瓦の研究が活発になっている現在、瓦窯跡についての認識を高めること、④全国各地で廃窯となっているダルマ窯を民俗学的あるいは、考古学的に調査を実施し資料の収集を行うこと、などが挙げられる。また、ダルマ窯と並行して古代からの形態をとどめた登り窯や平窯によても瓦は生産されている⁸が、それらの窯体構造の違いは先に述べた造瓦集団の動きと関連しているのかということも今後の課題として残されるものである。

第13表 中近世瓦窯—ダルマ窯—調査一覧表

遺跡名	所在地	計測値(m)／全長×幅	備考
寺内焼窯跡	秋田県秋田市寺内	2号 5.30×1.50 4号 5.30×1.90 5号 (4.20)×2.10 6号 (4.30)×1.90	4基検出 この他に陶器窯1基、煉瓦窯1基検出 計測値は内寸法 秋田城へ供給
多摩湖第12遺跡	東京都東大和市	4.40×1.80	
茱山崎遺跡	福井県坂井郡金津町	5.50×2.00	計測値は内寸法
富田遺跡	大阪府高槻市富田町	4.80×2.60	
嶋上郡衙跡	大阪府高槻市郡家新町	1号 5.65×2.55 2号 (5.50)×2.60	2基検出
郡家今城遺跡	大阪府高槻市水室町	Ⅲ号 (3.70)×2.20 V号 5.60×3.50 VII号 (4.40)×2.20 VI号 5.50×2.50 平窯 (4.80)×1.90	12基検出
龍泉寺宮東遺跡	大阪府富田林市竜泉寺	(4.00)×1.90	
三日市遺跡	大阪府河内長野市三日市	SY 6 (2.10)×1.80 SY 7 4.85×2.25	2基検出
堺環壕都市遺跡	大阪府堺市車之町	(1.50)×2.00	
西笹鉢遺跡	奈良県奈良市西笹鉢町	SX24 4.80×2.50	2基検出
根来寺坊院跡	和歌山县那賀郡岩手町	(3.00)×1.80	復元全長5.00m 根来寺へ供給
小峯寺瓦釜跡	和歌山县橋本市境原	(3.30)×2.00	小峯寺へ供給
揖津旧清遺跡	兵庫県宝塚市切畑	3.14×1.16	旧清澄寺へ供給
南台遺跡C遺跡	兵庫県三田市末吉字南台	5.10×2.50	
如意寺跡遺跡	兵庫県神戸市西区櫛谷町	(3.70)×1.80	復元全長5.00m 如意寺へ供給
芝崎遺跡	兵庫県神戸市西区平野町	4.60×2.40	2基検出 焼成前に破棄
堀原遺跡	兵庫県水上郡市島町	4.50×1.50	計測値は内寸法
大釜瓦窯跡	兵庫県姫路市飾東町	1号 4.30×2.60 2号 4.20×2.70 3号 4.40×(1.40)	4基検出 3号瓦窯復元幅2.80m —乗寺へ供給（本堂再建瓦）
平山瓦窯跡	熊本県八代市平山町	1号 (3.20)×1.25 2号 4.45×1.47 3号 3.70×1.46	3基検出 1号瓦窯復元全長3.80m 八代城へ供給

（ ）の数値は残存長

大釜瓦窯跡出土瓦について

大釜瓦窯跡より出土した瓦については、すでに記述している（第3章 第2節）ため、ここでは以下の2点、大釜瓦窯跡出土瓦と一乗寺本堂の再建瓦一播磨地域より確認されている軒平瓦からみた大釜瓦窯跡の瓦製作集団一、大釜瓦窯跡出土の刻印瓦、について考察をすすめていきたい。しかし、大釜瓦窯跡では軒丸瓦が出土していないため、一乗寺との関係を理解し、瓦製作集団を特徴付ける資料は軒平瓦によるところが大きく、補助的に刻印瓦と鬼瓦を取り扱うものである。

大釜瓦窯跡出土瓦と一乗寺本堂の再建瓦

一播磨地域より確認されている軒平瓦からみた大釜瓦窯跡の瓦製作集団一

大釜瓦窯跡より出土した軒平瓦は、中央に宝珠を飾り、中心から左右に下巻き、上巻きの片側2葉の唐草を配した文様である。この文様と同一の軒平瓦は、現在も一乗寺本堂の屋根瓦として葺かれているのが観察されると同時に、軒下に多数保存されている。また、平瓦前面にみられる刻印は、大釜瓦窯跡では9種類が出土しており、一乗寺本堂軒下にはそれらと同じ刻印をもつ平瓦が、軒平瓦と同様に保存されている。このため、それらの瓦の文様に加え、古くから地元に伝わる伝承や、『寛永五年建立記』『寛永五年建立事』および、『播磨鑑』『法花山一乗寺記』（ともに第40回 文獻）などの古文書にみられる記載とをあわせ、大釜瓦窯跡が法華山一乗寺の本堂再建瓦を焼成した瓦窯であることはほぼ間違いないものと考えられる。そして、大釜瓦窯跡の操業時期は、上記の文献をみると、元和3年（1617）の本堂焼失から、寛永5年（1628）の再建に至る12年間に限定されるといえる。さらに『寛永五年建立記』『寛永五年建立事』には、瓦についての記載は見あたらないが、本堂再建の諸材は寛永5年（1628）初夏に寺裏に運び込まれ、時を移さず6月18日には柱立、7月11日には檼上、9月26日には奉徳本尊が行われたことが記載されている。瓦もこの寛永5年（1628）の夏に、他の諸材と同様に運び込まれていたと考えられるため、瓦窯の場所の選定および、瓦の焼成期間あるいは、運搬などを考慮しても寛永年間（1624～）、さらに時期を絞り込むならば、寛永5年（1628）頃に瓦窯が操業された可能性が最も高いと考えられる。しかし、大釜瓦窯跡出土の瓦からは、製作年、製作者名などの銘は確認されていないため、瓦窯の操業（瓦の製作）時期および、瓦製作集団を結論付けるには慎重にならざるをえない状況である。そこで、大釜瓦窯跡出土の軒平瓦と一乗寺を含む播磨地域より確認されている14世紀以降の軒平瓦を比較検討し、それぞれについて出来うるかぎりの追跡調査を行ってみたい。

まず、大釜瓦窯跡の瓦製作集団については、軒平瓦の文様から「橋朝臣」を名乗る瓦工集団¹⁰によって製作されたものと推定できる。その理由として、橋氏が瓦銘を残した寺社には、共通して大釜瓦窯跡で出土した文様と同じ中央の宝珠飾りが確認されていることがあげられる。それらは、橋氏の二代目吉重以降に好んで使われた文様であり¹¹、法隆寺に数多く残されている。播磨国内では一乗寺を始め、円教寺（姫路市）、斑鳩寺（揖保郡太子町）、朝光寺（加東郡社町）、東光寺（美義郡吉川町）などで確認されており、大和国から播磨国にかけての彼らの行動範囲の広さが窺える。しかし、中心から広がる唐草文様については、大釜瓦窯跡より出土したものが片側2葉に対して、上記の資料のものは片側3葉であり、同じ系譜を引くものと考えられるが若干の違いが指摘される。後者の片側3葉の唐草を配した文様の軒平瓦については、天文15年（1546）年から同24年（1555）にかけての製作年代が考えられており¹²、大釜瓦窯跡より出土した片側2葉の唐草文様は、天正11年（1583）以降に播磨以外の瓦工集団によって始められたものとされている¹³。また、大釜瓦窯跡より出土した鬼瓦については、「形状や製作技法において室町時代を思わせる作風であり「橋朝臣」を名乗る瓦工集団が製作した可能性が考えられる」との

指摘をうけている¹⁴。

以上のことから、大釜瓦窯跡において瓦製作に携わった集団は、「橘朝臣」を名乗る瓦工集団であった可能性が高いと考えられる。しかし、大釜瓦窯跡が操業した江戸時代初期において「橘朝臣」を名乗る瓦工集団については、これまでに播磨国はもとよりその他の地域においてもその存在は確認されていない状況である。16世紀中頃以降「橘朝臣」を名乗る瓦工集団の活動を追ってみると、国次の時代¹⁵に「大和国西之京住人」を名乗り大和の寺社を中心に瓦を製作していたのが、播磨国「三木住人」と名乗り播磨の寺社および、中世城郭にその活動の拠点を移行していることが瓦銘より認められる。そして「三木住人」を名乗るようになった橘氏は、三木城主別所氏の滅亡¹⁶とともに深く関係するが、天正3年（1575）の瓦銘を最後に播磨および、その他の地域でもその痕跡は認められず存在が消えてしまったといわれていた。一方、天正・慶長年間（1573～1614）には、大釜瓦窯跡から遠くない姫路の英賀を本拠とする「藤原朝臣」を名乗る瓦工集団が隆盛を極めており、播磨を中心に広く各地に瓦銘が残されている。付載で記述しているが、一乗寺奥の院の南隅隅鬼瓦には、この「藤原朝臣」の銘と寛文7年（1667）の紀年銘が確認されており、大釜瓦窯跡の年代より約40年時代は下るが「三木住人」橘氏の姿はみられない。

今回の大釜瓦窯跡の発掘調査により、これまでにその存在が途絶していた「橘朝臣」を名乗る瓦工集団あるいは、橘氏の文様系譜を受け継いだ瓦工集団が、江戸時代初期に大釜の地で瓦を生産していたという大きな成果をえられた。また、大釜瓦窯跡より出土した瓦については、以前に胎土分析を行っており¹⁷、その分析データについては詳細に報告されている。このため、今後一乗寺本堂の瓦の葺き替え時に、大釜瓦窯産と思われる瓦の胎土分析を試みれば、化学的に大釜瓦窯跡と一乗寺本堂の再建瓦の需給関係が証明されることになるかもしれません、そのような機会があることが望まれる。

大釜瓦窯跡出土の刻印瓦

大釜瓦窯跡より出土した刻印瓦については、出土位置および、刻印位置について記述し（第3章 第2節）、その出土状況から窯詰め時における大量の瓦の管理方法を推定するとともに、刻印の文様が一乗寺本堂の軒下に保存してあるものと同一であることから、大釜瓦窯跡が一乗寺の本堂再建瓦を焼成した瓦窯であると考える補助的な資料とした。

これまで刻印瓦については、安土城、大坂城、松坂城などの城郭遺構からわずかに出土例が報告されている他、法隆寺や東大寺を始めとする南都寺院の瓦に確認されているに過ぎない。このうち、安土城出土の刻印瓦¹⁸は、丸瓦の凸面や玉縁部分の縁辺に、平瓦の端辺の小口面に刻印が認められ、「菊花」形、「丸に十字」形、「四菱」形、「丸」形、「折」形、「ふたつ折」形、「輪違い」形、「三日月」形、「格子」形などの種類が確認されている。それらの刻印のうち、大釜瓦窯跡より出土したものと同一文様と思われるものは、「丸」形のみである。安土城の瓦製作に携わったのは、『信長公記』にみられる奈良衆と考えられているが、安土城出土の刻印瓦と南都寺院の刻印瓦の文様の同一状況から、南都寺院の瓦を製作していた橘氏もこれに関わったとする根拠となっている。また刻印瓦は、瓦工集団の移動を説明する物的証拠とされ、窯元を示すものとも考えられている。この他、福井県の明治から大正、昭和の終戦直後にかけての瓦の刻印の例¹⁹では、「刻印を打つ目的は製造した製瓦所を示すとともに、その製瓦所に所属する各職人にそれぞれ特定の場所（約3mずつ横へ移動させる）へ刻印を打たせることによって、焼成後瓦の検査をした場合、どの職人の成形した瓦がどのようなものになるかがわかり、品質管理上役立った。このほか成形を終えた瓦を主人が検査し、合格した瓦にだけ刻印を打たせ、その職人の一日の成形

枚数の把握にも役立てた場合もあった。」と記録に残されている。

以上のことから、大釜瓦窯跡では9種類の刻印瓦が出土しているため、「橋朝臣」を名乗る瓦工集団の元、9つの刻印をもつ職人集団によって瓦が生産、管理されていた状況が考えられる。また、今回出土した瓦には少なからず指紋が残されており、その収集および、照合を試みることを考えたが、探査資料が小さかったり不鮮明であることから結果を得ることができなかった。刻印位置の違いには職人集団内の個人の目印的な意味合いが考えられるため、指紋によって個人の特定が行えなかつたことは残念であった。このように、刻印の文様や位置を調べることにより、軒先瓦の文様と同様あるいは、それ以上に瓦工集団の特定や活動状況および、瓦の生産体制などがわかつくるものと考えられる。より多くの資料の発見から、それらを比較検討できることが今後に期待されるものであり、大釜瓦窯跡出土の刻印瓦がそのひとつとして活用されることを望んでいる。

(註)

- (1) 大釜瓦窯跡の焼成室の面積は約1.8m²であり(0.9m×2.0m)、出土した平瓦の1枚が占める面積は約0.03m²(瓦の面積とその隙間とを考慮し、幅約30cm×厚さ約10cm)、丸瓦の1枚が占める面積は約0.02m²(同、幅約20cm×厚さ約10cm)と考えられる。これらの数字を基に計算すると、瓦の並べ方にによって平瓦は54枚から60枚、丸瓦は80枚から90枚が、焼成室内に窯詰めすることができる。
- (2) ダルマ窯の民俗学的な調査成果などから、(平・丸)瓦が4段程度積み重ねられる高さが、ダルマ窯の構築および、瓦の焼成上で最も適切であるといわれている。
- (3) 藤原 学氏より写真を提供して頂いた。
- (4) 註(1)および、註(2)より算出された数字であり、おそらく大釜瓦窯跡ダルマ窯で焼成されていた瓦の枚数に近いものと考えられる。
- (5) 一乗寺本堂の屋根瓦を眺めて数えた枚数であるため、それぞれの数値も総数も正確とはいえない。このため参考資料として、瓦の葺き替えが行われた城郭、寺院の瓦の使用枚数の概略数値を以下にあげておきたい。姫路城45,000枚、熊本城55,000枚、二条城120,000枚、浅草寺75,000枚などである。
- (6) 平瓦と丸瓦を基に計算しており、それらより焼成時に面積を占める軒平瓦や軒丸瓦、鬼瓦などは焼成枚数が少ないとや、出土量がわずかであり失敗品が多くないと考え、特別な計算は行わなかった。
- (7) 小林平一氏よりご教示頂いた。その中で、ダルマ窯において瓦を焼成するには、窯を構築する位置が最も大切ということである。それは、地下水の水位によって瓦質がほぼ決定するためであり、その選定には何ヵ月あるいは、数年もの時間が費やされるからである。
- (8) 藤原 学氏の収集資料に加え、各地の調査報告書から確認したものであるが、すべてを収集しているとはいはず、調査例はより多いものと思われる。
- (9) 宮城県の東北歴史資料館や埼玉県立民俗文化センター、大阪府岬町教育委員会などから、調査報告書として刊行されている(参考文献一覧)。
- (10) 藤原 学「達磨窯の成立」(『網干善教先生古稀記念論文集』 網干善教先生古稀記念論文集刊行会平成10年3月刊行予定)
- (11) 盛岡城の瓦を焼成した川原毛瓦窯(岩手県紫波町)および、高田城の瓦を焼成した堀向瓦窯跡(新潟県上越市)は、ともに登り窯であるが、叶堂城跡より発見された瓦窯(兵庫県三原郡西淡町)は城が築かれる以前にこの地にあった感應寺の付属窯と考えられ、窯の形態は平窯である。
- (12) 「橋朝臣」を名乗る瓦工集団は、14世紀末から法隆寺を中心に多くの寺社に瓦を提供しており「大

和系瓦工」と呼ばれる。その初見は、元亨3年（1323）の唐招提寺金堂龕尾に正重が残した銘であり以後国重、初代吉重、二代吉重、初代宗重、時吉、二代宗重、国次、弥六、甚六と続き、16世紀後半まで瓦銘によってその痕跡を認める事ができる。

- (13) 大釜瓦窯跡より出土している軒平瓦の中央の宝珠飾りは、「(前略) 二代吉重以降の橋氏が好んで使ったもので、法隆寺には数多く残る。」

田中幸夫「大和から三木へ来た橋氏と古瓦」『三木史談』第21号 1989 三木郷土史の会

また、橋氏二代目吉重は、嘉吉元年（1441）から長亨2年（1488）の期間の瓦銘が確認されており法隆寺を中心に活躍し、晩年には一乗寺にその名がみられる。

- (14) 田中幸夫「三木城出土瓦について」『織豊城郭』創刊号 1994 織豊期城郭研究会において三木城二ノ郭から出土した中央に宝珠を飾り、中心から片側3葉の唐草を配した軒平瓦の製作年代を、播磨各地で確認されている同文の軒平瓦の銘文や瓦葺き替え記録などから上記の期間を推定されている。

- (15) 「軒平瓦の唐草二葉は中世の播磨にはなかった文様で、秀吉の大坂城築城以後に採用されたものと考えられる。」

田中幸夫「姫路城瓦と姫路系瓦工について」『織豊城郭』創刊号 1994 織豊期城郭研究会

- (16) 黒田慶一氏よりご教示頂いた。氏によれば、大釜瓦窯跡より出土した鬼瓦と同じ頃の作である長福寺（奈良県生駒市）の鬼瓦は、銘文から西ノ京の橋朝臣の流れであることがわかり、とともに室町時代をおもわせる復古調で橋朝臣の後裔が製作した可能性を想定されている。

- (17) 残された瓦銘より、国次は天文3年（1534）から永禄8年（1565）の期間に瓦を製作している。

- (18) 三木城は5代目城主、別所長治が信長に反旗を翻したことにより、約2年間の籠城戦の後、天正8年（1580）に落城した。

- (19) 館東2号墳（姫路市）から出土した須恵器の螢光X線分析の比較資料として、年代が異なるが大釜瓦窯跡より出土した瓦の胎土分析を行っている。

三辻利一・古屋光晴「館東2号墳出土須恵器の産地について」『館東2号墳』 1995 兵庫県教育委員会

- (20) 木戸雅寿「安土城出土の瓦について—その系譜と織豊政権における築城政策の一端—」『織豊城郭』創刊号 1994 織豊期城郭研究会

- (21) 『福井県窯業誌』 1983 福井県窯業誌刊行会

追記

本文校正中に、うその谷窯跡（熊本県八代市）および、堤下瓦窯跡（新潟県神林村）においてダルマ窯の調査が行われていたことがわかった。うその谷窯跡ではダルマ窯の他に、階段状の登り窯が発見されており、ともに出土した瓦より平山瓦窯跡と同様、八代城に瓦を供給していたとされている。また、堤下瓦窯跡ではダルマ窯3基、掘立柱建物跡1棟、粘土探掘坑などが発見されており、江戸時代末期から明治時代初期に操業していたものと考えられている。

【薬師堂・うその谷窯跡】 1996 八代市教育委員会

【桃川遺跡群 現地説明会資料】 1997 神林村教育委員会

付 載

一乗寺奥の院南西隅鬼瓦

大釜瓦窯跡の調査報告書を作成するにあたり、瓦の供給先と考えられる一乗寺より、軒平瓦および、平瓦（刻印瓦）をお借りし、参考資料として掲載しているが（第3章 第2節）、発掘調査中、一乗寺奥の院の南西隅鬼瓦が落下、放置してあるとの知らせを聞き、吹田市立博物館の藤原学氏と共に、平成6年8月29日に写真撮影と概略実測を行ない現地に赴いた。しかし、鬼瓦の側面には、大釜瓦窯跡の操業時期と考えられる元和・寛永年間より、約40年後の「寛文七年」の紀年銘が残されており、その資料の重要性を考え、一乗寺より参考資料とあわせて、お借りしてきたものである。このため、付載として、以下に「一乗寺奥の院の南西隅鬼瓦について」、「瓦銘一□寛文七丁未年三月日藤原朝臣市兵衛久長作之歳十七才ニ□一について」とを記述し、大釜瓦窯跡出土鬼瓦との比較、検討を若干行い、第4章のまとめで考察した一乗寺と大釜瓦窯跡との関連を補足するものである。なお、鬼瓦の実測図については、高谷百世女史の協力を得て作成した。

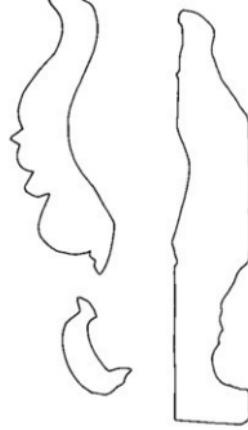
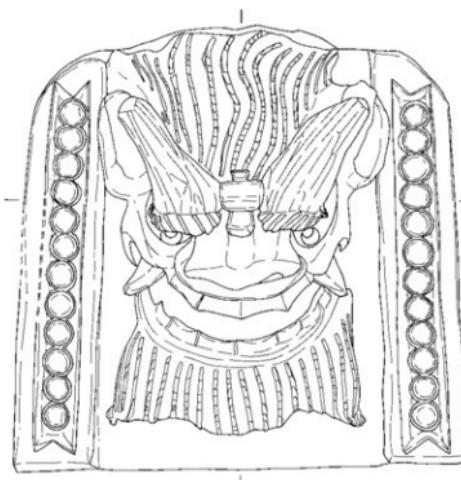
一乗寺奥の院の南西隅鬼瓦について

一乗寺奥の院南西隅の鬼瓦（一の鬼）は、屋根からの落下により、鬼（表）面左側辺の連珠溝の一部と、裏面の左側周縁部が損傷しているが、ほぼ完全な形で現存している。裏面の下方および、把手部分の一部が黄白色を呈しているが、その他は、灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は、 $\pm 1\text{ mm}$ くらいの細砂粒を含むきめの細かいものである。

鬼瓦の形状は、全長36.5cm、幅36cmを測り、ほぼ正方形を呈している。下辺は直線で両側辺にはほぼ90°の角度をもって直線的に立ち上がっている。両側辺は上方において若干幅が狭くなり、曲線を描きながら直線的な上辺に至っている。この形状の鬼瓦は、元禄四年銘のある法隆寺円成院の隅鬼瓦が類似している³⁰。厚さは、各部分によって違いが認められ、約2.5cmから約6cmである。

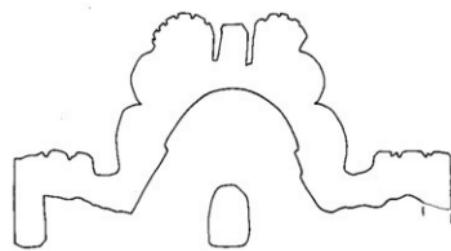
鬼（表）面における形態状の特徴は、両側に幅約6cm、高さ約1.5cmの側縁部を残し、表面を平坦に成形している。成形された表面には、たておよび、横方向に施された丁寧なミガキによる調整痕と、鬼面を接合する時に付けられた櫛目痕や指頭によるナデおよび、押さえの痕跡が残っている。また、中央上方は円形にえぐりとられ、裏面の把手部分に接続している。両側の一段高い側縁には、鬼（表）面の形状に沿って、連珠溝が彫り込まれている。連珠溝は、上下とも内側に山形に切れ込んでおり、鬼（表）面内におさまっている。連珠文は、直径約2cmの円形が片側12個、合計24個を数える。連珠溝および、連珠文は、ヘラ状の工具によってそれぞれ外形を彫り込むことにより製作されている。

裏面は、中央上方にひと握りほどのたて方向の把手部分と幅約2.5cmの周縁部を残し、内側を成形している。周縁部は上辺中央部で内側につながっているが、下辺および、側縁部では約3cmの高低差が認められる。内側には、指あるいは、ヘラ状工具によって削りとった成形時の製作痕が明瞭に残っている。この製作痕を観察する限り、裏側の周縁部および、把手部分は、貼り付けたものではなく、内側をえぐりとてそれらを浮かび上がらせている。成形過程における削りとり方向の順序に規則性はなく、たて、横、斜め方向が混在している。鬼（表）面においても、接合部分に残る痕跡（指頭によるナデおよび、押さえの痕跡）と、鬼面の接合部分がひび割れ、剥離しかけている状況から鬼（表）面の成形後、鬼面を別個に製作し、接合しているのが理解される。このため、鬼瓦の製作過程は、ほぼ正方形の箱状の粘土から削りとることにより鬼（表）面および、裏面を成形し、鬼面を貼り付けている状況が復元される。



0 20cm

第42図 一乗寺奥の院南西隅棟鬼瓦実測図



第42図 一乗寺奥の院南西隅棟鬼瓦実測図

また、鬼面の接合は、上方（頭部から上歯および、歯部分）と下方（下歯および、頬部）とに分割して行われている。この他、鬼面の各部分の仕上げは、丁寧なナデあるいは、ミガキが行われており、表面はなめらかである。角部では、先端方向に丁寧なミガキが行われ、鼻には、横方向の細かな調整の後、たて方向に3本のミガキの痕跡が残っている。眼珠、頬、歯、歯においてもそれぞれ同様に、細かな調整が行われている。

鬼面の顔のつくりは、頭部および、頬部における髪、髪の表現が特徴的である。これらは、いずれも細い棒状の工具で溝状に彫り込み、階段状に文様をつけ、それぞれを表現している。また、眉部分も同様の技法で製作されており、眉および、額縁の両先端は、螺旋状に尖っている。眉の上には、斜め上方を向く2本の角部が付き、その間（眉間）には、打出小槌（宝珠）状のものが飾られている。この他の鬼面上方部には、中心に大きな鼻、その両横に直径約2cmの丸い穴が開けられた水滴形の目、頬から角部にかけて椿円形に大きく穴が開けられた耳が配されている。さらに、鼻の下には上唇、6本の歯とその両側には斜め下方を向く2本の歯が付き、頬は牙によって大きくえぐられている。鬼面下方部には、8本の歯と額縁をもつ頬部のみがつくられている。鬼面の顔の表情は、真上からみた状態と本来の屋根に葺かれ、斜め下からみた状態では、印象は大きく違っている（図版32）。真上からみた状態では、大きな鼻と大きく開かれた下顎部に印象が強く、目に表情がないように感じられる。しかし、屋根に葺かれた状態の斜め下からみてみると、大きく開かれた目に表情が付き、鼻や口もが立体的に感じられ、製作者の意図が瓦を見上げた状態に重点を置いていたのが理解される。

以上が、一乗寺奥の院の南西隅鬼瓦の形態および、技法上の特徴である。以下に、大釜瓦窯跡出土鬼瓦と一乗寺奥の院南西隅鬼瓦とを比較し、第4章のまとめで「大釜瓦窯跡において瓦製作に携わった集団は、「構朝臣」を名乗る瓦工集団であった可能性が高い」とした結論を補足したい。

大釜瓦窯跡より出土した鬼瓦については、鬼（表）面および、裏面ともに残存しているものは3点（15・69・93）であり、そのうち全体の形状がわかるものは1点（15）のみである。また、その他のものでも、角部や歯部など鬼面のどの部位かがわかるものは数点であり、資料点数は少ないが、いくつかの類似点あるいは、相違点が挙げられる。大釜1号瓦窯跡出土の鬼瓦（15）では、平面の形状および、鬼（表）面と鬼面との接合方法に類似点が見いだされるが、鬼（表）面の側縁の連珠の形状および、製作技法などでは相違点が認められる。他の2点（69・93）や鬼（表）面あるいは裏面が残存しているものについては、平面の形状、裏面の成形技法、連珠の形状および、製作技法など相違点が数多くみられる。また、鬼面の各部分については、角部（75・76）の形状、製作技法では相違点は認められないが、歯部（99）や頬部分（74）のものについては、一乗寺奥の院南西隅鬼瓦とは違った形状や製作技法が行われている。これらのことから、両者のあいだには時期的な違い（大釜瓦窯跡が操業した元和・寛永年間と、一乗寺奥の院南西隅鬼瓦が製作された寛文年間）あるいは、いくつかの類似点を考慮しても、製作技法において多くの相違が認められ、それらが継承されているとは考えられず、同一集団が製作した可能性は低いものと思われる。

瓦銘一□寛文七丁未年三月日藤原朝臣市兵衛久長作之歳十七才ニ□一について

一乗寺奥の院の南西隅鬼瓦の左側面には、

□寛文七丁未年三月日

藤原朝臣市兵衛久長作之

歳十七才ニ□ (□の文字は、「時」と「テ」か)

と刻まれた3行の銘文がみられる。この銘文は、寛文7年(1667)の3月吉日に、藤原朝臣市兵衛久長という若干17才の若者が上述の鬼瓦をつくったことを伝えている。

「藤原朝臣」あるいは、「藤原」(以後、藤原)の銘を刻んだ瓦は、中世の中期以降に畿内を中心に数多く確認されている。この藤原を名乗る瓦工集団には、大阪の四天王寺に本拠を置き「四天王寺系瓦工」と呼ばれる瓦製作集団と、姫路に本拠を置く「姫路系瓦工」と呼ばれる瓦製作集団¹⁰のふたつが知られている。また、藤原という名称は、このふたつの瓦工集団の他にも、番匠あるいは、鑄物師などの職人集団が名乗っており、一乗寺に関係するところでは、寛永16年(1639)の「護法堂建立棟札」、同17年(1640)の「妙見堂再造棟札」および、正保3年(1646)の「本堂宮殿建立棟札」に、藤原朝臣甚右衛門尉重次という印南郡志方庄行恒村の大工職人の名が残っている。

このうち、四天王寺系瓦工は、文明13年(1481)の朝光寺(加東郡社町)の丸瓦に「大工天王寺下向ノ越後國藤原末次其外小工七人同道文明十三年辛丑二月十五日始同卯月十三日作節納」と刻んだ瓦銘を残している。これは、四天王寺系瓦工の播磨国での初見であり、これ以後も鶴林寺(加古川市)、仙正八幡神社(新宮町)などでその名が確認される。この四天王寺系瓦工の銘文には、藤原の銘よりも四天王寺あるいは、天王寺の在地名称を尊重して残している特徴がみられる。一方、姫路系瓦工は、文禄2年(1593)の隨順寺(姫路市)の鬼瓦「播磨筋東□□□藤原朝臣善四郎」にその名がみられる。これ以後、姫路系瓦工の銘には、藤原を名乗るとともに、「播州しきさい郡」の在地名称が付けられ、寺院瓦に数多く確認される。また、藤原を名乗る以前には、「播州英賀」あるいは、「播州色最郡阿賀」と記しており、姫路系瓦工藤原の痕跡を認めることができる。さらに遡って室町時代には、英賀城、置塙城、恒屋城、御着城、姫路城(いずれも旧播磨国)などの城郭に瓦を供給していたことが、瓦当面の文様の特徴¹¹から確認される。

以上のことから、「寛文7年藤原朝臣市兵衛久長」の銘をもつ一乗寺奥の院南西隅鬼瓦は、それぞれの特徴といえる「四天王寺」あるいは、「播州しきさい郡」の名称を記しておらず、四天王寺系瓦工によるものか、姫路系瓦工によるものか、どちらとも判断出来ない状況である。しかし、鬼瓦に刻まれた寛文7年(1667)は、一乗寺では本堂および、鐘楼が再建されて約40年を経ており、それ以後、正徳6年(1716)の護法堂、妙見堂、弁天堂の修造まで建築に関する記録は残されていない。このため、一乗寺側が、必要に応じて(この場合、奥の院南西隅)鬼瓦を発注したと考えれば、四天王寺系瓦工が製作したと考えるよりもむしろ、地元の姫路系瓦工によって製作された可能性が高いと思われる。また、四天王寺系瓦工は江戸時代に入ると寺島という姓を名乗り始めており¹²、このことからも「寛文7年藤原朝臣市兵衛久長」の銘をもつ鬼瓦は、姫路系瓦工の藤原によって製作されたものと考えられる。

なお、現在一乗寺には、銘文のある瓦が5点保存されている¹³。それらの銘文には、大和國西之京之住人橘氏の名がみられ、「大和系瓦工」「橘朝臣」を名乗る瓦工集団が鎌倉時代から室町時代にかけて、さらには本堂の再建に際して一乗寺に瓦を供給していたことが理解される。このため、一乗寺においては、ひとつの瓦工集団が継続的、専門的に瓦を生産していたことは否定され、各時代あるいは、そ

の時に瓦工集団が入れ代わり瓦を供給していたようである。「寛文7年藤原朝臣市兵衛久長」の銘をもつ鬼瓦については今後、一乗寺で行われる建築物の瓦の葺き替え時に得られる資料や、周辺の寺院より発見あるいは、遺跡から出土する資料などの増加によって、よりその詳細を解明出来るものと考えられる。

(註)

- (1) 下辺が直線で、両側辺にはほぼ90°の角度をもって直線的に立ち上がる形状の鬼瓦の類例は少なく、加えて、連珠の形状なども類似するものは確認されなかった。法隆寺円成院の隅鬼瓦（隅二の鬼）は平面の形状は類似しているが、製作者は法隆寺瓦大工与次衛尉橋吉長である。
- (2) 姫路系瓦工は、「英賀系でもよいが、実際は英賀以外の地域にも瓦工がいたようなので英賀より広い地域を視野に入れて姫路系とした。」

田中幸夫 「播磨で活躍した室町・桃山時代の瓦工集団」『今里幾次先生古稀記念播磨考古学論叢』
1990 今里幾次先生古稀記念論文集刊行会

- (3) 「しきさい郡」の表記には、色最、式西、色西などがみられる。
- (4) 瓦工集団によって瓦当面の文様には特徴があり、姫路系瓦工の軒平瓦は花形の中心飾りに唐草が左右に配された文様が典型的である。また、四天王寺系瓦工の軒平瓦には波状文が、大和系瓦工の軒平瓦には菊文水あるいは、宝珠の中心飾りに唐草が配された文様が好んで使われている。
- (5) 江戸時代の大坂には、代々寺島藤右衛門を世襲した瓦筋がおり、その寺島家に残された膨大な文書類の一冊に「攝州天王寺ハ父祖代々之在所ニ」との記述があり、四天王寺系瓦工の残した銘文と併せ考えると、四天王寺系瓦工＝寺島ということがいえる。
- (6) 一乗寺に残されている銘文のある瓦は、

丸瓦籠書銘	額田部武末
承安4年(1174)	筆安隸年才次八月四日
	甲午
丸瓦籠書銘	弘治三年
弘治3年(1557)	大和國西之京之住人新三郎作也
	卯月十四日
鬼瓦籠書銘	弘治三年六月十六日甚六白敬
弘治3年(1557)	爲南無阿弥陀佛彌六也
	大和國西之京之住人
	橋清川
	彌六作
	也
仕手之人数	
	甚六
	左衛門三郎
	新五郎
	新三郎
	以上六人也

弘治三年六月十五日神左衛門
爲南無阿彌陀佛弥六也
瓦大工橋清川弥六作也
鬼瓦範書銘
弘治3年(1557)
大和國西之京之住人
瓦大工橋清川神左衛門尉國次作
同
□弥六
甚六
左衛門三郎
新五郎
新三郎
以上六人也
其時弘治三年六月十六日
爲南無阿彌陀佛甚六也
軒丸瓦線刻銘
年代不明
□□阿彌陀佛
(南無)
の以上、5点である。

参考文献一覧

第2章 遺跡の環境

第2節 歴史的環境

- 『加西郡誌』 1929 兵庫縣加西郡教育會
『兵庫県埋蔵文化財特別地域 遺跡分布地図及び地名表』第2集 1968 兵庫県教育委員会
『加古川市遺跡分布地図』第2版 1994 加古川市教育委員会
『加西市埋蔵文化財 遺跡分布地図及び地名表』 1997 加西市教育委員会
『特別展 はりまの名刹一法華山一乗寺の秘宝』 1984 兵庫県立歴史博物館
『法華山一乗寺』兵庫県立歴史博物館総合調査報告書Ⅰ 1985 兵庫県立歴史博物館
『播磨古法華山石仏と繁昌天神森石仏』 1985 甲陽史学会
藤原 学「兵庫県姫路市御国野町所在深志野瓦窯の実測調査」『関西近世考古学研究』II 1992 関西近世考古学研究会

第3章 調査の成果

第2節 遺物

- 『中・近世瓦の研究－元興寺篇－』 1982 元興寺文化財研究所
『折津高櫻城』 1984 高櫻市教育委員会
『視沢・大沢窯跡ほか』 1987 宮城県教育委員会 宮城県道路公社
『千疊敷』 1990 岐阜市教育委員会
『千疊敷Ⅱ』 1991 岐阜市教育委員会
『盛岡城跡Ⅰ』 1991 盛岡市 盛岡市教育委員会
『日置莊遺跡』 1995 大阪府教育委員会 (財)大阪文化財センター
五十川伸夫「平瓦の数量計測方法の分析－生産遺跡出土の場合－」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和58年度』 1983 京都大学埋蔵文化財研究センター
上原真人「平瓦製作法の変遷－近世造瓦技術成立の前提－」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』 1990 今里幾次先生古稀記念論文集刊行会
小林章男『統 鬼瓦』 1991 (株)共同精版印刷
『昭和資材帳15 法隆寺の至寶 瓦』 1992 小学館
大川 清『古代のかわら』 1996 窯業史博物館

第4章 まとめ

中世瓦窯－ダルマ窯－の調査について

- 『寺内焼窯跡』 1991 秋田市教育委員会 秋田市遺跡保存会
『多摩湖の歴史－湖底の遺跡と村の発掘－』 1989 東大和市教育委員会
『昭和51・52年度 高櫻市文化財年報』 1977 高櫻市教育委員会
『鷲上郡衙跡発掘調査概要・2』 1978 高櫻市教育委員会
『鷲上郡衙他関連遺跡発掘調査概要・12』 1988 高櫻市教育委員会
『鷲上郡衙他関連遺跡発掘調査概要・13』 1989 高櫻市教育委員会

- 『龍泉寺』 1993 大谷女子大学資料館
- 『三日市遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 1988 三日市遺跡調査会
- 『堺環濠都市遺跡（S K T79）発掘調査報告』 1988 堺市教育委員会
- 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成7年度』 1996 奈良市教育委員会
- 『根来寺坊院跡』 1994 和歌山県教育委員会 財団法人和歌山県文化財センター
- 『攝津旧清遺跡』 1973 宝塚市教育委員会 旧清遺跡発掘調査団
- 『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（2）』 1988 兵庫県教育委員会
- 『昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報』 1985 神戸市教育委員会
- 『松岡屋敷跡 平山瓦窯跡』 1995 熊本県教育委員会
- 駒井鋼之助『かわら日本史』 1981 雄山閣出版
- 『瓦 日本の町並みをつくるもの』 1986 I N A X出版
- 『埼玉のかわら』 埼玉県民俗工芸調査報告書第4集 1986 埼玉県立民俗文化センター
- 鈴木裕子『ダルマ窯に関する二つの文献』『江戸在地系土器勉強会通信』No17 1990 江戸在地系土器研究会
- 両角まり 小林謙一『江戸在地系土器研究における現存土器窯調査の意義—小林克氏に対するコメント』『江戸在地系土器勉強会通信』No23 1991 江戸在地系土器研究会
- 『宮城県の瓦戦』 1993 東北歴史資料館
- 『谷川瓦調査報告Ⅰ—門瓦製造所・坂板喜代一瓦窯—』 1992 岐阜教育委員会 谷川瓦調査委員会
『達磨窯—瓦匠のわざ 400年—』 1997 吹田市立博物館
- 藤原 学「達磨窯—その発生から今日まで—」 1997 平成9年度特別展『達磨窯』講演会資料
- 藤原 学「達磨窯の成立」（『網干善教先生古稀記念論文集』 網干善教先生古稀記念論文集刊行会
平成10年3月刊行予定）
- 『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和59年度 1987 兵庫県教育委員会
- 『川原毛瓦窯 現地説明会資料』 1989 紫波町教育委員会
- 『堀向瓦窯跡 現地説明会資料』 1996 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

大釜瓦窯跡出土瓦について

- 田中幸夫「大和から三木へ来た橘氏と古瓦」『三木史談』第21号 1989 三木郷土史の会
- 田中幸夫「播磨で活躍した室町・桃山時代の瓦工集団」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』
1990 今里幾次先生古稀記念論文集刊行会
- 田中幸夫「大坂城から掘り出された「三木住人」瓦」『三木史談』第26号 1991 三木郷土史の会
- 田中幸夫「中世から近世にかけての京都近隣の瓦—押小路殿（二条殿）瓦を中心にして—」『京都考古』第70号 1993 京都考古刊行会
- 田中幸夫「三木城出土瓦について」『織豊城郭』創刊号 1994 織豊期城郭研究会
- 田中幸夫「特別寄稿 瓦大工のルーツ—四天王寺系の堀—」『伝統瓦』会報第10号 1994 日本伝統
瓦技術保存会
- 田中幸夫「播磨の中近世瓦」 1994 姫路市文化財協会 文化財講座レジメ
- 田中幸夫・土橋健二郎『瓦板』第6号～第21号 1992～1994 播磨中近世瓦研究会
- 田中幸夫「播磨を通過した四天王寺系瓦工」『織豊城郭』第2号 1995 織豊期城郭研究会

- 有本 隆「播磨の瓦刻銘史 御城瓦節の足跡と系譜」 1984 姫路市文化財保護協会
- 有本 隆「瓦銘による中世播磨の瓦部」「播磨学紀要」vol. 2 1996 播磨学研究所
- 土山公仁「岐阜城の瓦について I」「岐阜市歴史博物館研究紀要」3 1989 岐阜市歴史博物館
- 土山公仁「信長系城郭における瓦の採用についての予察—同范あるいは同型瓦を中心にして—」「岐阜市歴史博物館研究紀要」4 1990 岐阜市歴史博物館
- 久保智康「越前における近世瓦生産の開始について～武生市小丸城跡出土瓦の検討～」「福井県立博物館紀要」第3号 1989 福井県立博物館
- 中井 均「但馬竹田城跡採集瓦について—文禄・慶長年間築城の考古学的考察ー」「但馬竹田城」1991 城郭談話会
- 中井 均「利神城跡採集瓦について—池田氏支配の播磨国における利神城の考古学的位置付けー」「播磨利神城」 1993 城郭談話会
- 中井 均「淡路における城郭瓦の展開—岩屋・由良・洲本の諸城跡を中心としてー」「淡路洲本城」1995 城郭談話会
- 中井 均「滴水瓦に関する一考察ーなぜ城郭建築に多く見られたのかー」「織豊城郭」第2号 1995 織豊期城郭研究会
- 木戸雅寿「安土城出土の瓦について—その系譜と織豊政権における築城政策の一端ー」「織豊城郭」創刊号 1994 織豊期城郭研究会
- 黒田慶一「豊臣氏大坂城の瓦について」「織豊城郭」創刊号 1994 織豊期城郭研究会
- 森島康雄「聚落第と城下町の瓦」「織豊城郭」創刊号 1994 織豊期城郭研究会
- 山川 均「城郭瓦の創製とその展開に関する覚書」「織豊城郭」第3号 1996 織豊期城郭研究会
- 「織豊期城郭の瓦」「織豊期城郭資料集成 I」 1994 織豊期城郭研究会
- 「福井県窯業誌」 1983 福井県窯業誌刊行会
- 「飾東2号墳」 1995 兵庫県教育委員会

付載

- 乗寺奥の院南西隅鬼瓦について
- 【三重県指定史跡 松坂城本丸跡上段発掘調査報告書】 1992 松坂市教育委員会
- 【史跡広島城跡 二の丸第二次発掘調査報告】 1989 広島市教育委員会
- 小林章男「鬼瓦」 1981 大蔵経済出版

- 瓦銘一□寛文七丁未年三月日藤原朝臣市兵衛久長作之歳十七才ニ□一について
- 田中幸夫「姫路城瓦と姫路系瓦工について」「織豊城郭」創刊号 1994 織豊期城郭研究会
- 田中幸夫「瓦銘」 田中氏収集資料より（平成9年に「加西の近世瓦」と題して、それらの資料が発表されている。『東播磨一地域史論集ー』第4号 1997 東播磨地域史懇話会）
- 中尾正治「八幡近郊と南山城地域で名を残した瓦師」「京都考古」第69号 1993 京都考古刊行会

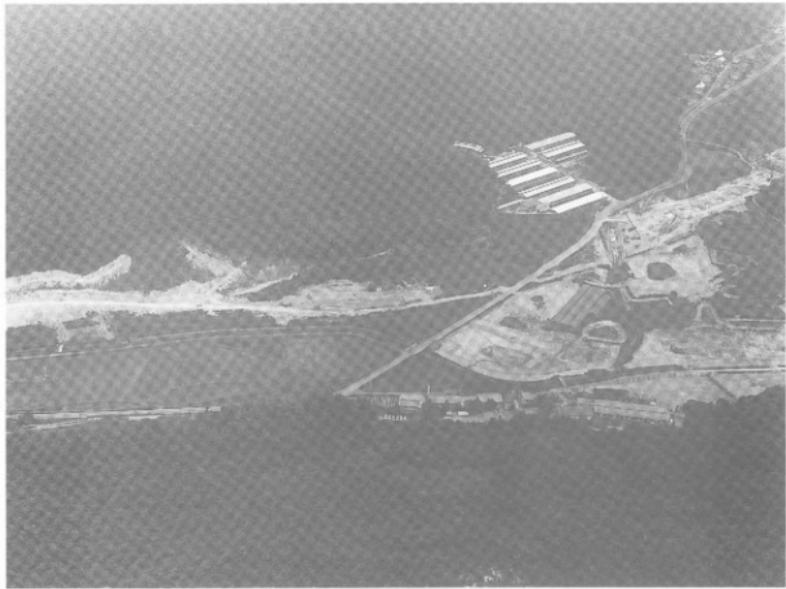
報告書抄録

ふりがな	祐姓 ねうせい							
書名	大釜瓦窯跡							
副書名	山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告							
巻次	XXIII							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第156冊							
編著者名	森内秀造・甲斐昭光・長瀬誠司・仁尾一人							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL. 078-531-7011							
発行年月日	西暦1997(平成9)年3月31日							
所 収 遺 跡 名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
祐姓 大釜	ひょうせんおひし 兵庫県姫路市 しきとうじゆ 祐姓 飾東町 大釜 おひせいろ 字大垣内 313 -2他	28201 930164 940005	34度 50分 44秒	134度 49分 32秒	確認調査 19940207 19940222 全面調査 19940606 19940831	347m ² 597m ²	山陽自動車道 (三木～姫路) 建設事業に伴 う発掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大釜	瓦窯跡	江戸時代初期	瓦窯跡4基・瓦 捨て場・水溜め 遺構・溝	瓦 平瓦・丸瓦・軒平瓦 ・面戸瓦・鬼瓦		法華山一乗寺の本堂 再建瓦の焼成瓦窯		

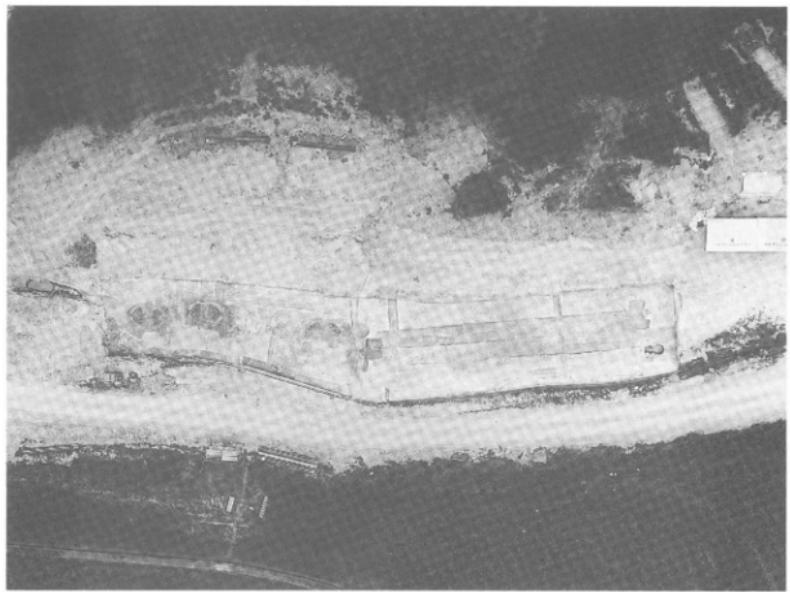
図 版



大釜瓦窯跡遠景〔東から〕



大釜瓦窯跡遠景〔南から〕



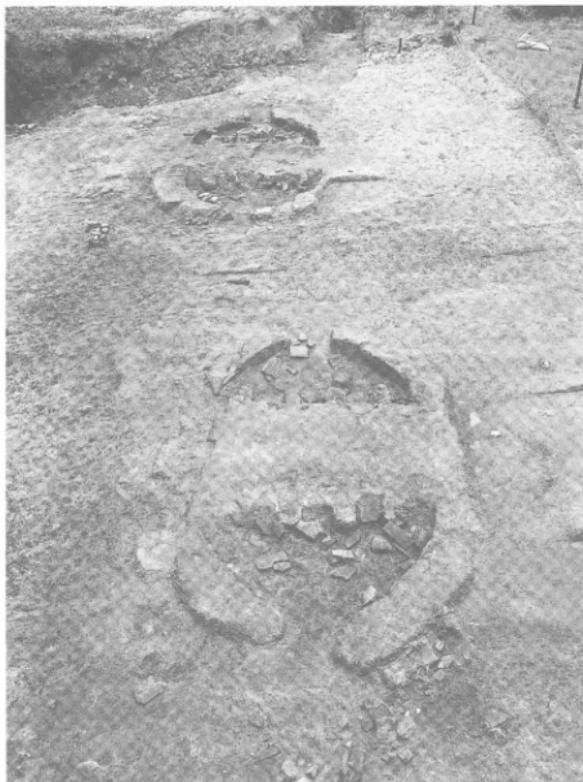
大金瓦窯跡全景〔南から〕



大金瓦窯跡全景〔南から〕



1・2号瓦窯跡〔南から〕



1・2号瓦窯跡〔東から〕

図版 4



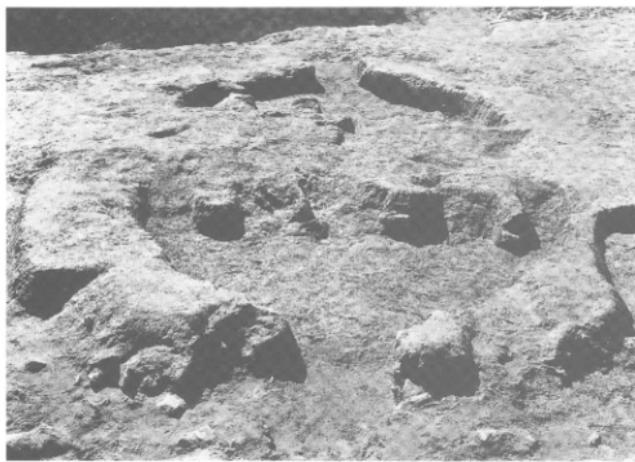
1号瓦窯跡〔南東から〕



1号瓦窯跡〔北から〕



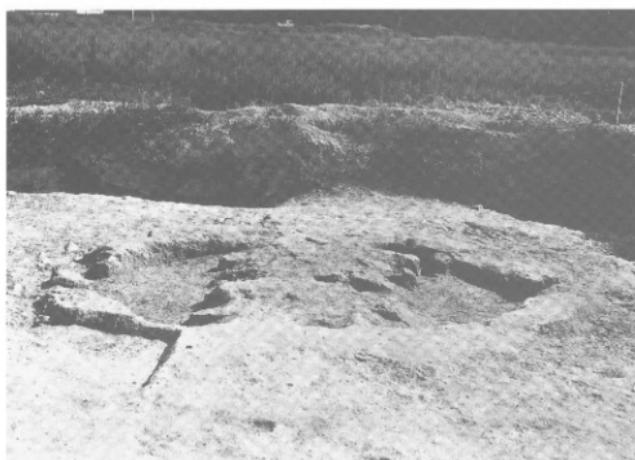
1号瓦窯跡〔南東から〕



1号瓦窯跡〔東から〕



1号瓦窯跡〔北西から〕

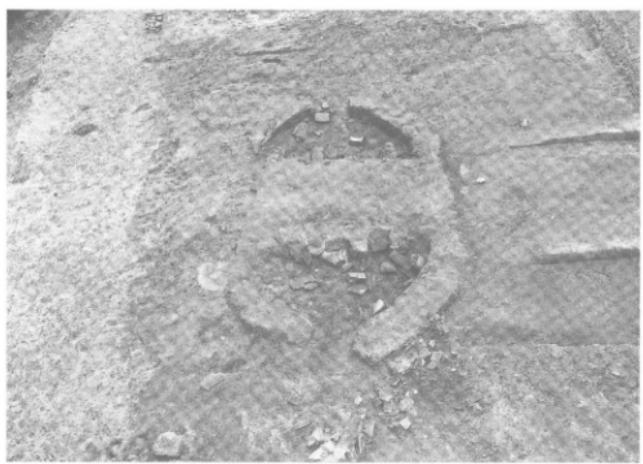


1号瓦窯跡〔北から〕

図版 6



2号瓦窯跡〔南西から〕



2号瓦窯跡〔東から〕



2号瓦窯跡〔北西から〕



2号瓦窯跡〔東から〕

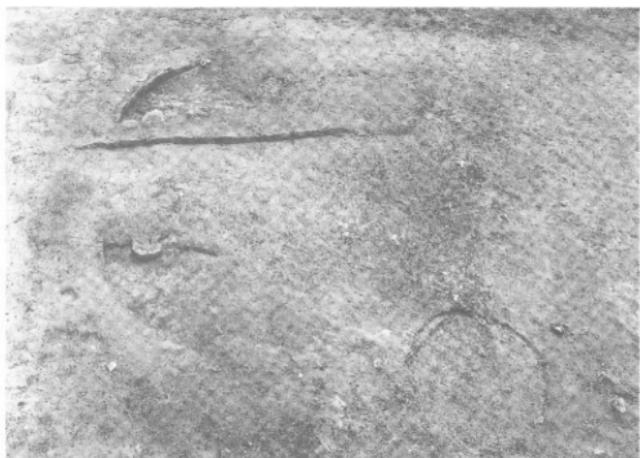


2号瓦窯跡〔南東から〕



2号瓦窯跡〔北から〕

図版 8



3号瓦窯跡〔西から〕



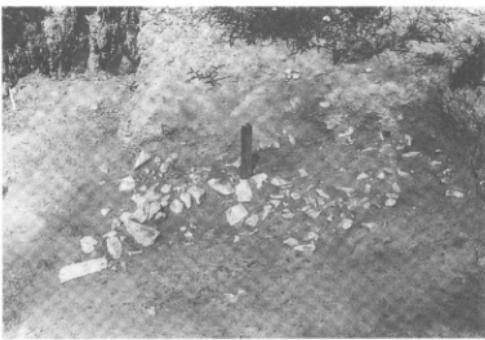
4号瓦窯跡〔南西から〕



3・4号瓦窯跡および
擾乱土抗〔西から〕



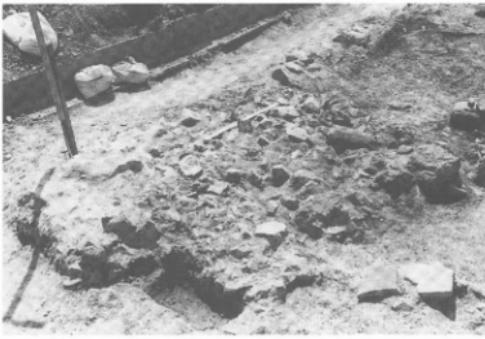
①



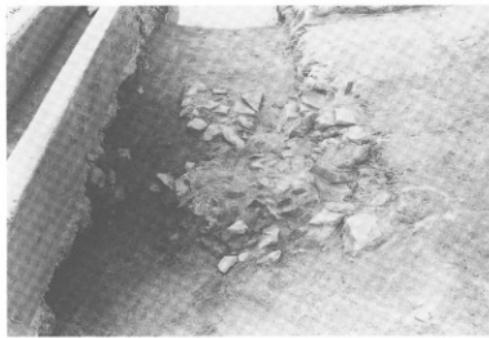
②



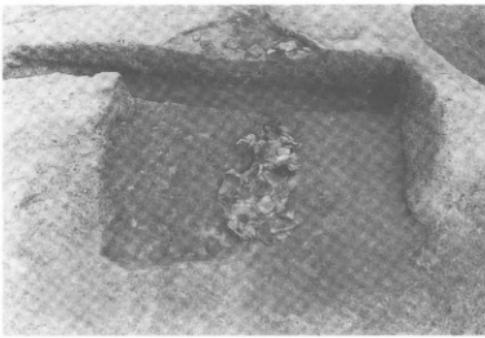
③



④



⑤



⑥

① 1号瓦窯跡 窯体内瓦出土状況〔南西から〕

② 1号瓦窯跡西 集石検出状況〔東から〕

③ 2号瓦窯跡 東焚口瓦出土状況〔南東から〕

④ 2号瓦窯跡南東 瓦および、窯壁材出土状況〔北東から〕

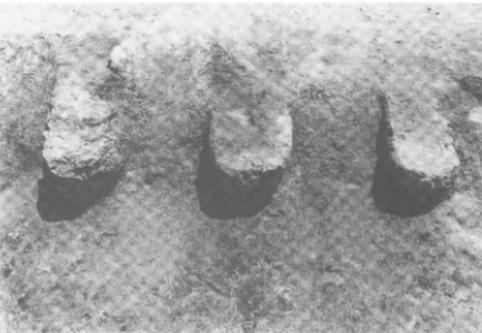
⑤ 調査区南端U字溝沿い 瓦出土状況〔東から〕

⑥ 4号瓦窯跡東 掘乱土坑内瓦出土状況〔西から〕

図版10



①



②



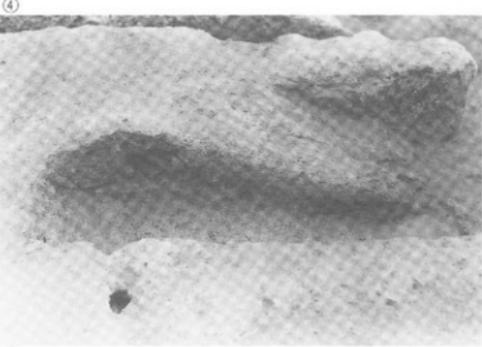
③



④



⑤

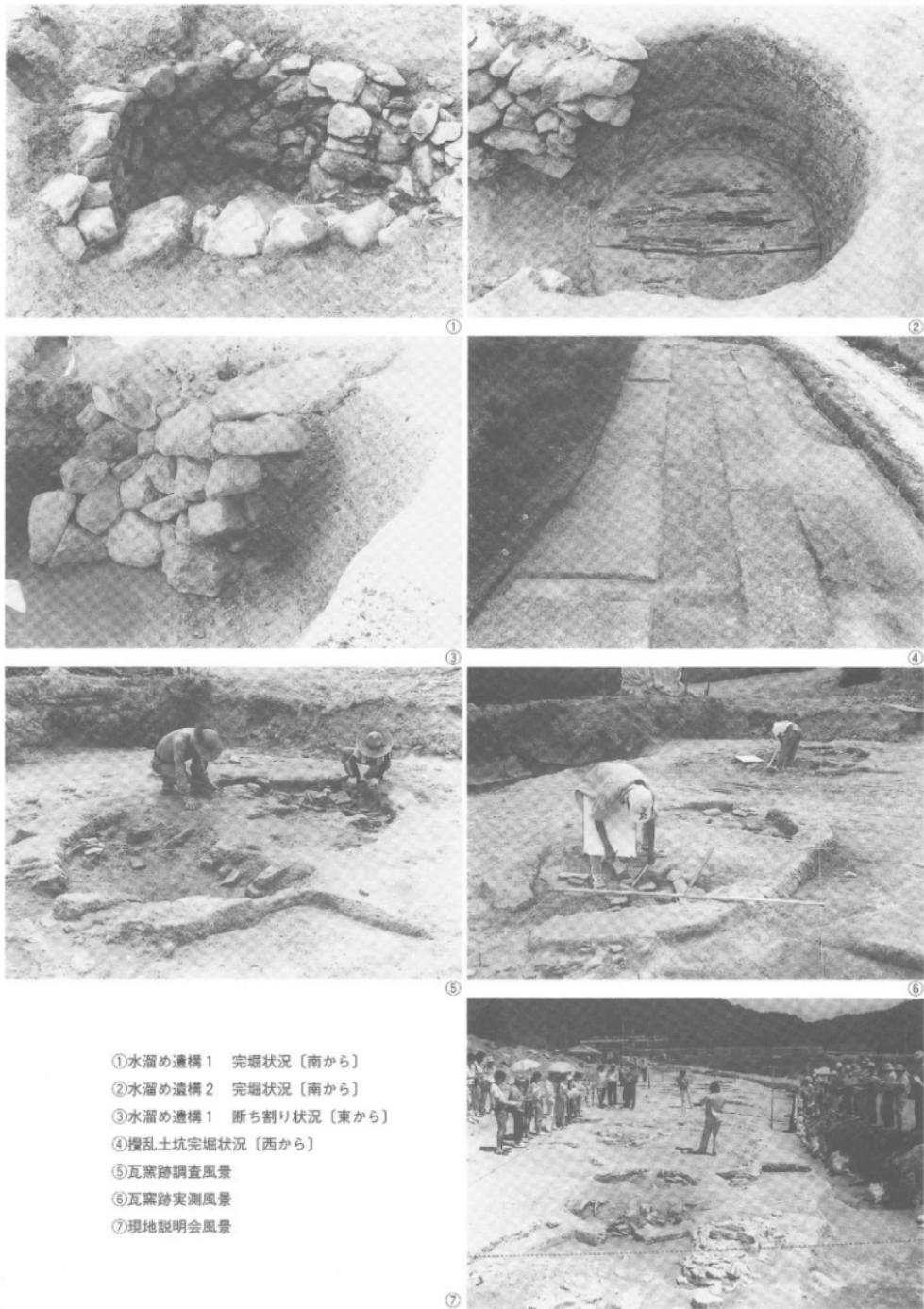


⑥



⑦

- ① 2号瓦窯跡 西燃焼室畦〔北西から〕
- ② 2号瓦窯跡 西燃焼室畦〔西から〕
- ③ 2号瓦窯跡 東燃焼室畦〔東から〕
- ④ 2号瓦窯跡 西燃焼室畦〔東から〕
- ⑤ 2号瓦窯跡 東燃焼室畦断ち割り状況〔北から〕
- ⑥ 2号瓦窯跡 西燃焼室焰道断ち割り状況〔北から〕
- ⑦ 2号瓦窯跡 西燃焼室窯壁断ち割り状況〔西から〕



図版12



一乗寺全景〔南から〕



①



②



③

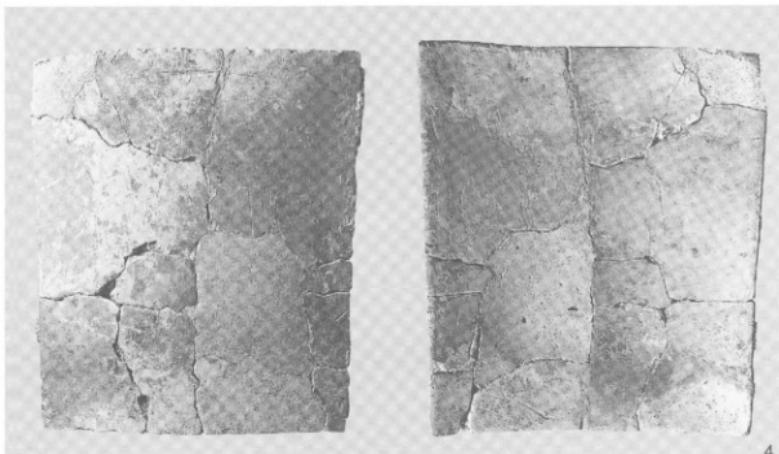


④

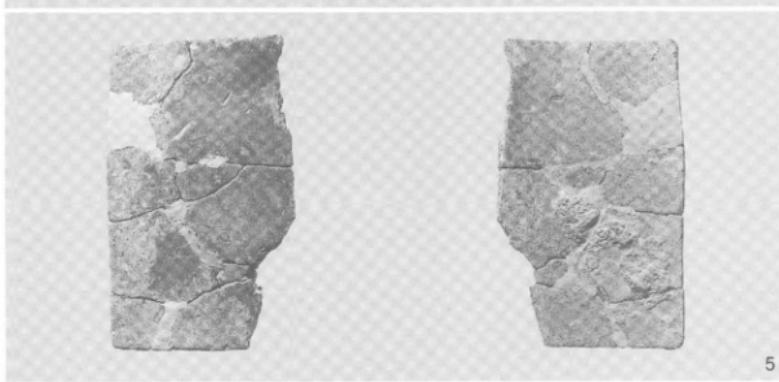


⑤

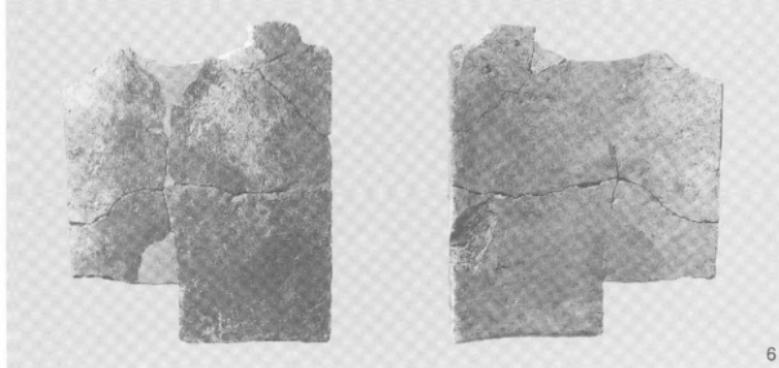
- ①三重塔〔北東から〕
- ②本堂屋根瓦〔北から〕
- ③本堂軒下瓦〔北から〕
- ④奥の院〔南から〕
- ⑤奥の院南西隅棟〔南西から〕



4

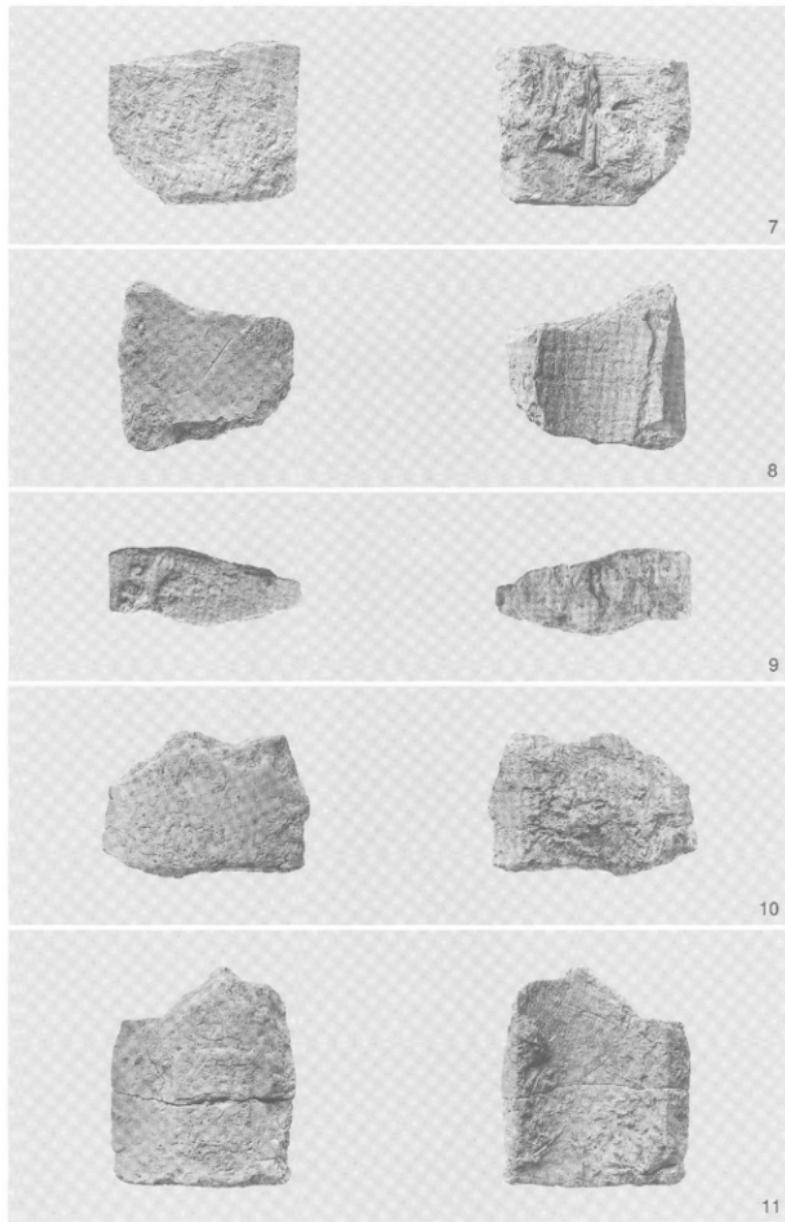


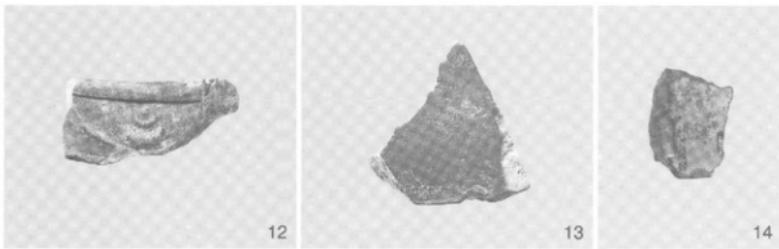
5



6

図版14 大釜瓦窯跡出土瓦(2)

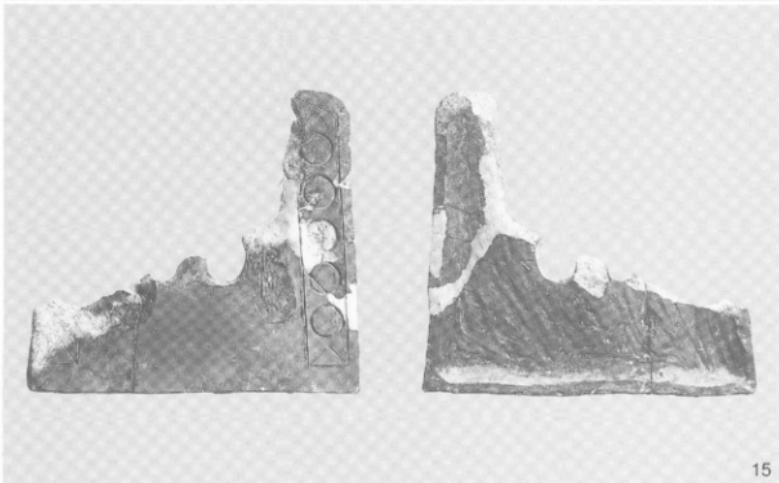




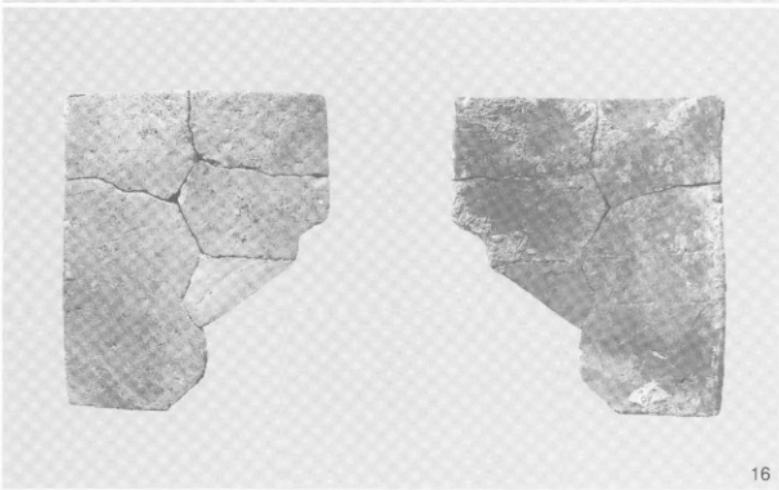
12

13

14

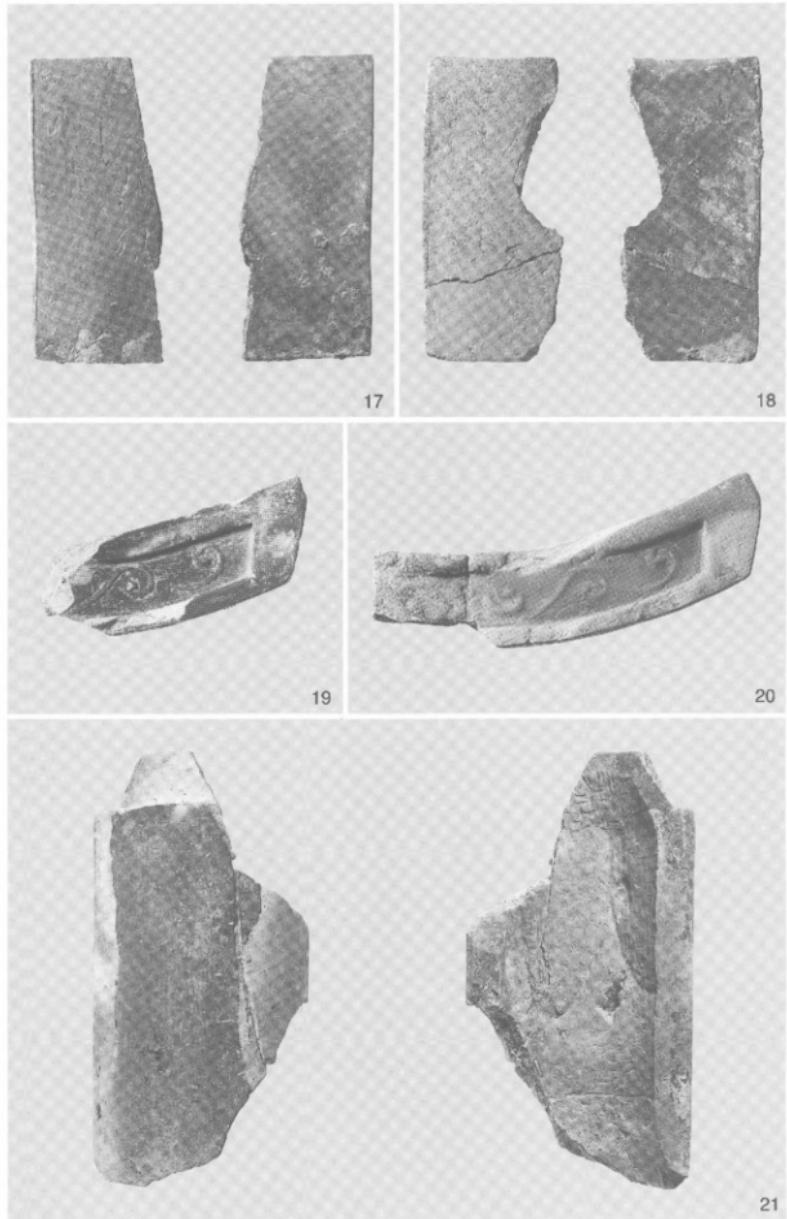


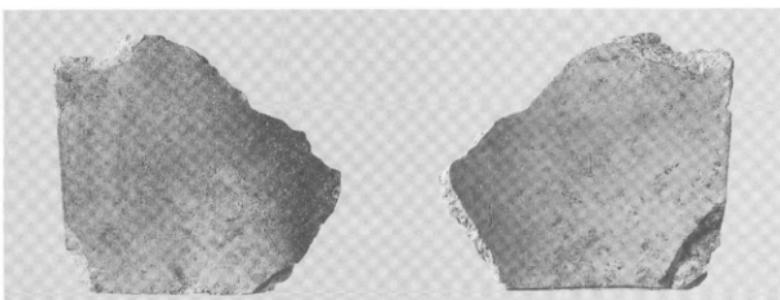
15



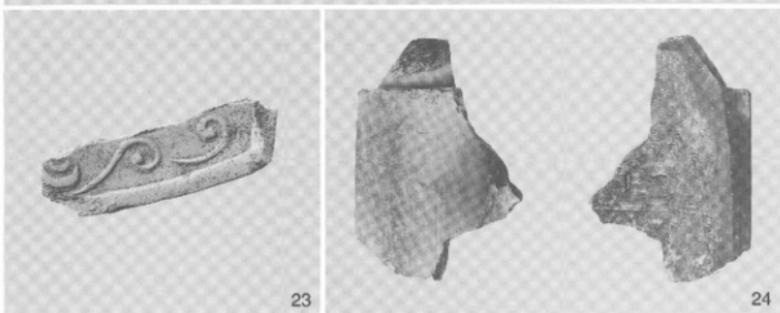
16

図版16 大釜瓦窯跡出土瓦(4)





22



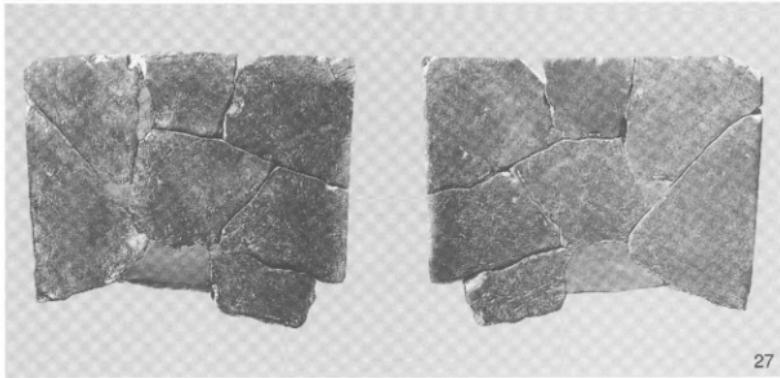
23

24

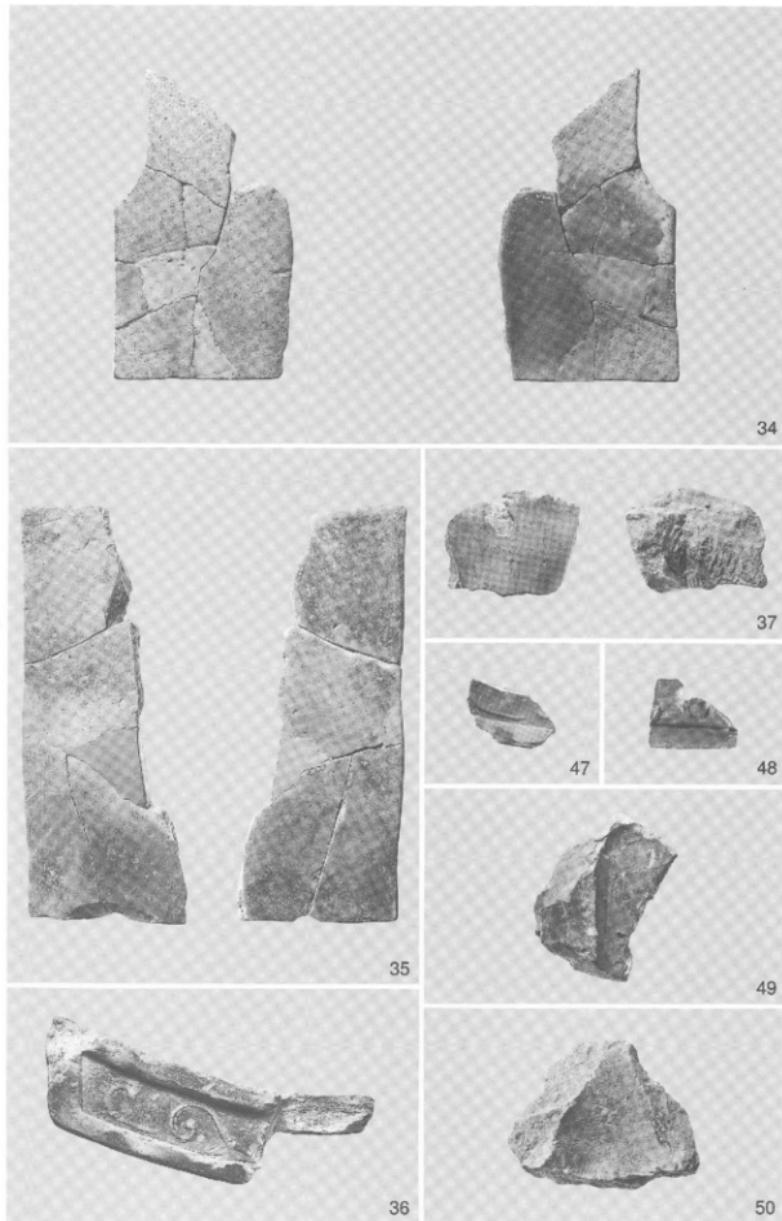


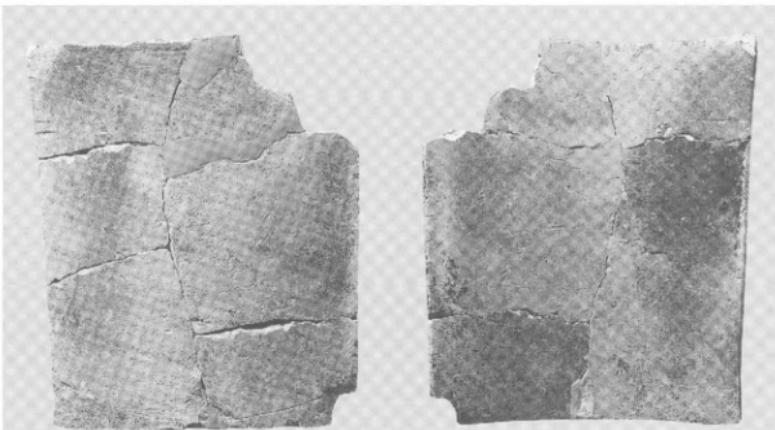
25

26

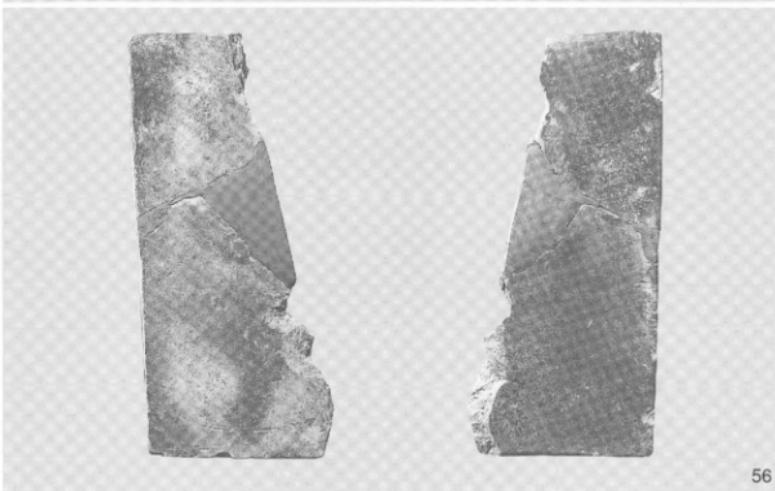


27

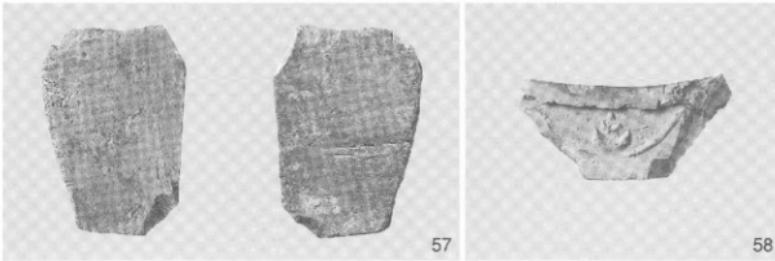




51



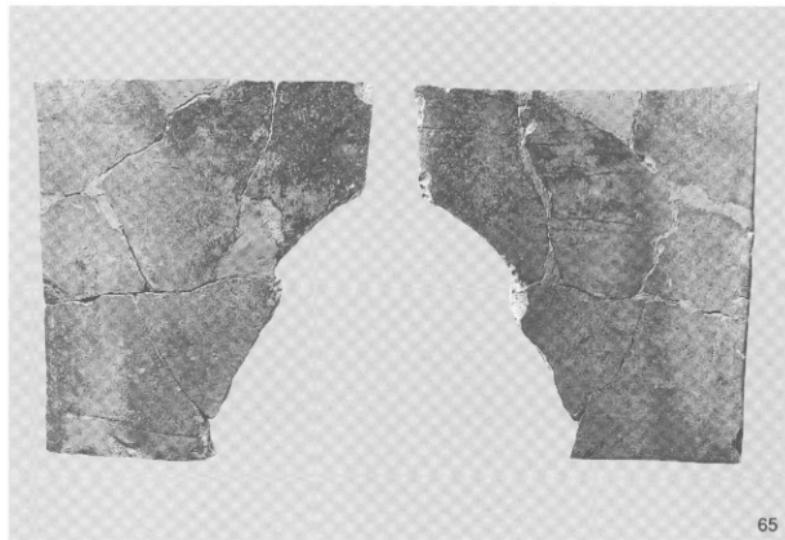
56



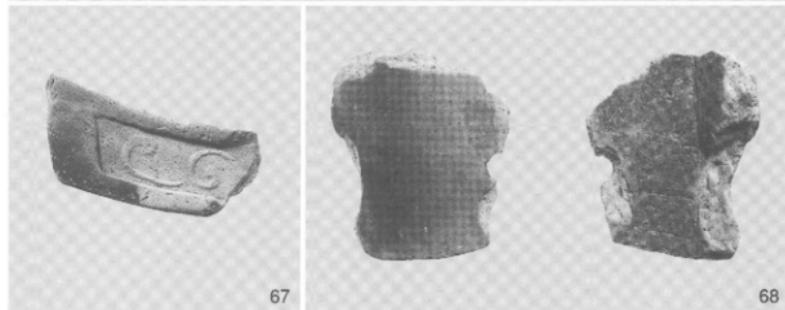
57

58

図版20 大釜瓦窓跡出土瓦(8)

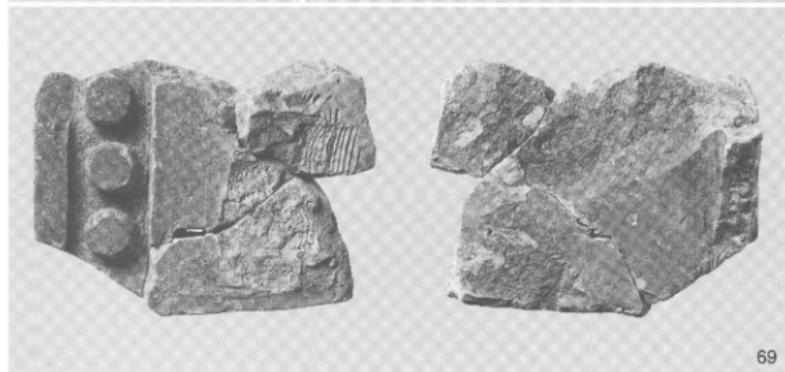


65



67

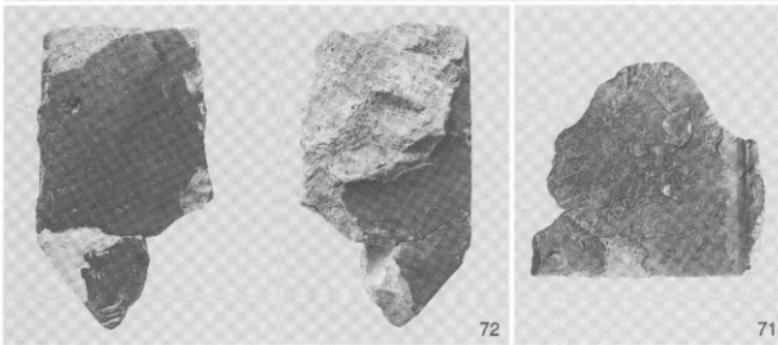
68



69



70



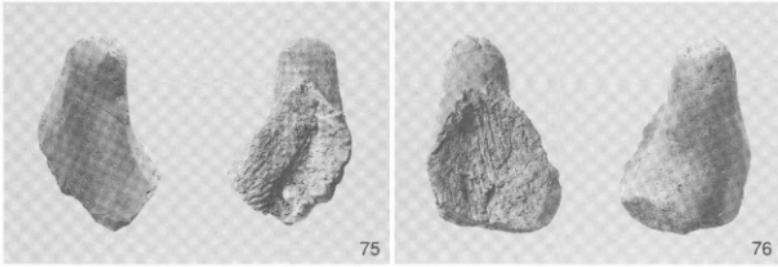
72

71



73

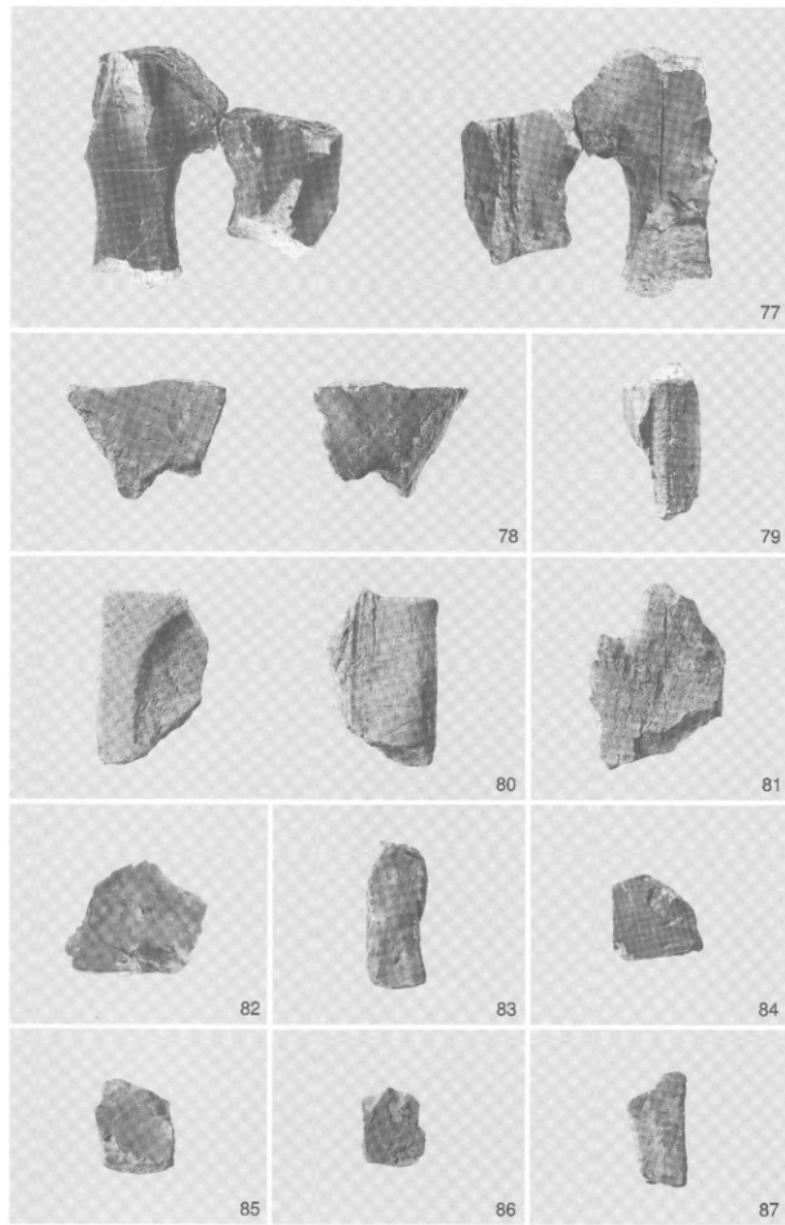
74

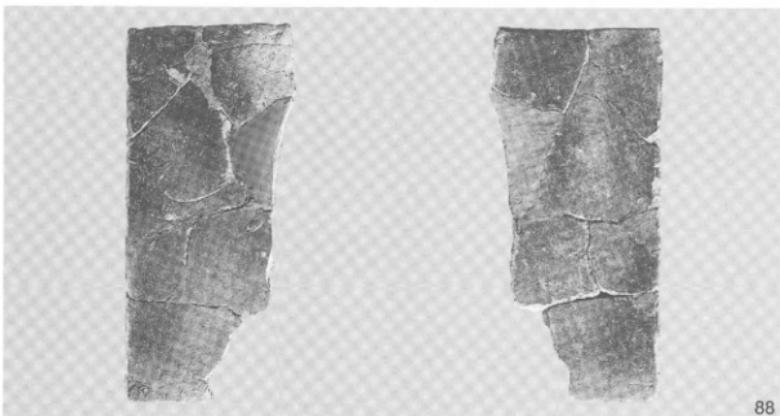


75

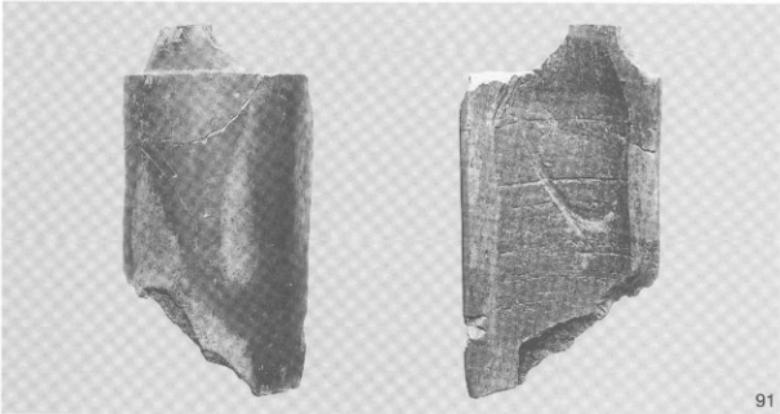
76

図版22 大釜瓦窯跡出土瓦(10)

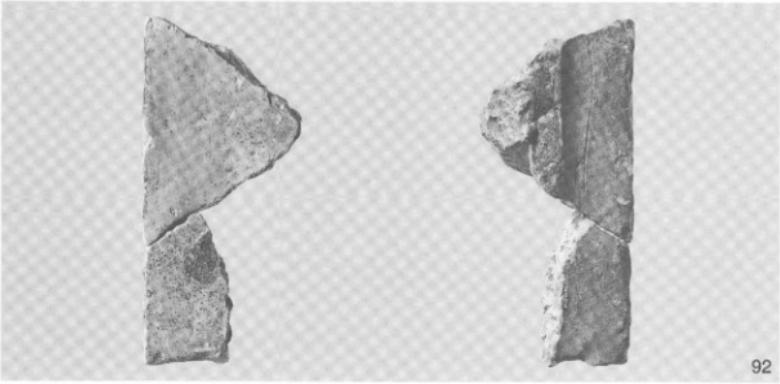




88

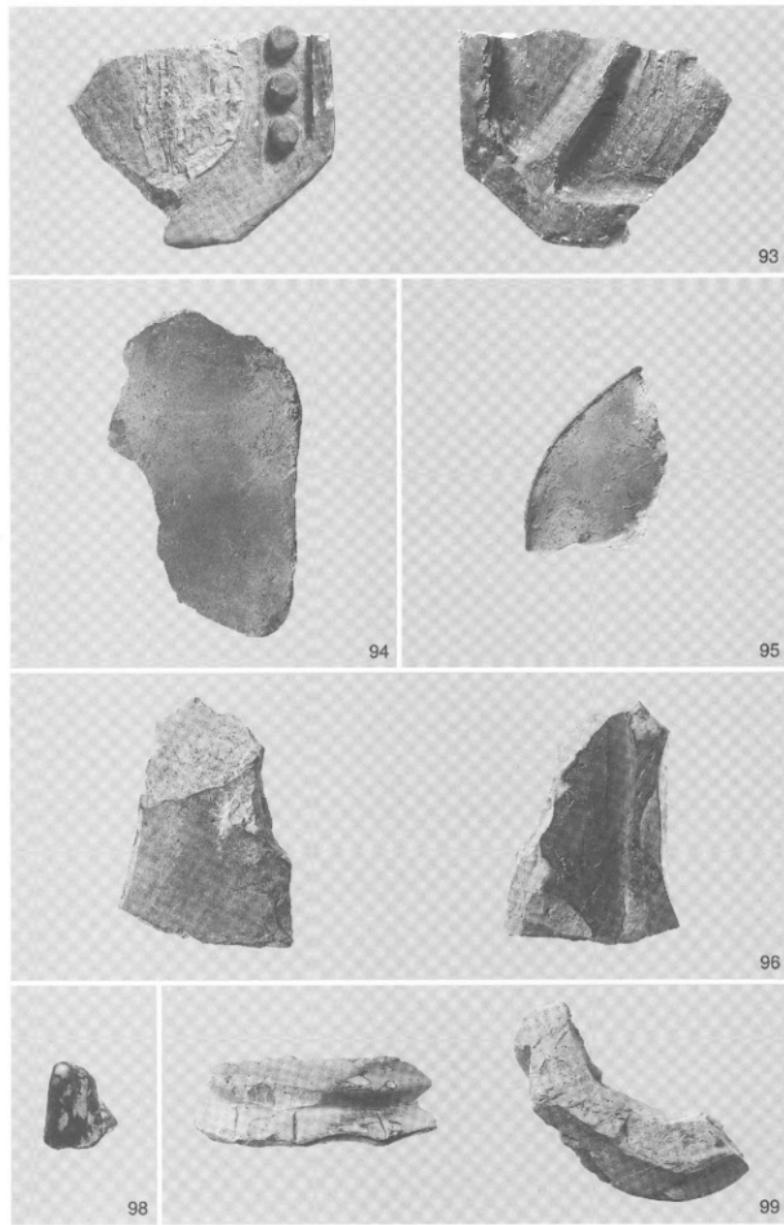


91



92

図版24 大釜瓦窯跡出土瓦(12)





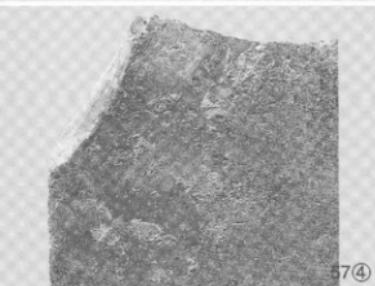
91①



21②



34③

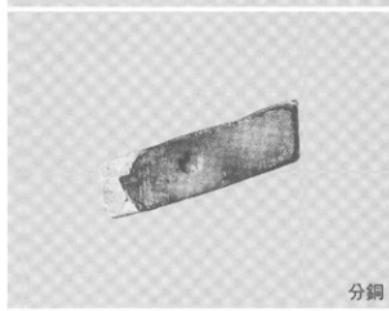


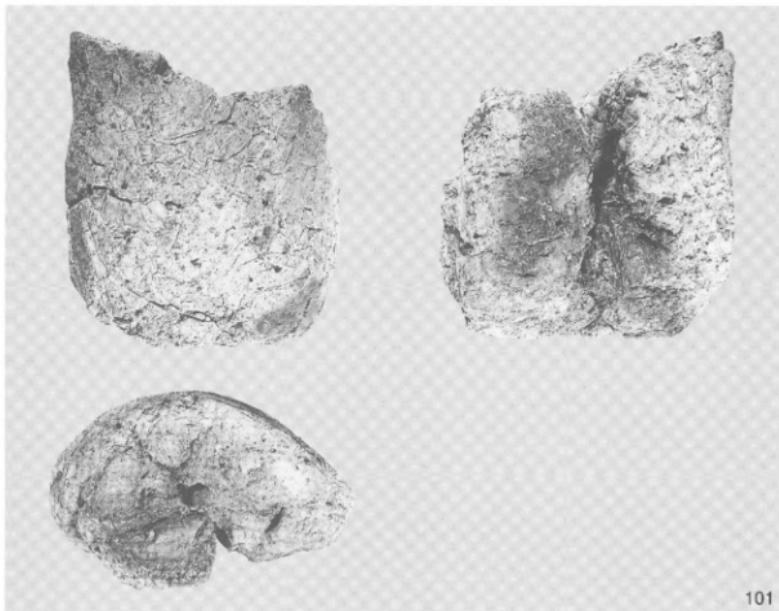
57④



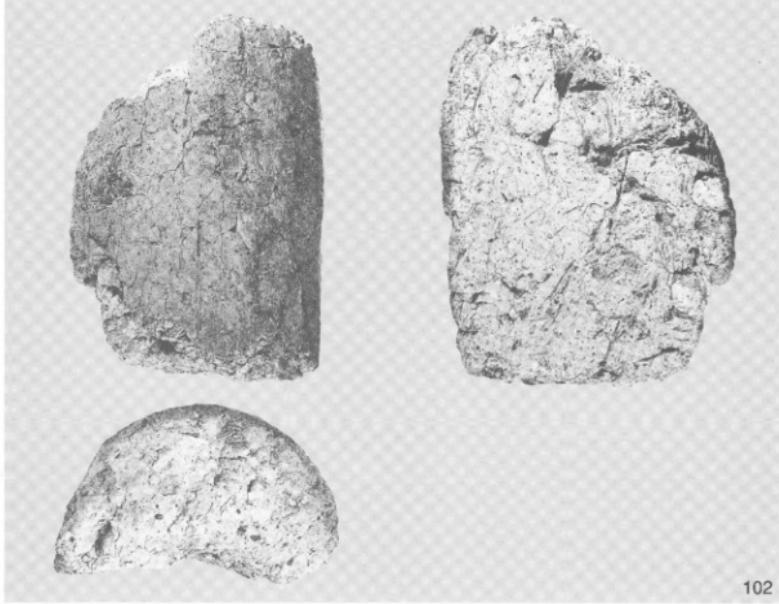
111⑤

図版26 大釜瓦窯跡出土刻印瓦





101

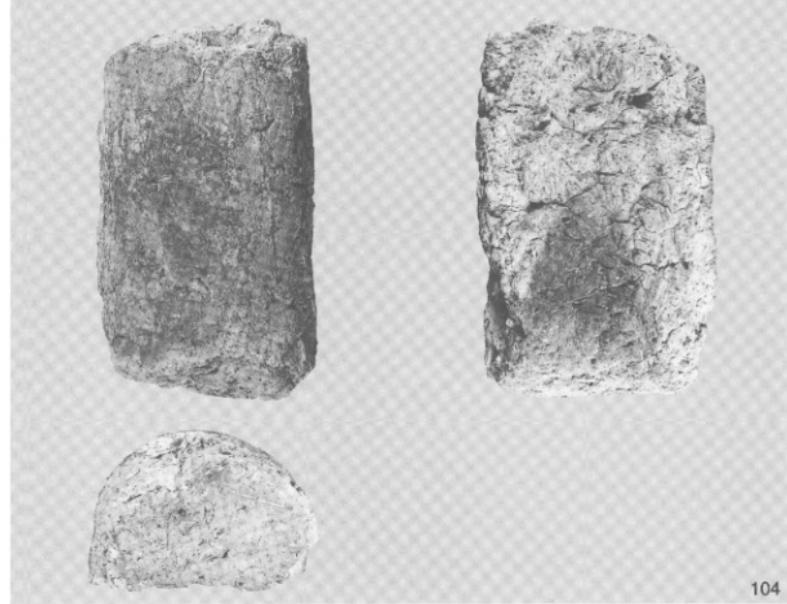


102

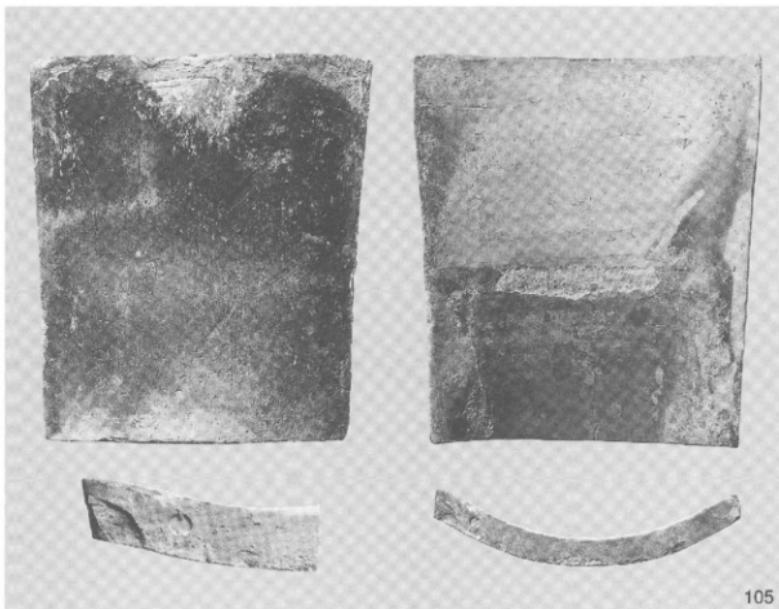
図版28 大釜瓦窯跡出土窯壁材(2)



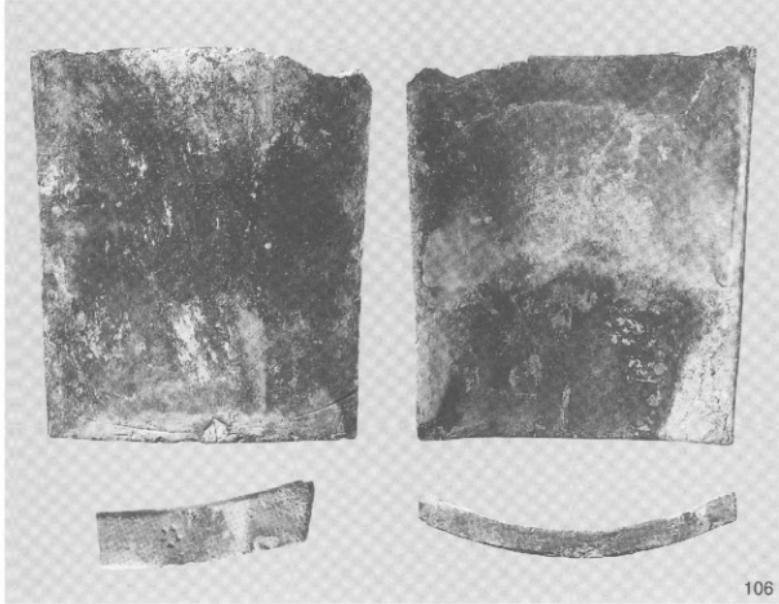
103



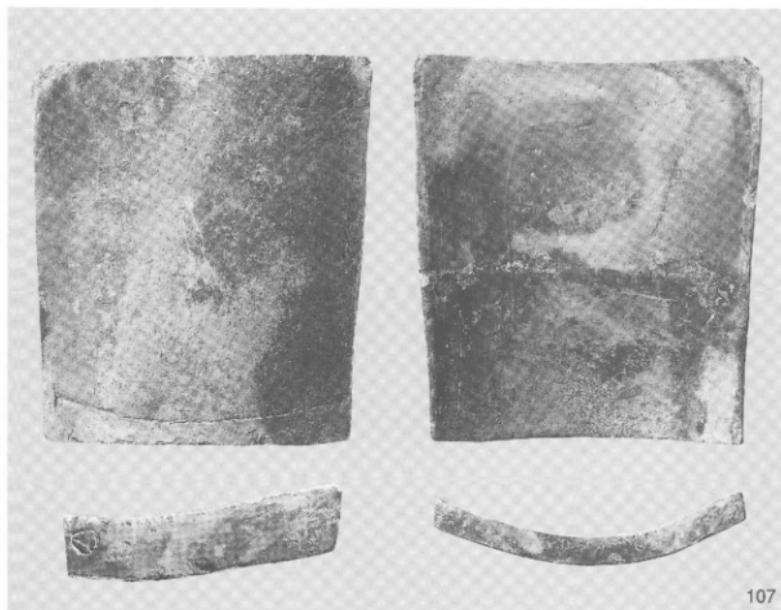
104



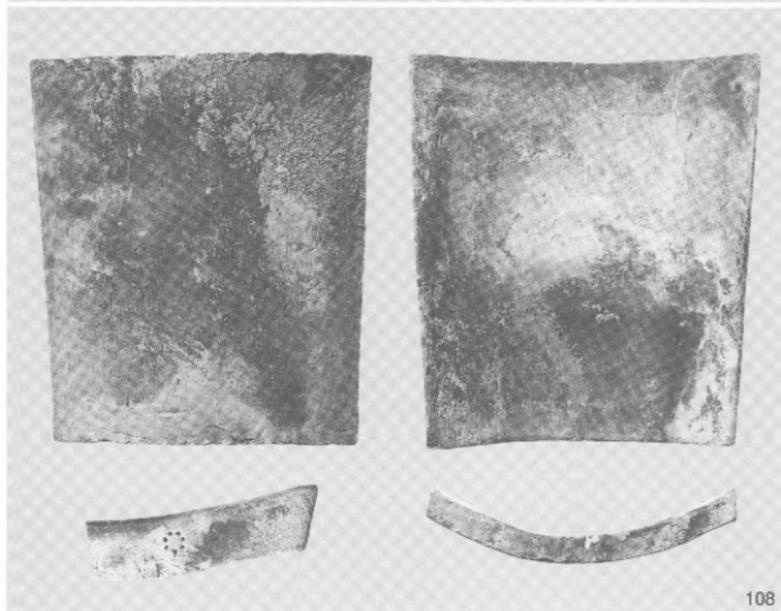
105



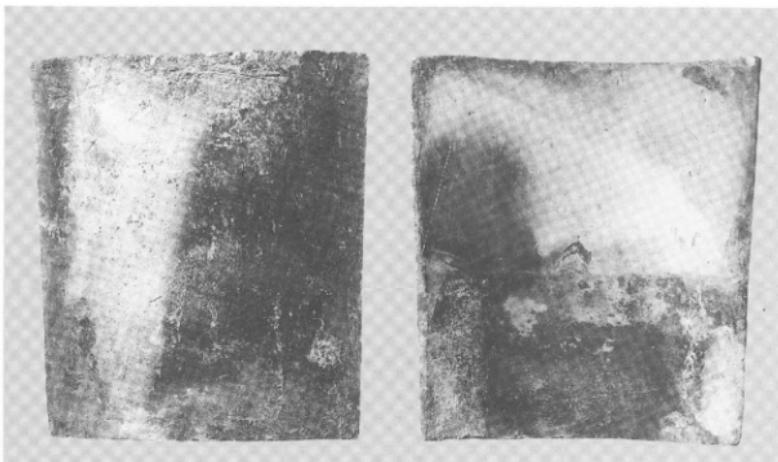
106



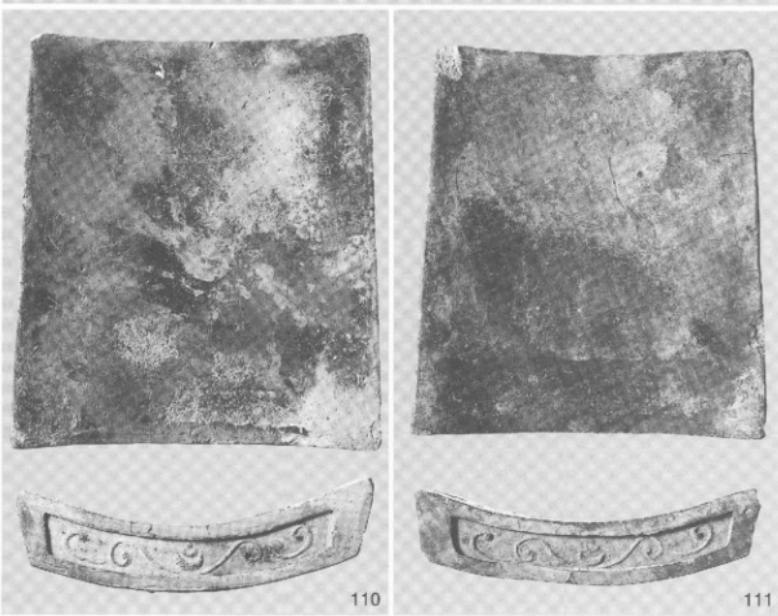
107



108



109



110

111

図版32 一乗寺奥の院南西隅鬼瓦



第42図

兵庫県文化財調査報告 第156冊

兵庫県姫路市所在

大釜瓦窯跡

——山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIII——

平成9年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 日新堂印刷株式会社
